俺、自分の能力判らないですけど、どうしたら良いですか？

朝綾 夏桜希

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

異世界へ赴き、”異彩”を用いて任務をこなす”開拓団”を育成する教育機関、”学園”へと入学した御笠（みかさ）　琥太郎（こたろう）。しかし彼は、異彩の能力すら分からず劣等生のレッテルを貼られてしまう。

で・す・が!!

これ、キーワード見てみ?”恋愛”だぜ?

有りますとも、恋愛。彼女いない歴＝年齢の寂しい非リアどもに次ぐ。ついでにそうじゃないリア充どもにも次ぐ。

お・ま・た・せ☆

ハーレム?始発電車でお帰り願ったよ。さぁ！　野郎共！一人につき、一人のヒロインだぞ?

一夫多妻?我が辞書にそのような文字は無い！

はい、調子乗ってました。すいません。ハードル高すぎでした

昨今のハーレム系に一言物申したい。面白いよ?めっちゃ面白いよ?だけどさ?現実見てみ?やれ、不倫だ、あーだこーだ世間からひっ叩かれるんだぜ?そんな世の中でハーレムはちとハードル高くね?

と、言うわけで！書いてやりましょうとも！思わず「こんな恋愛をしてみたい！」と思うような物語を！

と、言うわけなので、「ハーレムものは、ちょとお腹いっぱいかな

？」って方にオススメなので、暇な時にいかがでしょう？

あ、プロローグはほぼ説明文だから後で読んでも変わらんよ。

目次

第０話～プロローグ～ 1
第一話～入学試験・１～ 3
第二話～入学試験・２～ 11
第三話～入学試験・３～ 17
第四話～騒動～ 27
第五話～向き合うこと～ 35
外伝～とある母親の日常～ 45
第六話～乗り越えたその先～ 49
第七話～市街地ワイバーン戦～ 58
第八話～大きさがすべてではない～ 64
第九話～超新生体～ 69
第十話～避難所にて～ 77
第十一話～執務室にて～ 84
第十二話～前兆～ 97
第十三話～入学式～ 107
第十四話～開花の儀～ 122
第十五話～怒ると怖い人っているよね～ 135
第十六話～友達っていいよね～ 146
第十七話～ランク戦～ 161
第十八話～イケメンとロリコンと～ 182
第二十話～そのころ～ 191

第０話～プロローグ～

ーーー響く、爆音。

重なる、悲鳴。

鳴り響く、雄叫び。

辺りは一面火の海だった。かつて街と呼ばれたその場所は今や化け物どもが人を喰らおうと闊歩している。

「お母さん！ねぇ、おきてよ。ねぇ、ねぇねぇーーー

「やめるんだ！琥太郎、母さんは死んでしまったんだ・・・」

「いいか、よく聞け。お前は今すぐここからはなれろ。もうすぐ化け物どもが血の匂いに気づいてここに来るだろう。だからーーー

「やだっ！お母さん死んでないもんっ！お父さんと一緒に逃げるもん！一緒じゃなきゃやだ！」

「琥太郎!!!」

「っ!!」

「行くんだ、行けっ！」

「う、うぐっ・・・ひぐっ」

駆け出す少年。少年が見えなくなるまで見届けた父は、後ろを振り返り

「よぉ、化け物」

「ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！」

後ろに佇む化け物にそう言ったーーーーー

西暦２４００年。突如として現れた空間の歪み”Ｄゲート”（ｄｉｓｔｏｒｔｉｏｎゲート）から湧き出る”魔物”によって、未曾有の大災害が発生。人類の４０％と１００もの島が海へ沈んだ・・・。Ｄゲートからは、ｉｐウイルス（ｉｎｆｉｎｉｔｅｐｏｓｓｉｂｉｌｔｙウイルス）が発生していたーーー

普段人間の脳は１０％ほどしか使用されていない、しかし、このｉｐウイルスによって残り９０％が解放され、新たに特殊な力を行使

する人間が現れた。”異彩持ち（パレット）”の誕生である。しかし、ｉｐウイルスに耐えることが出来たのはごく一部の者のみ。多くの人が負荷に耐えきれずに死んだーーーー政府はこれを受け、Ｄゲートの即時封鎖と周囲１０キロメートルの避難勧告を発令し、これを封印したーーーーー

ーーーー大災害より５００年、人類は政府とは別のＤゲート管理組織”開拓団”主導で生活習慣、法律、価値観を徐々に変革していった。開拓団はＤゲート及び、大災害に関するそのすべてを担っている。”開拓団”は今や全世界の人々から尊敬され、憧れを向けられる夢の職業となっている。この物語はそんな開拓団に入ることを志した少年少女の物語であるーーーーー

ー世界観ー

近未来の地球が舞台。

突如発生した”大災害”によって人類は大きなダメージを負うこととなる。

それから数百年たった今現在（物語の中）主人公達が覇を競い、開拓団員を目指す。

パレットは一般人よりも身体能力が高い。

世界中に、”色素”が充満している。

第一話～入学試験・１～

西暦２９００三月十日

???「此処か・・・。」

俺は御笠みかさ　琥太郎こたろう。此処は国立開拓団教育機関、通称”学園”。そして今日はその入学試験というわけだ。入学試験の内容は、実技ーＡＩの擬似魔物との戦闘。筆記ーＤゲート、ｉｐウイルス、魔物（プロローグ参照）の基礎知識と言語把握能力テスト。この二つを一定基準クリアすると合格となるーーーまぁ筆記は大丈夫だろ、伝家の宝刀、”一夜漬け”をやったし。実技の方は、あー、あれだ、なるようになれ、ｌｅｔ　ｉｔ　ｂｅ～。

琥太郎「まじで大丈夫か、俺・・・」

???「大丈夫よ。」

琥太郎「そうか？まぁやれるだーーーえ？」

???「どうかしたの？」

琥太郎「うわっ!?」

???「？」

どうかしたの？って顔してやがる・・・てか誰？

初対面なんですけど？顔は・・・うん、めっちゃ整ってる。超美少女なんですけど。透き通るような翡翠色の目。首をかしげる動作に合わせて煌めく銀髪。その動き一つで世の中の男共を虜にするだろうーーーだが何度でも言おう、初対面だからね？いきなり美少女に

話しかけられて動揺しない奴はいないだろう。居たら死ねっリア充めっ！ーーーそんなことを思っている間に彼女は俺の顔の前で手をひらひらさせている

???「おーい」

琥太郎「っ！あぁ、聞こえてる。といかｄ「桧並ひなみ　麗奈れいな」・・・って最後まで聞けよ、、」

麗奈「麗奈でいいよ？」

琥太郎「あ、あぁ。ところで麗奈さんｒ「麗奈」・・あの、しｙ「麗奈」・・・・麗奈、初対面だよね？」

麗奈「ん」

コクリとうなづく。なんか、無口だったり頑固だったり不思議な子だな・・・

琥太郎「麗奈も入学試験を受けに来たのか？」

麗奈「ん」

琥太郎「どうして俺に話しかけたんだ？他にも人は居るだろうに」

麗奈「なん、となく？」

琥太郎「なぜに疑問形・・・・まぁいい。それより試験を受けに来たならお互い、頑張ろうぜ」

麗奈「・・・・。」

って、聞いてねぇやん。ーーハッ、思わず関西弁が出てしまった。
俺関西じゃないのに。麗奈ーーーーー恐ろしい子っ！

麗奈「・・・。」

本当に何やってんだ？目を瞑って鼻をスンスンさせてるがーーーー

麗奈「こっちよ。」

琥太郎「お、おいっ！どこ行くんだよ。」

突然背を向けたかと思うと、いきなり彼女は振り返りそんな事を言いながら俺の腕に抱きつくとずんずん歩き始める。ーーやべぇ、普通喜んで死ねる場面だけど、ま、周りの目が・・・。

「けっ、入学試験に彼女連れってか。けっ」

「腕に抱きかれているだと・・・死ね。」

「リア充がっ!!爆発しろっ!!」

「羨ましい」

ーーー最後のはちょっとやばい気がする。
兎に角、周りの目が痛い（泣）睨み殺されそう・・・

現在時刻は９：００。試験開始は１０：３０なので時間の余裕は

あったりする。だがまぁ普通、こういう時って早めにくるよね？試験勉強したいよね？麗奈、お前はいいのか。

麗奈「大丈夫。」

琥太郎「えっ!?エスパーかお前は。」

麗奈「そう、私はエスパーなの。」

琥太郎「本当か？」

麗奈「嘘よ。」

琥太郎「・・・。」

め、めんどくせー。何この子？マジなんなの？ゴーイングマイウェイ過ぎじゃね？思わず黙っちゃったよ。美少女じゃなかったら殴ってたわ。うん、間違いない。え？差別だって？いやいや、バイト先の店長が可愛い女の子のにはミスしたとしてもニコニコしてるのに、男のバイトには、同じミスでもめっちゃ怒るみたいな？ーーーフッ、人間そんなもんだ。

そんな事を考えている間に目的地に着いたらしい。

って、クレープ屋じゃん。

琥太郎「此処か？」

麗奈「・・・」キラキラ

期待するような眼差しを向けるんじゃない。勘違いしちゃうぞっ。

麗奈「・・・」キラキラ

えっマジで奢らせる気？

麗奈「・・・」キラキラーン

琥太郎「っ、はあ、わかったわかった。だからその目を止めろ」

仕方なく財布の準備をする俺。正直なところ今日はそこまで持って来てないんだけど・・・。

麗奈「」ビシッ！

琥太郎「？・・・ッ!?」

おい待て!?それ幾らすると思ってんだよ！

３６００円!?高っ！ちょうど財布の中身じゃねぇか！買うかボケッ！」

麗奈「そんな・・・」しくしく

琥太郎「そんな目をしても買わん」

麗奈「・・・・ね？」上目遣い

ーーーそれは反則だろ↑ーー結局買った。

麗奈「～♪」

琥太郎「さいですか・・・」

今月の軍資金が・・・。はぁ、仕方ない。こういう時は美少女と仲良くなる為の投資だと思えばいい。うん。それがいい。自分の意思で決めたんだ。ーーケシテウワメヅカイニヤラレタトカジャナイヨ？イイナ？

にしてもさっきのクレープ屋の店員、態度悪かったな～。今麗奈が食べてる、〝　大満足！スーパーダブルパフェ〟（そもそもクレープじゃない）を頼んだ時のあの時の怨めしそうな顔・・・「カップルじゃないんです。初対面なんです。」って言っても信じないだろうな・・・。そんな事を考えている時

麗奈「」スッ

琥太郎「？」

パフェをこちらに差し出してきた。くれんの？てか俺のじゃん、買ったの俺だし。

麗奈「あーん」

琥太郎「!?!?!?／／／」

急にどうなされたんですかッッッ!?何でリア充どもの十八番、ＴＨＥ・あーん♪　をするんですか!?

ーーー何度でも言おう、初・対・面☆だからッ!?

固まって動かない俺をみて、聞こえてないと勘違いしたのか麗奈は

麗奈「・・・あーん♪　／／／」

（♪）付け足した!?しかも照れるなよッッッ！

こっちまで恥ずかしくなるわっ！

麗奈「・・・／／／／」上目遣い

琥太郎「あ、あーん／／／／」パクっ

だから反則だって・・・。因みに美味い。

ん？何か大事な事を忘れてる気が・・・

琥太郎「あああああああああああああああああああああああああああああああッッッ！」

麗奈「!?」ビクッ

しまったァァァ！試験じゃん、入学試験受けにきてんじゃん！ここで　あーん♪　してる場合じゃねぇ！

俺は彼女の手を掴む

琥太郎「行くぞっ！」ガシッ

麗奈「キャッ／／／」

そんな声あげて照れるなよ、恥ずかしいじゃん・・・ってそれよりも間に合うかだ。走れッ！風の如くッ！ーーなんか虚しいから止めよう

頼むっ間に合ってくれ！

第二話〜入学試験・２〜

学園内ー演習場ー

「すいませんでしたァァァァァァ！」

「で、言い訳を聞こうか……」（ニコッ）

１０：３５――――間に合わなかったァァァァァァッ！

やべぇ。どうしよう、めっちゃキレてるんですけどＴ＾Ｔ　俺は大変ご立腹であろう教官を見上げる。眼つきが鋭いが美人である。二十代だろうか。ストレートな髪型が性格を表してるみたいだなぁ。そういえば麗奈と同じ髪と目だ。姉妹かな？

そんな事よりも！　何か言い訳を考えねば。何か、何かあれば――

「……」（ダラダラ）

「ん？どうした。何か相応の理由があるんだろう？」（ニコッ）

言えねぇ……「女の子にパフェ食べさせて貰ってました」なんて言えねぇ……いや、寧ろバレたら終わりだ。絶対バレないようにしよう。確実に地雷となってしまった……。

「琥太郎は悪くないわ。私と一緒にパフェを食べていただけよ」

「はい？」

「ッ!?!?」

何を仰りますかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?　地雷抱きかかえて突っ込んで行きやがった……オワタ？（　？ｏ？　）／

俺の入試終わった……。

――ガツンッ

「へ？」

あまりの光景に思わず間抜けな声を出してしまう。何故って？だって教官に麗奈が頭をひっぱたかれてんだもん。

「何やっとんのじゃボケェェ

――ガツンッ

「痛い。お母さんひどい・・・」

「Ｗｈｙ？」

今なん言った？　お母さん？　え？　教官って麗奈のお母さんなの？　……マジ？　どう見ても二十代なんですけど？

「試験中はお母さんと呼ぶなっ！　教官と呼べ、教官と」
「ん、教官」
「初めからそう呼べ馬鹿。それから・・・御笠　琥太郎さんでしたか？
　うちの馬鹿娘がとんだご迷惑をおかけしました。すいません」
「い、いえ。こちらこそ試験に遅れてしまい申し訳ありませんでした
……」
「許すわ」
「お前が原因だろうがっ」
「冗談よ」
　こんやろぉ……
「……」
「うちの馬鹿が原因だ、今回は特別に試験を受けさせる。いいな？」
　あ、公私の区別をはっきりさせる人なんだ。
「ありがとうございます。よろしくお願いします」

「これより、学園入学試験を開始する。最初は実技だ、ＡＩの魔物との戦闘を行ってもらう。１０分以内討伐したら合格とする。戦闘は６人１組で行うものとする。武器は剣、短剣、弓、槍、盾、籠手より、好きなものを選べ。１５分後より開始とする。なおチームは公平にくじ引きで決めてもらう解散！」
　くじ引きでチーム決めんのか……誰だろう？
　結果――御笠　琥太郎
　　桧並　麗奈
　　櫚原　宗
　　水上　雅也
　　鞠智　澪
　　七瀬　皐月
　男子３人に女子３人か、バランスがいいな。←意味不明　さて、先人切って自己紹介といきますか。

「じゃあ俺かｒ「皐月はね！　皐月だよ！」……えぇ……」
　俺のセリフって盗られる運命にあるのか？
「あとね！　動くのが大好きなんだよ！　それからね！　音楽を聴くのも好きだよ！　皐月って呼んで！」
「「あ、はい（ん）」」
　元気な子だなぁ、ショートボブにアホ毛が動きに合わせてぴょこぴょこ動いてる。しかも幼女体ｋ……げふんげふん。しかも美少女だ。これまたキャラが濃いことで……俺って存在薄くね？よし、ここでしっかり自己紹介をしておこう」
「あの……声にでていますが？」
「ん？　……はっ!!」
　やらかした～、最早お約束となってまいりました心の声がダダ漏れ……死にたい。
「はぁ……」
「元気だしなよ！ため息つくと幸せが逃げてっちゃうよ？」
「そうです。そこまで悲観なさらなくても……」
　この人は大人っぽいなぁ～。美少女というより美人寄りだな。目の下にホクロがある。なんか気品を感じるし、風になびく黒髪が綺麗な人だな。
　その隣にいるのは真面目そうな雰囲気のイケメン。なんとなく爽やかそう。でも何で腰に刀引っさげてんの？
　その隣もまたイケメン。こっちはクールな感じだな。羨ｍｓ、なんでもない。さっきからずっと黙ってるな……なんでだ？ん？　よく見たら寝てる。肝座ってんなぁ……。
　そんなことを考えてたからだろうか。爽やかイケメンが話を切り出した。
「ほな次はわいの番やね。わいのｎ「えぇぇぇぇぇ!?」……ん!?どうかしたんか？」
「その顔で関西弁!?　しかもエセ関西弁!?」
「無いわ～（ありえないですわ）」
「ひどないか!?　顔は関係ないやろ？なぁ？　……まぁぇぇ、わいは、

樋原　宗や。宗でええ。よろしゅうな。」
　強引に流したな……。
「では次は私が。私は鞠智　澪といいますわ。澪とお呼び下さい。皆さんと仲良くできたらと思っております。宜しくお願いします」
　次こそ！
「じゃあ、次いいか？俺は御笠　琥太郎。短い間かもしれないがよろしく」
　よし！　言えた！　……ってまだ寝てんのか。
「あの、そろそろ起きて下さいませんか？」
「ん？　……あ？　……あぁ、すまない」
　マイペースだ、ゴーイングマイウェイだな。
「俺は水上　雅也だ、よろしく。雅也でいい」
　短いが嫌な感じがしない。これがイケメン。
　くっ……！
「桧並　麗奈」
「え？それだけなん？」
「本当に自己紹介だけだね？」
　……そういやお前もマイペースだったっけな。
　◇◇◇◇◇
「まぁ、話を進めよう。みんなの担当をきめたいのだが、教えてくれないか？」
「私は弓ですわ」
「わいはこれや」
　そう言って腰の刀を持ち上げる。
「俺は槍だな」
「皐月はねー？　籠手なの！」
「小剣」
「俺も籠手だな」
「一緒だね！」
「そうだな」
「むっ……」

「じゃあ、前衛は俺、皐月、宗、麗奈。中衛に雅也、後衛に澪だな。戦p「皐月はね？　お家が道場やってたから、格闘できるよ！」……聞けよ……」
「じゃあ、みんなが何の武道を納めていたか聞いてもいいか？」
「わかりました」
「おうよ」
「わかった」
「ん」
「よし、じゃあ俺から。俺は古流武術の不知火流を納めてて、基本なんでもＯＫだ」
「私は東雲流弓術を」
「わいは古流剣術の水影流を納めてる」
「俺は西洋のフィルマック流槍術を納めてる」
「自家流短剣術」
「全員が武術を納めてるか……」
うーん、ここは俺が盾になるべきじゃないのか？
俺＝盾役
皐月、宗、雅也＝攻撃者
澪＝後方支援
麗奈、澪＝揺動
こんなの感じでどうだろうか？うん、即席にしてはいいんじゃないか？
「一つ案があるんだが、いいか？」
「是非お願いしたいですわ」
「おぉ、なんか思いついたんか？」
「話して話して！」
「頼む」
「ん」
琥太郎「わかった。まず、麗奈と澪が揺動を仕掛けて魔物から注意を引く。そこへ宗、皐月、雅也が攻撃。魔物が宗達に攻撃したら俺がガードする。そしたらまた最初から。それと、澪には攻撃時の後方支

援を頼みたいのだが、いいか？」
「それについては、問題ないです。ですが、どうやって攻撃を琥太郎が防ぐのですか？」
「わいも気になるなぁ」
琥太郎「俺の不知火流は主に素手での戦闘を想定している。勿論そこには素手での防御、受け流しの技術も含まれる。それでなんとかするさ」
「ならば、大丈夫そうですね。ですが、無理はしないで下さいよ？」
「わかってる」
「それならいいのです」ニコっ
「ッ！／／／」
ぐ、可愛い……女子との接点があまりない男子にはちょいと毒だな……。
麗奈「……」むっ
「戦法はいい。だけん間合いがつかめんさかい注意せなあかんとちゃう？」
「そうだな。互いの間合いが掴めれば連携がよりスムーズになる」
「はいはいはいはい、はーい！」バッ
「お、どうした？」
「今からみんなで練習するのがいいと思うの！」
「そうですわね。あと１０分ほどありますし」
「ま、いっちょやりますかね。麗奈、始めるぞ」
「ん」
こうして俺たちは準備を終えた。さぁ、試験開始だッ！

第三話～入学試験・３～

「よし、時間だ。これより入学試験実技を開始する。３０秒後にＡＩの魔物を放つ、死にはしないが死ぬほど痛いぞ？」
　怖いこと言わないで下さいよ……。
「へっ、魔物っても偽物だろ？んなもん楽勝だぜっ！」
「だな。サクッと終わらせますか」
「この後近くのクレープ屋さん食べに行かない？」
「いいね！　行こ行こ！」
　教官の言葉を脅し文句と思ったのか、近くにいた別のチームの受験者が話始めた。女子は既に入試後の事を話し合い、男子は……まぁ、あれだ。女子に良いところを見せようと、見栄を張っている。
「フッ、その余裕いつまで続くかな？」
　敵のボスか何かなのか？この人。――教官は今軍服（開拓団の制服）を身につけていて、腰にはレイピアらしき細剣を装備している。軍服は黒を基調としていて、どことなく和のテイストを感じる。世界には日本、アメリカ、中国、イギリス、ロシアの五つのＤゲートがあり、それぞれの国に開拓団の本部がある。なので見分けをつけるためその国を象徴するものだったり、民族衣装などを軍服に取り入れているらしい
「私たちは油断せずに行きましょう」
「そうだな、油断大敵って言葉があるくらいだし」
「せやね。練習通りに行くのがええだろうな」
「ん」
「そうだな、おｒ「よーし！みんながんばろー！」……」
　あ、シュンとしてる。何故だろうか、雅也に親近感を覚えた。ドンマイ、雅也
「１０……９……８……７……６……
「お、そろそろ時間だな。各自役割をしっかりと着実にな」
　一同「「了解（ですわ）（ん）」」
……３……２……１……開始ッ!!」

教官の合図と共に、試験会場のそこかしこに魔物のＡＩが現れる。

「っ!!」

「ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ!!!!」

偽物だってわかっててもやっぱ怖ぇな……8年ぶりくらいか？　けどここで止まるわけにわいかねぇんだよな。——恐怖を堪え、魔物を見据える。

「作戦通りに、麗奈！」

速い……！　小太刀を逆手に二本構えた麗奈は、瞬く間に魔物との距離を詰める。

「ん」ダッ!!

そして、魔物の懐から首筋までを脚のバネと腕の撓りを加えた一撃で、一気にかっ捌いた。

「Ｇａａａａ!?」

魔物から血が吹き出すが、浅いようだ。

にしても、麗奈ってあんなに動けたのか……しかも、一つ一つは浅いが着実にダメージを与えてる。なのに相手を撹乱する事も同時にこなしてる。——実はエリートだったり？　教官の娘だし。

「ＧＡＡＡ！」

焦っているのか魔物の視線が完全に麗奈になってるな。

「澪！」

「わかっていますわ！」

そう言うと、弓を構え、引き絞る澪。静かでありながら、強い意思を宿すその姿は美しく、思わず見惚れる。

限界まで引き絞った弓を、ある一点に定め、放つ。

「Ｇｕｊｄｍｊｇｊ!?」

そして、矢はそののまま吸い込まれるかのように魔物の足関節を貫き砕いた。

当たった!? あんなに素早く動く魔物の足の関節を狙って射ったのか？

「ほぅ・・・」

教官の興味深げな声が乱雑とした試験会場に響く。

よし、魔物が大勢を崩した。狙うなら今だろう。

「宗、皐月、雅也、行くぞ！」

「任せろ！」

「いっくよー！」

「了解した」

「ＧＡＡＡ!!」

一気に攻め込んで来ることを察知したのか、力任せに魔物が右足を振るう魔物。

「ハァッ!!」

俺は魔物の攻撃に合わせ、関節に体重を掛けた右拳による正拳突きを叩き込む。

「!?!?!?」

思わぬカウンターを受け動揺しているようだな。

「ハァッ!!」

スパンッッッ!!　――――宗の放った居合い斬りが魔物の後ろ足を二本同時に切断する。

まじかよ。後ろ足を切断しやがった。あんなエセ関西弁しゃべる癖に。

「やー!!」

ドゴッ!!――可愛らしい声とは裏腹に、魔物の外殻を粉々に打ち砕く皐月。

与えている攻撃はえげつない威力だな……。魔物が血反吐はいてる……うわぁ……。

「フッ!!」

雅也は空中へ飛び上がると、槍を身体に密着させ、自身の全体重を乗せた一突きで魔物の頭を貫いた。

「Ｇｕ、ａａａ・・・」

よし！倒せたな。これで実技は大丈夫だろ。

……あれ？俺って魔物にカウンターしただけであんま活躍してなくね？

「やりましたね！お疲れ様です皆さん」

「やったー！かてたね！」

「無事でなによりだな」

――ん？何か違和感が……。

「あぁ、連携も上手くいってたと思う」

「そうだな。即席でここまで出来たら十分だろう」

「ん、勝った」じーー

「ん？　どうした？　こっちを見つめて。顔になんかついてるか？」

「撫でて」キラキラ

「へ？」

今なんと仰いました？大勢の前で俺に羞恥プレイをしろ

といったのですか……？

「撫でて／／／」上目遣い

――そんな目されたら断れないだろ……。

「お、おぅ」ナデナデ
「～♪」
髪柔らけぇ……。めっちゃシルキータッチなんですけど。
「あー、なるほど……」
「うっ……いやっ、これは、他意は無いからっ！」
「ふぅーん、他意ねぇ？」
「お、そこはもう終わったみたいだ、な――！」
「あ、教官。なんとか倒せ……あっ、いえっ、これは／／／」
慌てて麗奈の頭から手を離す。
「むぅ」ぷくぅ
そんな顔すんなって。後で撫でてやるから。
――教官――
付き合ってるのか？　ねぇ、あの子達は付き合ってるのか？　それに周りの「あ、そういうことね」って目は何だ？でもなぁ～、頭を撫でてただけだし。
いや！　普通付き合ってもないのに撫でないわね。でも早すぎないかしら？　愛に時間は関係ないって言うけどちょっとはやすぎないかしら？　でもこの際どうでもいいわ！　遂に！　遂に娘に春が来たんだわ！
「そうか、そうかぁ……♪」
なんで嬉しそうなんだ？
「これ絶対親公認ですわね」
「あぁ、間違いないだろう」
雅也達がこんな話をしているのを、俺は知らない。
「それよりこっちに来ていいんですか？他の班も見なくちゃいけないんじゃ？」
「あぁ、それならしばらく大丈夫だ。あれを見てみろ」
そう言って教官は後方を指さす――
「うわぁおおぁぁぁぁぁぁぁぁ!!助けてくれぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!」
「っ！　邪魔なんだよ！　ったく、もっと周りをみろよ!!」
「何よ！　そっちが邪魔なんですけど！　男なんだから前に行きなさ

いよ!!」
「そうよそうよ！　あんたが行きなさいよ！」
　あぁ、こりゃ当分かかりそうだな。
「ご覧の通りの有様だ。周り見ず、自分の役割もこなせない。だが、ちらほら連携を見せ始めたグループもある」
　ーグループＴー
「一旦態勢を立て直そう。このままじゃジリ貧だ！」
「わかった！　一旦引こう」

　ーグループＱー
「よし、そのまま引きつけてから一気に叩こう！」
「あと少しだ頑張ろう！」

　確かに。少しずつだが連携が見え始めてるな。
　だが確かに全組が終わるにはまだまだ掛かりそうだな。
「確かにまだ掛かりそうですね」
「だろう？　だから気にすることはない」
「あの、一つ質問をしてもよろしいでしょうか？」
　澪が律儀に挙手をして、教官に質問する。
「なんだ？」
「麗奈さんと同じ髪と目ですが、御姉妹でしょうか？」
「それ俺も気になってた」
「あっ!!」
　――そう言うことか!!やっと違和感の正体が掴めた！
「どうされましたか？」
「どうした？」
「宗、口調が普通になってるぞ」
「――ッ!!　あっ…いやっ…これは……流せ。頼んます」
　何気に戻してやがる。まぁいいが。
「了解」
「そろそろ話を戻しても？」

「すまん、続けてくれ」
「それで、御姉妹なのでしょうか？」
「琥太郎には言ったが他はまだだったな。私と麗奈は親子だ」
「「えぇぇぇぇぇぇぇぇ!!」
　やっぱ驚くよなぁ……見た目二十代だし。
「本当に親子なんですか？姉妹ではなく？」
「そうだが？まぁよく間違えられるからその反応にも慣れたがな」
「麗奈のおかーさんって、わっかーい！」
「マジかよ……姉妹かと思ってた」
　おい、口調がもどってるぞ
「まさか親子とは……」
「本当の事」
　普通驚くよな。教官って二十代にしか見えないし。ナンパとかされてそう。
「街を歩いていると未だにナンパに声を掛けられるんだが、そんなに若く見えるか？」
　うわっ、自覚無いよ。下手に自覚あるより厄介だよ……。
　そんな会話をしている内に他の班も大体が倒し終わったようだ。
「まだ残っている班があるな……時間だ、不合格とする」
「いいんですか？　そんなあっさりで」
「これ以上は時間の無駄だからな」
「そうですか」
　そう言うと教官は一気に魔物へ詰め寄った。
「フッ！」スパパパァァァン!!
「……」
　マジかよ・・・魔物が声すら上げずに細切れになったぞ・・・バケモンか？見ろよ。魔物を倒された班のやつら目を丸くしてるぞ。てか、レイピアって切断目的の武器だっけ？　あんなにブンブン振り回すもんだっけ？
「……何をしたか、全く見えませんでしたわ……」
「わいもや……教官の実力を垣間見た気いがするで」

「あぁ、そうだな。速さには自信があったんだが」
「速かったねー！」
　みんなで教官の技に関して話している間にも、教官は受験者に残酷な結果を伝える。
「残念だが君たちは不合格とする。今すぐここから立ち去りたまえ」
「そんな！　教官が今しがた魔物を倒してしまって不合格？おかしでしょ！」
「そうです！　あと少しで倒せたんです！」
「こいつらが足を引っ張ったからなんです！　だから私たちは合格にして下さい！」
「そうよ！　こいつらがわるいんです！」
　醜いな……満足に攻撃も出来なくて何が「あと少し」だ。みっともない。
「黙れッ！　碌に攻撃もできず、その上班の仲間に責任を押し付け自分は悪くないだと？　一巫（ふ）一山（ざ）一戯（け）るなッ!!恥を知れッ!!」
「っ!!!!!」
　あー、言っちゃたよ。オブラートの”お”の字にすら包まず言っちゃったよ。相当アイツらショックを受け――
「確かに俺が周りを見てなかった。すまん」
「僕もフォローをせずに独断専行をしてました。申し訳ありません」
「私も全然前に出ようとしなかったし……その、ご、こめんなさい！」
「私も後ろで文句言ってるだけで何もしてなかった、ごめん！」

　――受けてなかった。あっれー？　おっかしーなー？　なんか謝りあってるんですけど？　なんで？　今の言葉の何処に諭す言葉があった？　無いよね？　罵倒しただけだよね？　教官のカリスマ性半端なくね？
「教官にも失礼な態度を取ってしまい、申し訳ありませんでした！」
「潔さは認めよう。しかしだからといって不合格が無くなる訳ではないからな？」

「「はい……」」
肩を落とし帰っていく受験者たち。なんなのコレ？
なんでいい話風に終わっちゃった？
「それでは残りの受験者たちは全員合格とする。次の筆記試験も全力を出して臨んでほしい」
「「はい！」」
まぁ、いっか。

第四話～騒動～

「ふぅ～、やっとひと段落だな」
　無事でなによりだな。怪我人も出てないし、平和が一番だ
「だがまだ筆記試験があるからな。油断は出来ないぞ？」
　次は筆記か……面倒くせー。
「皐月は書くのきらいー」
「皐月ちゃんは苦手そうやね。澪はんは寧ろ得意そうやけど」
「確かに筆記は得意ですが……そう言う宗はどうなんです？」
「わいはまぁまぁやね」
「苦手ではないと……こっちは一夜漬けだぞ……」
　イケメンはなんでもありってのか。世の中は実に不公平だ……。
「琥太郎、一夜漬けは頭に入りませんよ？」
「あぁ、澪の言う通りだ」
「せやね」
「そうだぞー！」
「ん」
「おい、後半の二人は明らかにおかしいだろ」
「むぅ～」
「得意」
「皐月は当然として、麗奈って勉強得意なのか？」
「ん」
「意外やわ」
　人は見た目じゃわからんもんだな。宗とか特に
「びっくりだよー！レイレイって勉強できるの!?」
「レイレイ？」
「レイレイの渾名だよ！」
「ん♪」
　気に行ったようだ
「皐月、麗奈に失礼ですよ。事実でも言っていい事と言ってはいけない時があるものですよ」

「……」
「澪はナチュラルに抉ってくるな……」
「あぁ、今めっちゃ自然だった」
「え!?　何か失礼な事を言ってしまったでしょうか？」
「しかも自覚が無いと……」
「タチが悪いな」
「一体何を言ったんですか私は!?」
「いや、気にするな。それはそれで澪のいいところだ」
「正直で真っ直ぐと物事を口に出来る者は中々いないからな」
「なんなんや……この茶番劇」
　そんな事を話していた時。
「う……ん……」
　麗奈が頭を押さえて、呻き出した。
「麗奈？　大丈夫か？」
「少し頭痛がするだけよ」
「大丈夫やないやろ、それ」
「そうだぞ、長引くかもしれない」
「何処かでお休みになられた方がよろしいのでは？」
「レイレイ大丈夫？」
「おい、本当にやｓ――」
　休んだ方がいいんじゃないか？と言おうとした時。
　不意に後ろから大きな衝撃と轟音、そして大勢の悲鳴が聞こえた。
　大勢の人間が学園へと流れ込んでくる。
「ッ!?　なんだ!?」
「街でなんかあったんか!?」
　そして、試験会場に避難してきた一般人いわく、
「ま、魔物！　が、ドカーンって、崩れて！　みんな逃げてきて……助けてくれ！」
　とのことだそうだ。なんのこっちゃ。
　澪「取り敢えず落ち着きましょう。深呼吸をしてみましょう。吸っ

てー、吐いてー、吸ってー、吐いてー」
「すー、はー、すー、はー」
「落ち着きましたか？」
「は、はい！　ありがとうございます。あ、あの！　ま、魔物が街に出て、それで、学園なら安全だろうと思って……」
　魔物が街に？　そんな馬鹿な。普段Ｄゲートは開拓団が監視、及び管理してるんじゃなかったか？　もし開拓団さえ知り得ないＤゲートが街中に開いたなら開拓団の信用を失いかねない大問題だぞ
「話しは聞かせて貰ったぞ」
「「教官!?（お母さん？）」」
「お母さんと呼ぶなっ」がつん
「痛い」
「は？　え？　お母さん？　ご姉妹ではなくて？」
「そんな事はどうでもいい!!」
「す、すいません！」
「教官、私達はこれからどうすれば良いでしょうか？」

「今討伐隊が編成されている、もうじき討伐が開始されるだろう。お前達には避難誘導を手伝ってもらう」
「なんで街中にＤゲートが開いたんですか？」
「それは現在調査中だ。いずれ発表があるだろう。さて、そろそろ行くぞ」
「ほかの受験生はどないするんですか？」
「さっきから見かけていないが……」
「もういっちゃったのかなー？」
「他の受験生は全員逃げた」
「「……え？」」
　え？　何、じゃあただ単に逃げ遅れただけって事か？マジかよ。
「ボサッとするな！　行くぞ！」
「「あ、はい」」
　忙しくなりそうだな……。

◇◇◇◇◇

街は騒然としていた。
逃げ惑う人々、
倒壊する建物、
燃え上がる炎。
「酷いな……」
「こりゃ予想以上やで……」
「怖いよ……」
「これは……」
「……」
「被害が予想より拡大しているな……」
その光景は俺にとある記憶を強く呼び起こした。
◇◇◇◇
「お母さん！　お母さん！　ねぇ、死なないでよ！　ねぇ！」
「ごめんね、琥太郎、一緒に、居てあげ、られなく、て。あな、た、琥太、郎を、守っ、てあげてーー」
「……わかった。絶対に守り抜く。だからせめて安らかに眠ってくれ……京子」

◇◇◇◇◇
「ッ!!」
一瞬顔を歪める。くそッ、こんな時に思い出すなんてな……克服したと思ってたんだがな。
「大丈夫？」
どうやら見られていたらしい。
「っ、あぁ、大丈夫だ」
「本当に大丈夫ですか？　とても辛そうに見えましたけど？」

「さやで、無理はしない方がええで」
　どうやら心配してくれてるようだ。
「本当に何でもない、それよりもう頭痛はいいのか？　麗奈」
「ん、もう収まった」
「ならいいが……」
　このままはぐらかすとしよう。
「ならば行くぞ、やるべき事は山程ある。それと琥太郎」
「あ、はい」
「無理はするなよ、足手まといになったら被害が拡大する」
「何もそこまで言わなくてもいいのでは？」
「コタ兄頑張ってるよ？」
　コタ兄？　誰だそれ？
「コタ兄とは誰だ？」
「んー？コタ兄はね！琥太郎の渾名だよ！」
「あぁ、そ、そうか」
　また付けたのか渾名。これなら全員分ありそうだな。よし、このまま誤魔化そう。
「教官、急ぎましょう」
「あぁ、そうだな」

◇◇◇◇◇

「助けてくれぇ！」
「うわぁぁぁぁぁぁぁあ!!」
　すっげぇ人の数だな……町中の人間が集まってんじゃね？
「お前達、早速避難誘導をしてもらう。避難地は学園。中央通りを真っ直ぐ進ませてくれ。絶対に単独行動はするなよ？　今暴れてる魔物は試験で闘ったＡＩとはわけが違う。生身の人間はまず太刀打ち出来ないだろう。いいか？　絶対に単独行動だけはするなよ？……死ぬぞ。」
「!!」

思わず息を飲む。今までとは纏う覇気が違う。一瞬で弛んでいた空気が引き締まる。
「いいな？　絶対に死ぬなよ」
「はい！」

◇◇◇◇◇

そして、避難誘導が始まった。

「落ち着いて下さい！　ゆっくり、ゆっくりと進んで下さい！」
「おちついてー、大丈夫！　直ぐに倒してくれるからね！」
「早く動けよ！」ドカッ
「ちと落ち着きぃな。お兄さんや、そないかっかしたら進むもんも進まへんで？」

◇◇◇◇◇

「本当に大丈夫なんですか？」
「大丈夫だ、今は落ち着いて避難することだけを考えろ」
「は、はい／／／／」

◇◇◇◇◇

みんな上手く誘導出来ているようだな。麗奈は……。
「ねぇ、本当に大丈夫なんですかっ!?　私達はたすかるんですか!?」
「ん、大丈夫」
「本当ですね!?責任とれるんですか!?」
「……」
「どうなんですか!?」
「こ、琥太郎……」ウルウル

何やってんだ……仕方ない助け舟を出すか。
「只今討伐隊が編成され、討伐に向かっています」
「どちら様で？」
「彼女と同じ受験生です。開拓団の団員の指示により避難誘導をしています。ですのでこちらの誘導に従って頂けないでしょうか？」
有無を言わせぬよう、少し威圧する。
「っ、わ、わかったわよ。従うわよ……少しイライラしてたみたい、ごめんなさい」
「いえ、分かって頂けたならば」
「琥太郎」
「ん？どうした？」
「ありがとう」ニコッ
「っ！あ、あぁ／／／」
何度見ても、顔が熱くなるなぁ……。
麗奈の笑顔に見惚れていると。
「お母さぁぁぁぁん!!」
女の子の泣き声が聞こえてきた。
声のする方へ行くと、小学四年生位の女の子が一人で泣いていた。
「どうしたの？お母さんとはぐれちゃったの？」
「ひぐっ……うっ、うん……」
「どうされました？」
「どないしたん？」
「迷子か？」
女の子の声を聞き付け、皆が集まってきた。
「あぁ、母親とはぐれたらしい」
「ねぇねぇ、お名前はなんて言うのかな？皐月はね？皐月って言うんだよ？」
「こはる……」
「こはるちゃんって言うの？かわいいなまえだね！よろしく、こはるちゃん♪」
「うん！」

「凄いな、皐月。麗奈も見習ってほしいな。」
「むむむ」
　コミュ力が無い麗奈は皐月の手腕に唸りをあげる。
「こはるちゃん、私は澪と言います。よろしくおねがいしますね？」
「うん！」
「わいは宗って言うんや。気軽に呼んでな、こはるちゃん」
「わかったしゅうおにいちゃん！」
「も、もう一回言ってくれへんか？」
「？いいよ！しゅうおにいちゃん！」
「ありがとうな。よし、お兄ちゃんがんばるでぇ」
「マサヤダ。ヨロシク」
　雅也は子どもが苦手なのな。ロボットみたいに片言で喋る雅也は受ける。
「まさやこわい」
「……」
　強く生きろ、雅也。
「俺は琥太郎だ。よろしくな、こはるちゃん」
「うん！」
「麗奈」
「？」
「今のは麗奈だ、無口だけど悪いやつじゃないから仲良くしてやってくれ」
「わかった！よろしくねれいなおねぇちゃん！」
「ん」
「さて、自己紹介も終わったことだし、早速こはるちゃんの母親を探すか」
　一体どこに行ったんだ？

第五話～向き合うこと～

はてさて、一体何処に行ったんだ？　こはるちゃんの母親は。まずはこはるちゃんに聞いてみるか

「こはるちゃん、お母さんと一緒に居た場所って覚えてるかな？」

「うーん、わかんない」

「そっか、わからないか……」

おいおい、いきなり手掛かりがなくなったぞ

取り敢えずこの子の覚えてる範囲で通った道を地道に辿るしかなさそうだな……

「こはるちゃんはここに来るまでに何処を通ったか覚えてるかな？」

こはる「うん！　おぼえてるよ！」

「じゃあ俺を通ったところに案内してくれないかな？」

「いいよ！」

よし、早速案内して貰おう。仮にここに来るまでに母親と別れたなら、今もこはるちゃんを探している可能性が高い。急いだ方がいいな……。

「じゃあ案内よろしくね？」

「うん！」

「と、いうわけだ。今からこの子の母親を探して来る。みんなは避難誘導をしていてくれ」

「ちょいと待ちぃや。単独行動はするなっていわれへんかったか？それにこはるちゃんのお母さんも避難してるかもしれへんのやろ？だったらここで避難誘導をするべきちゃうんか？」

確かに宗の言うことも一理ある。だが、こはるちゃんの母親が避難しているという確証もない。それにもし、なんらなのトラブルに巻き込まれていた場合を考えると探しに行くべきだ。

「いや、俺は探しに行く。こはるちゃんの母親がなんらかのトラブルに巻き込まれている可能性もあるんだぞ？」

「せやけど・・・」

「単独行動で無ければ良いのですね？」

「「澪？」」
　どういう事だ？単独行動で無ければいいって？そりゃあ教官は単独行動はするなって言ってたが……
「どういうことや？」
「文字通りの意味ですわ。宗は単独行動をさせたくない、琥太郎はこはるちゃんの母親を探しに行きたい。ならば二人て行けばいいのです！」
　なんか澪のテンションが高いな……。
「じゃあ誰が俺と一緒に行くんだよ。避難誘導は全員上手く回してるんだから離れられないんじゃ……あっ」
　一人いた。質問責めにされて狼狽えてたやつが。
「そう、麗奈が琥太郎と行けばいいのです！」
「それや！」
「本来なら皐月といって貰いたかったのですが、皐月が居ないと避難が上手くいきませんの」
　確かに皐月は人との距離を縮めるのが上手いからな、混乱する避難誘導には必要不可欠な存在だ。それに、麗奈ってあんま役に立ってないし。
「わかった俺は構わないが麗奈には聞いたのか？」
「それなら大丈夫ですわ。琥太郎が麗奈に頼めばいいのですわ」
「それもそうか。こはるちゃんは麗奈が一緒でもいいかな？」
「いいよ！れいなおねぇちゃんともっとなかよくなりたい！」
「だ、そうだ。じゃあ麗奈に頼んでくる」
「はい、宜しくお願いしますね？」
「了解。」
　ー澪ー
　成功ですわ！ふふっ、全く麗奈も恥ずかしいのか大胆なのかわかりませんね。好きっ！　という気持ちはバンバン伝わってくるのですが……それに気づかない琥太郎も琥太郎ですね。このまま二人がいい感じになったくれると一友人としては喜ばしいのですわ！
　それにしても、何で麗奈は琥太郎の事が好きになったのでしょう？

どうやら、入試の日にあったばかりのようですし。ですがまぁ、恋に時間は関係ないとも言いますもの。今考えてもしょうがないですわ。

「ふふっ」
「どうした？急に笑い出して？」
「っ、な、なんでもありませんわ。」
ー澪ー
あ、あぶなかったですわ、顔に出てしまうなんて、私もまだまだですわね。
「そうか。よし！それじゃ行こうか？」
「うん！」
先ずは麗奈に頼みに行かないとな。受けてくれるといいんだが……。
「麗奈」
「何？」
「今からこはるちゃんの母親を探しに行くんだが、麗奈も来てくれるないか？」
「ん」
「そうか助かる。なら早速こはるちゃんに案内して貰おう。宜しくこはるちゃん」
「うん！まかせて！
「……」
「どうかしたのか？」
「……なんでもない」
「がんばろうね！れいなお姉ちゃん！」
さて、人数も揃ったし、行くとするか。

それから俺たちはこはるちゃんの案内の元、来た道を辿っていった。時々不鮮明な所もあったがそこはまだ子供でこんな状況じゃ仕方ないだろ。そしてたどり着いたのが、いるのは最初に魔物が出現した公園だ。

「ここからよくわかんない」
「そっか。ありがとう」
俺には今一つの仮説がある。もしその通りだとしたらここに母親が居るはずだ。
「少し休憩しようか？流石に歩き疲れちゃったよね」
「うん・・・」
元気が無いな、やはり母親がいなくて寂しいのだろう。そんな中でこの子から離れるのは心苦しいがやるべき事がある。
「少しトイレに行ってくる。麗奈この子を見ててくれ」
「ん」
「すまんが頼む」
もちろんトイレに行く訳じゃない。こはるちゃんの母親を探すのだ、いや、母親だったものと言うべきか。
「あぁ、やっぱここに居たのか、あんた……」
公園内の魔物が出現したと思われる場所。酷く荒れていて遊具などは最早原型を留めていない。そこに誰かを庇うような体勢で背中から内臓が溢れる程の深い傷を負い死んでいる女性の死体が一つ。こはるちゃんの母親だろう。
「こはるちゃんなら無事に保護したよ……だから、せめて安らかに」
こはるちゃんの母親の死体を木の下に横たわせる。後で教官に報告しよう。しっかりと弔って貰わなければ。
「すまん、遅れた」
「いいよ！」
「ん」
さて、俺の目的は達成したがこはるちゃんにどう説明しようか。真実を伝えるにはまだ幼すぎるだろう。仕方ない、こはるちゃんには黙っていることにしよう。
「お母さん見つかった？」
「ま、だだ、よ？う、ひぐっ、うう……」
「大丈夫。きっと見つかるからね？泣いてないで行こう！」
「……うわぁぁぁん!!」ダッ！

「っ!!」
「琥太郎……」
しまった……まだこはるちゃんは6歳なんだ。どれだけ明るく振舞っても寂しいだろうに。母親と離れ離れのこの状況で普通笑顔で居られるわけがない。何が「泣いてないで行こう!」だっ!
くそッ!……そんな事もわかんねぇのか俺は!急いで追いかけないと!
しかしどうしたもんか、こはるちゃんの母親は亡くなっているからまず母親には会えない。かと言って泣いてるこの子に母親が亡くなっている事実を話す事は酷だろう。うーん、駄目だ、何も思いつかん。仕方ない、今はこの子を慰める事に専念しようそしてこの場から今すぐ離れよう。もし母親の遺体がこはるちゃんに見つかったらマズイ。
まてよ?確かその方向はさっき俺が来た方向――

琥太郎「しまッ――」

こはる「おかあさん?」

その瞬間、自分の心臓の、凍りつく音がした。
「おかあさん? ねてるの? まってて! いまおにいちゃんをよんでくるから!」
母親を見つけたこはるが、嬉しそうな顔で此方に走ってくる。

「おにいちゃん！　こっちにきて！　おかあさんがね！　いたの！
こっちこっち！」
「……」
麗奈「？　……行かないの？」
「あぁ……今いくよ……」
俺の声は酷く霞んでいた。
見つかっちまった、もう隠し通す事は出来ない。こはるちゃんは真実を知る事になるだろう。そうなった時俺は何をしてやれるんだ？
「おにいちゃん、ありがとう！　おかあさんみつかったよ！　ねぇ、おかあさんをおこすのてつだって？」
そう言いながらこはるちゃんは母親を起こそうとする。
「ねぇねぇ、お母さん、お兄ちゃん連れて来たよ？　一緒に行こう？
ねぇ、起きてよ、起きってててば～」
当然母親が起きる事はない。もう死んでいるのだから。
中々起きない自身の母親を起こそうと、体を揺すり始める。
「ねぇねぇ起きてよ～」
――ベチャ
「え？」
「……」
こはるちゃんのその小さな手には、母親から出た赤い液体が、べっとりと付いていた。
――ドサリ
こはるちゃんが揺らした事により母親の遺体がうつ伏せに倒れる。
その背中から臓物が垂れ下がり赤い液体が周囲を染め上げる。
こはる「あ、ああ、あぁぁぁぁ……」
「ひっ」
「……」
あぁ、ついに見てしまった、見させてしまった。こんなに小さな子供に、まだ幼いその心に。
「おかあ、さん？　ねぇ、おかあさん？　ねぇ、おきてよう。ひとりにしないでよ！　置いてかないって、寂しくさせないって言ったじゃん

！　うそつき！ねぇ、ねぇ、ねぇ――」

その光景は昔の自分を見ているようだった。

いや、まさしくその通りなのだろう。親父はきっとこんな風に俺を見ていたのだろうか。

この子は賢い。だからこそ、もう母親が戻ってこない事も心の中ではわかっているのだろう。

今ならわかる、この子にどうさせるべきか、親父が俺の背中を押したように、今度は俺がこはるちゃんの背中を押す番だ。同じ体験をしたからこそできる事を

「こはるちゃん」

こはる「ねぇねぇねぇねぇねぇ――」

「こはるッ!!」

「っ!?」

勇気を振り絞れ。親父みたく上手く言葉は掛けられないだろう。もしかしたら伝わらないかもしれない。だけど、今言わなければ、今ここで言わなければ、この子の心が壊れてしまう。

「よく聞け」

親父、俺に勇気をくれ。

「お前の母親は死んだ」

「!!」

「黙っててくれないか」

「琥太郎！」

そう言って麗奈を睨みつける。

すまない、麗奈。だけど今は邪魔をしないでくれ。

「ひっ」

「もう一度言う、お前の母親は死んだ」

「ちがうもん！」

「いいや、違わない。お前の母親はｓ――　「たがうもん！」

「おかあさんは！　おかあさんは、しんでなんかないもん！　けがしてるだけだもん！　まだだいじょうぶだもん！　だからおにいちゃんが助けてくr――「現実を見ろ!!」
「っ・・・！」
こんな小さな子供に何を言ってるんだろうか、俺は。
だって6歳だぞ？　まだ友達と遊んだり親に甘えたりする年齢だ。そんな子供に”現実を見ろ”なんて言っても分かるわけがない。
それに、今の口調もそうだ。ずっと年上の人間からこんなキツイい方をされてるんだ、相当な負担がこの子には今かかってるだろう。
だが、今克服させないといけない、今一歩踏み出させないといけない。
俺が両親の死という過去から立ち直れているのはもちろん周囲の人たちの助けもあるだろう。だが一番大きいのは親父があの日、俺を無理矢理にでも現実と向き合わせたからだと思う。
今すぐは無理だろう。でも向き合わせる事でしっかりと死を実感させ導く事でないと立ち直れないと思う。だから、例え嫌われてでも俺は心を鬼にしてこの子に現実を教える。
「お前の母親は死んだ、これは変えようのない事実だ。だがそれはお前の為なんだ」
「え？」
「俺はお前に嘘を付いていた。さっきは本当はお前の母親の死体を探していたんだ。その時お前の母親はどんな体勢で死んでいたと思う？」
俺はここでこはるの母親を見つけた時の事を話す。
「誰かを庇うように死んでいたさ。庇うように、蹲るようにして死んでた、背中に大きな傷を負ってな」
「！　……それって……」
どうやら麗奈は気付いたらしい。
「これがどういう事か分かるか？……こはる、お前の母親はお前を庇って死んだんだ」
「!!」

どうやら、意味をわかってくれたようだ。
「”私のせいで”なんて思うなよ」
そして、だからこそ、畳み掛ける。
「え、な、なんで！　おかあさんは！　こはるをかばったからしんじゃったんだよ？　こはるがいなければ、こはるが・・・」
やっぱこの子は賢い。母親が死んだ理由をしっかりと受け止めて、どうしてそうなったかを考えている。だから尚更止めなければ。
「勘違いするなッ!!　お前は母親に守られたんだ！　お前の母親は、自分の命よりお前を守ることを選んだんだ！　それを”私がいなければ”だと？　巫山戯るな！　お前は母親の分まで、生きなければいけない！　母親が守ってくれた命だぞ！　お前は母親に胸を張って生きろ！」
「っ!?」
困惑してるだろうな、当然だ。いきなり一人になって、母親が死んで、しかも自分を守る為に死んだと聞かされた。困惑して当然だろう。今の俺に出来るのは、この子に寄り添ってあげる事だけだ。
「いいか、今、ここで、母親に別れを告げて来い。”今までありがとう”って”守ってくれてありがとう”って伝えて来い。いいな？」
「……うん」
其処にはもう、泣き喊る子供はいなかった。今いるのは、母親の死を乗り越えようとする一人の勇気ある少女だ。
「おかあさん……いままでありがとう。……まもってくれてありがとう。……おべんとうをつくってくれてありがとう。……おかあさんのこと大好きだよ。……バイバイ、おかあさん」
「よく出来ました」
上手く伝えれただろうか、伝わってるといいな。
そう思ってこはるの頭を撫でる。
「ありがとう、おにいちゃん」
「え？」
「お兄ちゃんのおかげでこはる、ゆうきがでたよ、ありがとう」

そう言って涙の残る顔で精一杯の笑顔をつくるこはる。
あぁ、よかった。また笑顔がみられて。
――その時、唐突に麗奈がこはるを抱きしめた。
「」ギュッ
「っ!?／／／」
「大丈夫。私達が、一緒だよ?」ナデナデ
「安心、して?」ギュッ
驚いた、まさか麗奈からこはるを抱きしめるなんて。てっきり子供嫌いだと思っていたんだが……。　それに麗奈の顔がとても優しげだ。いつかのパフェを食べた時とは違う、聖母のような慈愛に満ちた微笑を浮かべ、こはるちゃんを抱きしめている。
「うん!ありがとう、れいなおねえちゃん!」
「ん」
これからこはるは苦労することになるだろう。もし、そうなったらこの子を支えてあげよう。俺を支えてくれた人達のように。

外伝～とある母親の日常～

「おかあさん！　きょうね？　がっこうでね？　たくさんはっぴょうしたの！」
「ふふっ、たくさんはっぴょうしたの？　すごいじゃない」
「へへー♪」
「それでね？　ゆかちゃんといっしょにおままごとしたんだよ！」
「楽しかった？」
「うん！」
　全くこの子は何てかわいいのかしら。
　片手に買い物袋、もう片方の手で愛娘と手を繋ぎながらふとそんな事を考える。だって！
「がんばったんだよ？だからほめてっ！」
　と言っているようなもなのよ？　それで誉めると「へへー」ってはにかみながら照れるのよ？　かわいくないわけないじゃない！
　親バカなのは自覚している、だけどあの人が残してくれたこの子に甘くなっちゃうのは仕方ないとも思う。
　夫はこはるを産まれてからすぐに他界してしまいここまで女でひとつで育ててきた。
　両親ともに他界してしているため誰かに相談もできずに今まで育ててきたけれど、我ながらこの子は素直な子に育っていると思う。
　学校での出来事や友達との事を楽しそうに話す姿を見ているとあの人を感じられる。

　そんな愛娘と手を繋いで歩いていると、気品溢れる御婦人が重そうな荷物をもって歩道橋の階段を上ろうとしていた。
「ねぇ、おかあさん。あのおばさんおにもつおもそうだね」
「そうだね？あの人困ってそうだね？」
「こはるあのおばさんなすけてくる！」
　こはるが御婦人の元に走っていく。
「だいじょうぶ～？　おばさん？」

「有り難う。こんな老い耄れの事を気にしてくれて。お嬢さんは優しいのね？」
そう言って階段を昇ろうとしてるけど……本当に大丈夫かしら？
「なんのっ、これしき！」
いやいや、無理しちゃだめでしょ。……あぁあぁ、息切れてるじゃない……。
「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、」
「おばあちゃん、おにもつもってあげるよ！」
「大丈夫ですよ？お嬢さんは気にしないで？」
「だいじょうぶ！」
そう言うとこはるは重そうな、私でも持てなさそうな荷物を片手でひょいっと軽々と持ち上げて、タタッ、と階段を掛け上がる。
「これは……驚きました。お子さん力持ちなんですね？」
明らかに力持ちじゃ済まされないレベルですけどね。
そう、この子は生まれつき常人の2、3倍の身体能力を持っていた。何故かは分からないけど。
普通なら人と大きく違っていたり優れてと威張りそうなものだけどこの子は威張るどころかクラスのいじめっこから友達を守っているらしい。そこもこの子が真っ直ぐ育ってくれてると思う由縁なのだ。何処に出しても恥ずかしくない自慢の愛娘だ。
「おばさん、あかあさん、はやく！　はやく！」
「そんなに急かさなくても行くわよ」
「良くできたお子さんですね」
「我ながら自慢の愛娘です」
「こんな老い耄れのためにあんなに思い荷物を……」
「そんな事言わないでくださいよ、あの子は大丈夫ですから。それにまだまだお若いじゃないですか」
「ふふっ、これでも今年で86になりますのよ？」
「えっ！」
86!?嘘っ!?もっと若いと思ってた……。
「どうされました？鳩が豆鉄砲を食らったようなかおおなされて？」

「っ、す、すいません。つい驚いてしまって・・・」
「いえいえおきになさらず。皆さんその様なお顔をなされますので」
そう言って悪戯な笑みを、ふふっ、と浮かべる御婦人。
なんと言う風格と気品、若い頃は相当モテたんだろうなぁ。
「其れでは行きましょうか、お子さんも待っていますし」
「そ、そうですね、ははは」
二人で階段を昇る。
「おそいよぉ、待ちくたびれちゃった」
「御免なさいね？　少しお話をしていたのよ」
「うん！　いいよ！」
いいのか、娘よ・・・。
「あ、そう言えば貴方のお名前を教えてくださるかしら？」
「こはるだよ！」
「こはるさんね？　可愛いお名前ね？」
「ありがとう！　おばさん何て言うお名前なの？」
「私？　私は美枝子（みえこ）よ」
「みえこさんだね！」
「ふふっ、そうよ。それからこはるさん、どうもありがとう」
「どういたしまして！」
「お母さんも、有り難う御座います」
「あ、い、いえ、此方こそお役に立てたなら幸いです」
「ふふっ、其れでは失礼します。」
そう言って優雅な御婦人はこれまた優雅に去っていった。
「なんだか気品溢れる御婦人だったなぁ」
「きひん？」
どうやら口に出していたようだ
私「そう、気品。あの人のような人に使う言葉だよ」
こはる「ならこはるもさっきのおばさんみたいになりたい！」
「なれるといね？」
こはる「うん！」
全く可愛いなぁ。あ、そうだ。

「こはる、明日は公園にピクニックに行かない？」
「本当!?やったぁー！」
ふふ、喜んでる喜んでる。さて、明日はサンドイッチでも作ろうかな？
そんな事を考えていた私は思ってもみなかったのだ。

まさか明日がこはるとの最後の日になるなんて。

第六話～乗り越えたその先～

～とある少女の記憶～

私「お母さん！早く、行こ！行こ！」
早くいきたいなぁ♪
今日はお母さんと一緒に公園へピクニックに行く日！
お母さんがサンドイッチを作ってくれたの！お母さんのサンドイッチは凄く美味しいから今から待ちきれないの！
私「ねぇ、早く早く！」
お母さん「そんなに急がなくてもピクニックは逃げないわよ」
そんな事言われたってまちきれないんだもんっ！
私「うぅ～、早くいきたいなぁ♪」
お母さん「ふふっ、慌てん坊なんたから」
私「えへへっ／／／」
公園についたらなにしようかな～
ご飯を食べて、遊具で遊んで、お昼寝したり、公園の子と一緒にかけっこもいいなぁ～へへっ
お母さん「よし、準備完了！っと。こはる隊員！準備は完了しているかな？」
もっっっちろん!!
私「準備完了であります！」
お母さん「よろしい。ではピクニックへ出発！」
私「おおー！」
えへへっ、楽しみだなぁ！

お母さん「はい、到着～」
私「到着～」
やっとついた！うぅ～、早く遊びたいなぁ♪
でもその前にお弁当♪お弁当♪

私「お母さん！お弁当食べようよぉ♪」
お母さん「はいはい、今準備するからねぇ～」
お弁当食べ終わったらなにして遊ぼうかな？
まずは遊具で遊ぼうかな？滑り台で遊ぼうかな♪
そう思って遊具の方にめを向けたとき

お母さんがうめきだした
私「お母さん!?大丈夫？どうしたの？」
お母さん「うぅ、だ、大丈夫。少し頭が痛いだけよ、少し休めば……
うぅぅ」
私「本当に？お母さん休めばよくなる？」
お母さん「良くなる良くなる」
そう言って無理やり笑顔を作るお母さん
私「じゃあこはるがお母さんの看病する！」
お母さん「えっ!!」
こはるがお母さんのお医者さんになっちゃおう
私「こはるが今からお医者さんだよ♪」
お母さん「ふふっ、こはるらしいね」
どーんと任せてよ！
周りをみるとと他にも頭痛が辛そうな人がいるお母さんだけじゃないのかな？

この時早くお家に帰れば良かった

遊具の辺りがゆらゆらしてる！なんだろう？そのままじーっと見ていると

ピキッ！パキッ！
何もないところにヒビが入り始めた！えー！なんで？なんでなに

もないところにヒビができるの？
そしてついにヒビが割れた

パリンッ!!
あわわっ、割れちゃった、大丈夫かな？
???「Ｇｕｕｕｕｕｕ……」
私「!?!?」
えっ！なになに！今の声なに!?

バキン！バキッ！ドンッ！ドンッ！

私「っ!!」
割れてるところから音がする……？
ガッシャーン!!
そんな音と共に謎の声の正体が現れた。それは大きなトカゲにコウモリの羽がくっついたようなバケモノだった
バケモノ「ＧＹａａａａａａａａａａ!!」
バケモノが一際大きな声をあげた、ビックリしたこはるは大きな声をあげて叫んでしまった
私「うわぁぁぁぁ!?!!」
バケモノ「!!」ギロッ
私「ひっ……」
バケモノがゆっくり近づいてくる
バケモノ「ＧＹａッＧＹａッＧＹａａａ」
その声は笑っているように聞こえた
怖い、怖い、怖い、怖い——

お母さん「大丈夫よ」

私「おかあ、さん？」
お母さん「大丈夫、こはるは絶対、私が守るから」
そう言って今度は優しそうに微笑んでこはるの事をを抱き締めてくれた
バケモノ「Ｇｕｕｕｕｕ……」
バケモノが近づいてきた、ゆっくり、ゆっくりと、まるで「もういいか？まちくたびれたぞ」と言っているようだった
お母さん「大丈夫」
そう言うとお母さんは私を庇うように抱き締めた。その直後
何かを切り裂くような音と、衝撃によって私はきを失った

～現在～
こはる「……うぅん…お母さん……」
琥太郎「相当疲れたんだろうな」
麗奈「ん、ぐっすり」
俺達は今皆の元へ戻っているところだ。この子の母親のこと、魔物の出現地点を報告しなければ。その後はこの子を避難所へ送り届けよう
琥太郎「麗奈、少しいいか」
麗奈「ん」
琥太郎「教官にこの事を報告したら、この子を避難所へ送り届けたいんだけど、麗奈も一緒に来てくれないか」
麗奈「ん。なんで？」
琥太郎「こはるは麗奈に懐いてるからな、避難所に行く途中で目を覚ましたときに寂しくないだろう？」
麗奈「ん」
琥太郎「助かる」
その後は二人とも会話をせずに黙々と歩き続ける、会話は無いが悪い空気じゃない。むしろ心地いい、俺と麗奈の距離感

この感じにもっと浸っていたかったが、どうやらもう着いてしまったらしい

澪「琥太郎！麗奈！皆さん、二人が帰ってきましたよ！」
宗「ホンマか！」
皐月「お帰りー！」
雅也「どうだった、母親はみつかったのか」
琥太郎「しーっ」
俺は背中にいるこはるに目をやる
宗「おおっと、こはるちゃん寝てたんか。そりゃすまんなぁ」
皐月「おお、じゃあ、しーっ、だね！」
琥太郎「あぁ、それで頼む」
澪「それで、こはるちゃんのお母様は見つかったのですか？」
琥太郎「あぁ、それも兼ねて教官に報告しようと思ってる。教官は何処に？」
澪「教官なら……」
教官「私ならここだ」
一同「「教官！」」
琥太郎「ちょうど良かった、教官、こはるの件なんですが、このではちょっと……」
教官「わかった、そこの路地で聞こう」
澪「私達にも聞かせてほしいのですが」
琥太郎「すまない、後で教えるから今は避難誘導を続けてくれ」
澪「はぁ……わかりました。皆さんには私の方から伝えておきますのでどうぞ行って下さい。」
琥太郎「有り難う、助かる」
教官「話は済んだか」
琥太郎「はい」
教官「ならば行くぞ」
琥太郎「わかりました、それじゃあ行ってくる」
澪「わかりました」

～路地裏～

教官「で？その子の母親は見つかったのか」
琥太郎「はい、母親自体は見つかりました」
教官「自体は？」
琥太郎「こはるの母親は……亡くなっていました」
教官「そうか。それで？その子は知っているのか？」
琥太郎「……はい。そして乗り越えようとしています」
教官「そうか、強い子なんだな」
琥太郎「はい。それから、このままこはるを避難所につれていこうと思うのですが」
教官「あぁ、かまわない」
琥太郎「有り難う御座います。それと麗奈も連れて行っても良いでしょうか」
教官「麗奈を？」

琥太郎「はい、こはるは麗奈に懐いているので」
教官「そ、そうか。わかったつれていけ。それと、しばらくその子のそばにいてやれ」
琥太郎「有り難う御座います。にしても珍しいですね。そんな優し人みたいな事をいうんですね？」
教官「あぁぁ？」
琥太郎「すいませんでした！……それと、魔物の方はどうなっていますか？」
教官「ったく、調子のいいやつめ。まぁいい、思いの外苦戦しているようだ。タイプはワイバーンでCランクだが、ビルの合間を飛んで攻撃をかわしているようだ」
琥太郎「わかりました、ならもう少しかかりそうですね」
教官「あぁ、だがもうすぐ避難誘導も終る、そしたらお前たちも避難しろ」

琥太郎「了解しました、其れでは」
教官「わかった、死ぬなよ」
琥太郎「了解」
さて、それじゃあ行きますかね
琥太郎「麗奈」
麗奈「ん」
澪「おきお付けて」
琥太郎「あぁ、行ってくる」
宗「いってら～、気いつけぇよ」
皐月「いってらーしゃーい！」
雅也「きおつけろよ」
琥太郎「あぁ」
麗奈「ん」
よし、行こうか
琥太郎「すまんな、麗奈。付き合わせて」
麗奈「ん、気にしてない」
琥太郎「そうか」
まだ、この感じ、心地いいこの感じ。魔物が暴れている時に考える事じゃないとは思うがやっぱ心地いい
そんな心地良さに浸っていると
一般人「みてみて、あれ。兄妹かな」
一般人「仲が良いのねぇ」
一般人「え、でもみて。あの人の隣にいる人。めっちゃ可愛くない!?」
一般人「ほんとだ！彼女さんかな？」
一般人「でも、それじゃああの背中の子は？」
一般人「もしかして……」
一般人「「キャー／／／」」
一体何を想像したんだ!?兄妹は分かる、カップルの件についても周りからそう見えただけだ。けど最後のはなんだ!?何を想像したんだ!?

おいっ、何ニヤニヤしてんだ！
琥太郎「はぁ～」
麗奈「？」
麗奈は気づいてないのか、まぁマイペースだし。むしろその方が都合がいい、こんな奴の彼氏にされても迷惑なだけだろう。知らぬが仏という言葉もあることだし
こはる「ん、んんん、ぅぅ。お兄ちゃん？」
琥太郎「おっ、起こしたか？」
こはる「うんん、そんな事ないよ」
琥太郎「そうか、今避難所に向かってる所だ」
こはる「そこについたら居なくなっちゃうの？」
琥太郎「そんなことないぞ。傍にいてやる、麗奈も一緒だ」
こはる「本当!?」
麗奈「ん？一緒」
あれ？言ってなかったっけ？まぁいいや
琥太郎「だからもう少しの辛抱だからな」
こはる「うん！頑張る！」
琥太郎「いい子だ」ナデナデ
こはる「えへへ／／／」
麗奈「……」じーっ
琥太郎「どうした？」
麗奈「私も」
琥太郎「へ？」
麗奈「私も撫でて」
そう言って頭を突きだしてくる麗奈
犬かお主はっ！
琥太郎「いいよ」ナデナデ
麗奈「～♪」
ホントに犬みたいだな。いや、なに考えてるかわからんから猫か？
うん、猫だな随分人懐っこいけど。←わかってない
お、そうこうしてるうちにそろそろ着きそうだな

琥太郎「もうすぐ着くぞ」
こはる「うん！」
麗奈「ん」

早く魔物が討伐されることを祈りますかね

第七話～市街地ワイバーン戦～

～琥太郎達が避難所に着いた頃～

ワイバーン「ＧＹＡＡＡＡＡＡＡ!!」

俺「っ、くそッ！ちょこまかうごきやがってえ!!」

ーー俺はフィジカルブーストを自身に施し大戦斧（ハルバート）をクソトカゲ目掛けて投擲する。

ワイバーン「ＧＹＡＡＡＡＡＡＡＡ!!」

ーーそれをビル群を使って避けたクソトカゲ急旋回して突撃してくる。

女学生「ワイバーンの癖に速いわね・・・・反射盾（リフレクトシールド）！」

リラがカウンター障壁を展開する。反射盾は相手の攻撃を３０％相手に反射する色彩魔術だ。

ワイバーン「ＧＹＡ!?」

いきなりクソトカゲの放ったブレスが帰って来て驚いてやがる。ざまぁねぇぜ。ま、そこまでダメージはないだろうがな。

リラ「まだまだぁ！炎の狩猟犬隊（フレイムハウンドドッグズ）!!」

ーー八匹のシェパード状の炎がクソトカゲ目掛けて空中を駆ける。フレイムハウンドドッグが避けもしないクソトカゲに噛みつき、爆破した。

ワイバーン「Ｇｙｔａｇｔａｔｇｍｐａｗｔｗｐａｐ!!」

流石に効いたみたいだな、無様に叫びやがって。

リラ「もう、一丁!!」

ーー再び八匹のフレイムハウンドドッグがクソトカゲ目掛けて空中を駆ける。

ーーーー掛かった。

クソトカゲはフレイムハウンドドッグどもを避けて間抜けにビル群から出て来やがったぜ。さて、もうすぐ本命が帰って来る。それまでフレイムハウンドドッグズで囲っとけば終わりだな。あぁ～うざかったぜ、チョロチョロ動き回りやがって。

俺「リラ、そのままクソトカゲの身動きを封じてろ。その間に殺る」

リラ「分かってるわよ。いちいち上から目線で言わないで」
俺「へいへい」
よし、来た来た。
ークソトカゲの後方に回転する何か
そう、あれは俺が投げた大戦斧だ。これでもフィジカルブーストには自身があるからな。
ワイバーン「？・・・・・!?」
チッ、気づかれたか。まぁいい。回りはフレイムハウンドドッグで囲まれてる。近づけば噛みつかれてそのまま連鎖爆発でお陀仏だ。
ーーーーさぁ、真っ二つになりやがれ!!
ワイバーン「ｇｍｐｍｔ!!!!・・・・ａｇｗｇ・・・・ｊｐｍｑｍｔ・・・・」
ーーまともに食らったクソトカゲがビル群の方に墜ちていく。
俺「よし、討伐完了だな。にしても中々しぶとかったな」
リラ「ええ、そうね。ワイバーン種にしては頭が回るようね。其れより本部に連絡しておいて」
俺は「はぁ!?なんで俺なんだよ！」
リラ「は？何言ってるの？あなた斧ぶん投げただけでしょ？」
俺「うっ」
いや、確かにそうだけどよぉ。何か違くね？
俺「止めを指したのは俺だろう？」
リラ「なら、どうしてあなたのぶん投げた斧はワイバーンに刺さったんでしょうか？」
俺「うっ、そ、それは・・・・」
痛いところを突いてきやがる。全くコイツには口で勝てそうにねぇわやっぱ。しっかしなぁ～、めんどくせぇなぁ～。もし、アイツが応答しに来たらと考えると寒気がする。あんな堅物と話してるとこっちまで髪型が七三になるっつーの」
リラ「声に出てるわよ」
俺「・・・・何処からだ」
リラ「”あんな堅物と話してるとこっちまで髪型が七三になるっつーの”って所かしらね？」

Ｏｈ　ｍｙ　ｇｏｔ・・・・。ハハッ、なんてこった。これじゃあｍｙｂｏｄｙとｍｙｆａｃｅがｇｏｏｄ―ｂｙｅしちゃうよ☆
ーーーハッ、危ねぇ。危うく仕事できるけど意味わからん英語使うから絡みづらい外資系のワンマン社長みたいなキャラに成り下がる所だったぜ☆、、俺はもう駄目かもしれない・・・。
リラ「ーーーフ！」
リラ「ーーセフ！」
ん？
リラ「ジョセフ！」
俺「あ？あぁ、すまん、考え事してたわ」
リラ「は？あんたが考え事？何を言っているの？病院、行っとく？」
俺「おい、どう言うことだ。あ？お前の中での俺ってなんなの？てか、俺の名前はジョセフじゃねぇ！どっからジョセフ出てきたんだよ」
時々コイツは唐突にボケる。頭湧いてんのかね？というか俺が考え事してるのはそんなに可笑しいのか？
リラ「そんな事はどうでもいいの。其れよりも本部への報告の方が先でしょ？」
いいのかよ！軽く流し過ぎだろ！まぁ、そうだが。
俺「はぁ、わかったわかった。俺が本部に連絡しとくから。お前はクソトカゲが一応死んでるか確認な」
リラ「了解。あ、ワイバーン墜ちてったので、どっちだっけ？」
俺「向こうだ。それぐらい覚えとけ」
ビル群の方を指差しながら愚痴る。これくらいの愚痴はいいだろう？今からアイツが出るかもしれん本部に連絡し無きゃならねぇんだぞ？
リラ「はいはい。じゃ、お願いね？」
俺「とっとと行け」
肩を竦めながらやれやれだぜとでも言いたげな表情でビル群へ歩いていくリラ。腹立つわぁ。
さて、こっちも連絡すっかね。あ～、気乗りしねぇ。

俺「ふぅ～。よし！腹くくってやんよ！」
俺は通信機を取り出して本部への連絡ボタンを押す。
Ｐーーーーーｐｐｐ　ｐｐｐ　ｐｐｐ　ｐｐ
本部「はい、こちら本部。ワイバーン討伐に向かわれた三年生のチームですね」
っしゃぁぁぁぁ!!アイツじゃねぇ！
俺「ああ、クソトｋーーワイバーンは討伐完了だ」
本部「了解しました。こちらの方でもワイバーンの生命反応が途絶えたのを確認しました、お疲れさまです。本部に帰還してください」
俺「了解」
通信を切る。ふぅー、やっと終わったぜ。
にしてもリラのやつ遅くねぇか？クソトカゲが墜ちてった何処からここまでそんなに離れちゃいねぇだろ。一体どこでみちくｓーーーー
ーーその時衝大きな撃音と共に何かが俺の横を通りすぎ近くの建物に激突した。
俺「ッ!?な、何だぁ？」
一瞬で起こったことに頭が追い付かず混乱する。その時、何かが激突したであろう建物からリラが出てきた。
リラ「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ」
俺「おいッ！何があったってんだよ!?」
リラ「今すぐここから離れるわよッ！」
俺「は!?何でだよ!?」
意味がわからん。いきなりリラがすっ飛んできたかと思えばいきなりここから離れるって何なんだよ
リラ「アイツが来る前に早くここから離れなかきゃ！アイツが来たら死ぬわよ！」
俺「は？クソトカゲはもう倒したろうが。何焦ってんだよ」
リラ「いいからッ!!!!」
俺「!!」
コイツがここまで焦ってるのを初めて見た。何か新しく魔物が発

生でもしたのか？

ーーーーこの時もし、リラの言う事を聞いて早く逃げていれば。

???「ｍｊｍｐｊｑｊｐｊｐｗｐｊａｐｗｐｊｐｄｐｗｐ!!!」

ッ!?何だ、今の。声、なのか？　クソトカゲならいましがたぶっ殺したばっかだぞ？

リラ「き、来た」

俺「何が来たんだよ」

リラ「正真正銘の化け物よ。もう逃げることは出来そうに無いわ。覚悟を決めて。なんとか耐えて応援を呼ぶのよ」

俺「魔物が出たのか？それに応援を呼べってそこまでの相手なのか？自惚れちゃいないが下手な団員より力は有ると思ってるんだが？」

リラ「あんなのＡ級以上の団員じゃないと無理よ。だから耐えるの、なんとしてでも生き延びるのよ。」

俺「そこまでかよ・・・・」

まじかよ。そんなやつと今から俺らは殺り合わなきゃいけねぇのか。もしかしたら死ぬかもな。ま、そんなのとっくの昔に覚悟を決めてんだけどな。

姉の殺されたあの日から。

俺「そうか。よし、やろう」

リラ「随分あっさりしてるのね？もっと色々文句を言うかと思ったんだけど？」

俺「バカ。んなもんとっくｎーーー

???「ｍｐｊｐａｐ・・・・」

俺はこれまでいろんな魔物と殺し合って来た。殺気に当てられるなんてこともよくある。だが、アイツがこの場に来た途端に俺は死を錯覚した。いや、一度死んだ。

それは龍だった。四足の強靭な足、全身を覆う強固な鱗、すらりと

伸びた尾はしなやかさと、強靭さをひめている。さらにはさっき殺したワイバーンと同じ身体の位置に切り裂かれた傷痕がある漆黒の龍。
身体中から血管が浮き出ていてまるで溶岩のような色の血液が循環している。
この時初めて”圧倒的な死”を見た。その目は憎悪と憤怒、そして深い殺意に溢れた目をしていた。
そりゃそうだ。俺の予想がただしけりゃ、この龍はさっき俺らが殺したワイバーンなんだから。
それに俺の予想が正しけりゃあれは”超新生体(ちょうしんせいたい)”だ。

ー超新生体ー
超新生体は極希に瀕死の魔物が爆発的なｉｐウイルスの暴走により、肉体の限界を超えて甦った魔物の個体。超新生体は一種のバーサーカー状態になるため、非常に強力な力と引き換えに個体差はあれど寿命は持って１０分前後となる。

俺「もしかして、さっき殺したワイバーンなのか？あの龍。しかも超新生体だろ？」
リラ「えぇ……多分ね」
声を震わせながら答えるリラ
俺「ハハッ、こりゃ人生詰んだかもな……」
そんな軽口もこの場じゃ笑えない。実際に今のコイツなら俺らは一捻りだろう
リラ「いい？なんとしても生き延びるわよ」
俺「たりめーよ。こんなところで死んでたまるかっての」
リラ「今はあんたのその軽口が頼もしく思えるわね」
俺「ハハハ……行くぞ」
リラ「えぇ」

人生最大の生死の分岐点、俺はここを乗り越える。

第八話～大きさがすべてではない～

私「はぁ～。やっと終わりましたね」
まさかここまで避難誘導が激務だとは・・・・。
教官は絶対にこうなると分かっていて私達に避難誘導を手伝わせたに違いありません。
其れなのに一切表情を変えずに指示を出すなんて、流石開拓団屈指の名指揮官といったところですわね。
宗「あぁ、疲れた・・・・。マジで、死ぬぞ、これ」
雅也「そうだな。流石に、これはキツイ。それと宗、口調が、もと、に戻ってるぞ」
宗「うっ、ほ、ほんま疲れたなぁ～」
宗は動揺したりすると口調が元に戻りますが疲れても戻ってしまうようですね。何故宗はエセ関西弁で話そうとするのでしょうか？今度質問してみましょうか？
皆さん息を切らしていますね。走っていたわけではないのですが、其れほどに皆さんお疲れなのでしょう。
書く言う私もヘトヘトなんですがね。
皐月「終わったねー！それじゃあ皐月達も避難所にしゅっぱーつ！」
約一名その限りでない方が居ました・・・・
皐月は本当に元気がいいですね。見ているだけで心がなごみます。彼女ほど純粋な目をした人を私は今まで見たことがありません。
私が普段目にするのは、濁っていて、厭らしい目を向けてくる政治家や何かしらの組織の上層部の方々でしたので、皐月のような純粋な目を見ると心が浄化されていきます。
私「本当に、落ち着く・・・・」
皐月「ん？」
私「いえ、なんでもありません」
皐月「そお？」
思わず口に出ていたようです、気を引き締めなければ。

其れにしても不思議そうに首を傾げる皐月も可愛いですね。思わず抱き締めてしまいたくなります。
宗「皐月ちゃんは元気やねぇ、こっちはダウン寸前やってのに」
雅也「本当にその身体の何処にエネルギーが詰まってるんだ？」
そう言って雅也さんは首を傾げます。
宗「アハハ、確かにそうやね。でも、そこがいいんよ元気っ子で尚且つ幼女体型、加えて年齢は高校生。完璧な合法ロｒーー」
皐月「・・・・。」ニコッ
雅也・宗「「ひっ・・・・」」
皐月は顔こそ笑っていますがこめかみに青筋が・・・・。
皐月「完璧な、何だって？　その身体のってどういう意味なのかな？」ニコッ
宗「あ、いや、そ、其れはッ・・・・」
雅也「ち、違うんだ！あ、あれは、その、こ、言葉のあやと言うかなんと言うか・・・・」
宗「そ、そうそう！言葉のあやです！あや！」
雅也「だから、その、なんと言うか・・・・」
皐月「で？結局、何が言いたいのかな？」ニコッ
雅也・宗「「た、大変申し訳ございませんでしたァァァ!!」」
皐月「皐月は謝ってなんていってないよ？ただ、さっき二人は何て言おうとしたのかが聞きたいだけだよ？」
雅也・宗「「ひ、ひぃぃぃぃ!?!?!?」」
い、今、私には皐月の後ろに不動明王が鎮座して見えます。きっと二人にも同じものが見えているのでしょう。
どうしましょう。今の皐月はとても私には止められそうにないのですが・・・・。
まぁ、自業自得と言ってしまえば其れで終わってしまうのですが。
その時です、救世主が現れたのは。
教官「皐月、その辺にしておいてやれ」
雅也・宗・皐月・私「「教官！」」
か、神様ァ!!神様です！遂に私達の元に神が舞い降りたのです！

皐月「でもぉ・・・・。酷いよ二人とも！」
雅也・宗「「も、申し開きも御座いません・・・・」」
教官「二人とも悪気があったわけではないのだろう？」
凄まじい速度で首を縦に振る二人。正直に言って情けないですね・・・・。
それもまぁ仕方がないのですが。今の皐月からは何かただならぬオーラを感じます。
教官「なら許してやれ。それに幼女体型なのは事実だし、悔しいなら努力しろ。そもそもこいつらはお前の事を馬鹿にはしてないぞ？なぁ？」
雅也「そ、そうだ。俺は別に馬鹿にしたんじゃなくて、俺より小さいのに体力が俺より有ることに感心していただけだ。」
宗「そ、そうなんだよ！其れにおれは今の皐月ちゃん好きだから、ね？」
私「えっ!?」
まさか、こはるちゃんの時にも思いましたが宗はもしかして・・・・。
教官「ん？宗はロリコンなのか？」
きょ、教官ストレートすぎます！もう少しオブラートに包んで下さいよ！それに、そうなると皐月に遠回しに・・・・
皐月「教官!!皐月はそんなに貧相ですか!?そんなに絶壁ですか!?いいですねぇ、教官はそれはもう、バインバインのポヨンポヨンですもんねッ！皐月みたいなゴリゴリ肋骨が当たる絶壁女の気持ちなんてわからないですもんねッ!?」
教官「えっ、あ、いやっ・・・・その、申し訳ない」
教官が謝った!?其れに気にしてたんですか、胸のこと・・・・。
ここは友人として励まさねば！
私「皐月、大丈夫ですよ？　たとえ皐月みたいに絶壁でも世の中には皐月のような幼女体型が好みの物好きな方がいるかもしれないですから、ね？」
ふっふっふっ、我ながら完璧なフォローが出来ました。
これならお二人に対する気持ちも落ち着くは、ず？

雅也「出た・・・・」
宗「うわぁお・・・・」
教官「お、おい。わざとなのか？」
私「えっ!?何でですか!?私何か変なことでも言いましたか!?」
何でだそんな”マジで？わざとじゃないの？”みたいな顔で私をみてるんですか!?
宗「変と言うか、抉ると言うか・・・・。寧ろトドメじゃね？」
雅也「やはり自覚は無しか・・・・。恐ろしいな」
教官「これを無意識にだと？ある意味才能を感じるぞ？私は」
何を言ったんですか私は!?
そんないたたまれない顔で私を見ないでください!!
皐月「ふふっ、絶壁、絶壁、ペッタンコ♪
私は、私は、ペッタンコ♪
教官と、違って、ペッタンコ♪
澪と、違って、ペッタンコ♪
麗奈、よりも、ペッタンコ♪
ゴリゴリ、肋骨、ペッタンコ～♪」
教官・雅也・宗「「何て不敏なんだッ・・・・」」
私「皐月ー!?」
さ、皐月が、皐月が壊れた!?
虚ろな目で自分の胸を被虐する歌を歌うなんて・・・・。
元の皐月に戻って!?
私「さ、皐月？お願い、元にもどって!?」
皐月「？　いいのんだよ？ほんとのことだもん。此れからは”絶壁ちゃん”って呼んで？」
私「戻ってきて皐月ー!?」
教官「と、取り敢えず避難所へ行こう。避難所には優秀な精神科医も控えてるはずだ、急ぐぞ」
雅也「皐月、すまない・・・・」
宗「皐月ちゃん・・・・。ごめんな」
教官「その、大きくてすまん・・・・」

その後はとにかく身体に関する話題は一切禁止で向かっていたのですが、宗が口を滑らせ、教官が皐月を宥めたところ、
皐月「詐欺顔、黙れ」
と、宗にクリティカルヒットを浴びせ、
皐月「乳でか大年増は黙ってて」
と、教官のライフを削り取り・・・・

澪「と、言うことがありまして・・・・」
俺「・・・・なんと言うか、その、御苦労様です」
澪「あはは・・・・。はぁ」
麗奈「元気出す」ポンポン
麗奈が澪の肩をポンポンしてる。心なしか同情の眼差しをしてるようだ。お前は寧ろ苦労させる側だろう。
宗「俺が、詐欺顔・・・・詐欺、顔・・・・」グスン
教官「乳でか大年増・・・・乳でか、大年増・・・・」グスン
皐月「絶壁、絶壁、私は絶壁。ツルッツルのペッタンコ♪」

俺にどうしろと?こはるのことだってあるってのに、こんな厄介なのを連れてこられてもなぁ・・・・。
精神科医の人も若干引いてるじゃん。プロを引かせるとか厄介過ぎだろ・・・・。
これからの事に頭を悩ませそうだ・・・・。

第九話～超新生体～

一体の龍がそこにいた。
その龍から放たれる圧倒的な圧力――”龍圧”
一部の龍種のみが放つ事ができる選別の力。強者と弱者とを選別する試練、それが龍圧。
???「ハハッ、まさか学生の俺らが龍の、それも超新生体の”龍圧”を受ける事になるなんてな。……笑えねぇ冗談だ」
そう言って話しかけて来る彼――ドミニク＝大石――ドミニクが笑う。
私「声が震えてるわよ」
ドミニク「お前もな」
私「うるさいわよ」
しょうがないでしょ……こんな濃密な殺気の篭った龍圧を受けて震えない方が異常よ。
龍が殺意の篭った目を私達に向ける。
龍「ｊｔｊｐｔｊｔａｔａｊｍｊａｔａｊａ!!」
次の瞬間、龍が咆哮を上げる。
たったそれだけ、特別な事をした訳では無い。しかし、それだけでビルの窓が割れ、体も踏み止まらなければ容易に飛ばされそうになる。
私「ただの咆哮でこれ!?　こんなの、色素が込められていたら一たまりもないわよ!?」
ドミニク「んな事は分かってんだよ！　震えてたって仕方ねぇだろが！　耐えるって決めただろ！　こっからは自分を信じる事だ、一瞬のでも集中を切らしたら死ぬぞ！」
私「分かってるわよ！　そんな事ぐらい……分かってるわよ……」
震えは相変わらず止まらない。だけど、止めるしかない。ここからは０，１秒の迷いが生死を分ける極限の領域。
私は、信じる。自分が生きて帰る事を。
私「ごめん、もういいわ」

ドミニク「よし！　……行くぞ!!」
私・ドミニク「「フィジカルブースト!!」」
色彩闘術・初級”身体強化”
肉体に色素を纏わせ強度や能力を引き上げる。強制的に引き上げる為、慣れていない者や長時間の使用により肉体へ負荷が掛かる。
ドミニク「いつもの戦法だ、行くぞ!!」
私「了解！　”炎の兵隊蟻（フレイムソルジャーアント）!!”」
一体あたり数センチの蟻型の炎が何千何万もの大群で龍に襲い掛かる。
龍「……!!」
カッ、と龍が目を見開いた途端、兵隊蟻がすべて吹き飛ばされた。
私「嘘でしょ……」
兵隊蟻は私の中でもかなりの威力と拘束力があるはずなのに……。
ドミニク「リラッ！　拘束に専念しろ！」
私「なら、これで、どう！かの者を縛り、封じ、戒めよ！
”煉獄の獄牢（れんごくのごくろう）!!”」
はじき飛ばされた兵隊蟻達が形を失いより紅く、より黒い煉獄の鎖となり龍を縛り上げ、煉獄の杭が龍を地に打ち付ける。
龍「ｍｊｍｇｊｄｊｍｊｍ、ｋｍｔｍｔｍｊｍ……！」
やった！　今のうちに決着付けないと……。
私「今よッ!!」
ドミニク「あぁ!!　任せろ!!　”色彩闘術（カラー・アーツ）：強撃（きょうげき）!!”」
色彩闘術（カラー・アーツ）
色素を現象に変換する色彩術（カラー・マジック）と違い、対象に直接色素を纏わせることにより、様々な効果を与える。今回の”強撃”は武器に付与することにより、攻撃力を引き上げる。
”強撃”と”フィジカルブースト”の合わせ技。ドミニクが最も得意とする技だ。これなら行けるはず!!
ドミニク「オオォォォォォ!!」
ガギギギィィィィ!!
何て硬さなの……。ドミニクのあの一撃をまともに喰らってるの

に何で火花が出るのよ!!
ドミニク「まだぁまだぁ!!!!　……はぁ!!!!」
スパァァァァァァァン!!
やった!!　あの龍に一撃入れる事が出来た！よし、このまま押しきればッ……
ドミニク「もう一丁ッ!!」
再び強撃を使って攻撃を仕掛けるドミニク。
あ！拘束が解けそうになってる、不味い!!
私「気を付けて!!　拘束が破れかかってる!!」
ドミニク「なッ！……上等じゃァァァァ!!!!」
龍「ｔｍｐｄｇｊｐａｐｇｍｔａｐａｇ!!!!」
血走った目をギラつかせて拘束を破った龍はドミニクに向けて尻尾を振る。
凄まじい速度で振るわれる尻尾とドミニクの大戦斧が激突し、アッサリとドミニクが吹き飛ばされる。
一瞬で十数メートル先のビルへ激突しビルが倒壊する。
ドミニク「ッ!!　……ゲホッ、ゴホッ……」
血を吐きながら倒れるドミニク。
私「ドミニク!!」
私はドミニクを抱き上げる
私「ねぇ！　ドミニク、大丈夫!?」
ドミニクの返事は無い。
私「嘘でしょ……ドミニク！　ねぇ、お願い返事をしてちょうだい！……ドミニク!!　ねえ、お願いよ、ドミニク……」
私は何度もドミニクに呼びかける、されども返事は無く……。

どうしてこうなってしまったのだろう？　私はただドミニクと一緒に居たかった。ドミニクと一緒に戦って、笑ったり泣いたりした

かった。ドミニクの傍に居たかった、だだそれだけなのに。
私はドミニクの笑顔が好きだった。なにも考えてない様で、だけど人を思う優しさがあって。そんなドミニクの暖かい笑顔を見るのが好きだった。
私「私は……私はっ!! まだ、何も、何も伝えてないのに……言いたいこと、いっぱあるのにっ……ッ!!」
私は涙で顔をぐちゃぐちゃにしながら何度も詠唱を繰り返す。
「”ヒール”ヒール”ヒール”ヒール”ヒール”ヒール”ヒール”ヒール”ヒール”ヒール”ヒール”ヒール”ヒール”ヒール”ヒール”・・・」
色彩魔術(カラー・マジック)中級：ヒール
身体的外傷を癒すカラー・マジック。効果は止血や、身体の外側の傷を再生させる。込める色素の量によっては、体内の傷や、血液、更には欠損部位までもが、理論上は再生可能。
私「”ヒール”ヒール”ヒール”ヒール”ヒール”ヒール”ヒール”ヒール”ヒール”ヒール”ヒール”ヒール”ヒール”ヒール”!!」
何度ヒールをかけ続けただろう、体内の色素が2割程になったその時。
ドミニク「……リ、ラ?」
私「ドミニク!?」
思わず私はドミニクに抱き締めた。よかった!!まだ、生きてた!!本当に、よかった……。
ドミニク「うぅッ……」
私「ご、ごめんなさいっ／／／／」
ドミニク「ハハッ、すまねぇ、しくじっちまった……」
私「ううん、いいの、いいのそんな事。今はっ、貴方が生きていてくれて、本当に、良かった……」
ドミニク「大袈裟だなぁ……グフッ！」
私「ドミニク!!」
ドミニク「大丈夫、だ、少し噎せただけだ」
私「無理しないで！ 応急処置しか出来てないの、だから、無理は

しないで、お願い……」
ドミニク「どうしたんだよ、急に？　変、だぞ？」
私「だって、ドミニクが死んじゃうと思ったら、私、私……うぅっ……」
ドミニク「そうか……心配してくれたんだな、ありがとよ、リラ」
私「当たり前じゃない！　……だって、私は、貴方の事が……／／／」
勇気を出して言葉を紡ごうとしたその時。
龍「ｄｐｍｔｎｔｊｔｇｍｔａｍｔｊ……」
私・ドミニク「「ッ!!」」
何だってこんな時に!!
ドミニクはもう動けない。私はもうすぐ色素が切れる。――色素が切れるとカラーマジックが使えなくなる。
フッ、これが万事休すってやつなのかしらね。でも、ドミニクだけは守る。例え、この命に変えても。
私「絶対に渡さない……あんたなんかに渡してたまるかァァァァァ!!!!」
”灼炎地獄（ヘル・フレア）!!”
私の残りの全色素を使って行使したカラー・マジック。
対象を中心に半径五メートル結界で覆いその中を焼き尽くす超高火力カラーマジック。この範囲なら龍だけを狙える!!
私「喰らえぇぇぇぇぇぇ!!!!」
龍「ｍｔｊｐｊｔａｇｊｇｊｇａｔｍｊｍｇｔｊｐ!?!?」
轟く爆音、煌めく閃光。
激しい衝撃が私を襲う。
私「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、これなら……」
倒せたかもしれない。
そう思ったその時。
龍「ｐｍｔｐａｇｊｐｊｔ……」
そこには所々に火傷が出来、鱗も少し焦げていたが、殆ど無傷の龍が佇んでいた。
私「う……そ……」

その場に私は座り込む。
あぁ、駄目だった、ドミニク。ごめんね、守れなくて。こんな私だけど貴方に会えて本当に幸せだった。
でも、やっぱり怖いよぉ、ドミニク。だから、せめて最後くらい一緒に居てもいいよね。
私「愛してます。ドミニク」
龍が前足を上げ振りかぶり、おろす。
全てを諦め、目を瞑る。さぁ、やって頂戴。

グシャ

鋭い何かが肉を切り裂く音がした。私を切り裂いた音だろうか？
不思議なことに感覚はない。
もう死んだのだろうか？そんなことを考えていた私に届いたのは……。
龍「ｐａｐａｔｄｇｊｔｊｐｍｐｊｐａｔｎｇ!?!?!?!?!?」
龍の叫び声だった。
私「えっ・・・・？」
思わず目を開けた私の目に飛び込んできたのは、私に向けて振りかぶっていた腕を失った龍と右手が血で真っ赤に染まった男性だった。
近くに切断されたであろう龍の腕が落ちていた。
まさか、あの龍の腕を切断したの？　それも素手で。一体何者なの？　助けなの？
???「よく耐えた。ここからは此方が引き継ぐ。スー」
すると、”スー”と呼ばれた女性が出てきた。”聖女様”そんな言葉が似合いそうな慈愛に満ちた笑顔をしている。
スー？「はいはーい、了解しました。神の祝福（ヒール）を」

身体の痛みが引いていく。これは、全快複させたの？それほどの高等な術を一言で？彼女は一体……？　そんな事より!!
私「私はどうでもいいんです！　ドミニクを！　ドミニクを助けてください!!」
スー「大丈夫です。すでに処置は済ませてあります」
私「そう、ですか……」
どうやらドミニクは大丈夫らしい。そうか、助かったんだ。
ドミニクが助かった安心感か、助けが来た事による安堵か、私の意識はそこで途絶えた。

目を覚ますと、私は見知らぬベッドの上だった。
私「此処は……何処？」
確か私は龍と闘っていて……ううん、頭がくらくらする。どうしてこんなところに居るのだろう？それに、此処は何処かで見たことがあるような？
私が何が起きたか分からず戸惑っていると。
看護婦？「!!　リラさん！　目が覚めたんですね!?
私「あ、あの、此処は……」
私は此処は何処か聞こうとしたが、
看護婦「今先生を呼んできますので！」
そう言うと、看護婦の人は何処へと、走り去っていった。
私「何処ですか……って行っちゃった」
多分私の担当医を呼びに行ったのだろう。まぁ、その時にでも聞けばいいか。取り合えず、此処は病院。それは分かった、だけど何処の病院かは分からない。見覚えはあるんだけど。それに一部の病院だと、開拓団の経費から治療費が降りないって聞いた事がある。
う～ん、何処だろう？あの、看護婦さんは私の事を知ってるみたいだし、私が行った事があるって事よね？　う～ん？
あぁ、思い出した。此処は開拓団本部の治療院のベッドだ。前に一

度だけ身体検査の為に来た事がある。あの看護婦さんはその時の担当の看護婦の人だった気がする。それで私の事を覚えていたのか。納得納得。

◇◇◇◇◇

???「さてと、仕事を済ませるとしようか」
龍「ｊｐｍｔｍｊｍａｄｔａ」
???「ん？　さっきまでの威勢はどうしたんだ？」
龍「ｐｊｐｊｐｍｐａｔｇ!!」
龍はブレスを放とうとした、さっきまでのお遊びとは違う。本気の一撃を。しかし、それは叶わなかった。
何故なら、男の手が、龍の”核”を正確に貫いていたから。
龍「ｐｍｇｍｇｍ、ａｍｇｐｍ……」
崩れ落ちる龍、そしてすぐに光の粒子に変わっていく。
???「終わったな、帰るぞ」
スー「はい」

こうして市街地魔物発生事件は幕を閉じた。

第十話～避難所にて～

ーーｊｇｊｔａｋｔａｇｊｔａｋｖｊａｔａｊｔｊｄ・・・・

何かの叫ぶ声と何かが割れるような音が聞こえた気がする。

俺「なぁ、今何か聞こえなかったか？」

麗奈「？　聞こえた？」

気のせいか？

俺「そうか。ならいいんだ。それより、こいつらをどうするかだな」

麗奈「ん」

澪「どうしましょうか・・・・」

雅也「あぁ、早急に解決しなければならん」

そう、俺は今とある問題に直面している。それは・・・・

皐月「ペッタンコ♪ペッタンコ♪私は、私はペッタンコ♪」

宗「詐欺顔、俺は、詐欺顔・・・・」

教官「乳でか大年増・・・・乳でか大年増・・・・ぐすん」

この精神を病んでいる三人をどうするか、という問題だ。

というか・・・・

俺「お前らのせいだろうがっ」

澪「うっ」

雅也「うっ」

麗奈「うっ」

原因はコイツらのせいである。雅也が切っ掛けを作り、澪で止めを指す。

実に凶悪なコンボだな・・・・

俺「ていうか、麗奈がなんで呻くんだよ」

そう、麗奈は無関係なのだ。俺とずっと一緒に居たからな。それなのに何で一緒になって呻いてんだ？

麗奈「気分？」

俺「ですよねー」（棒）

麗奈はこういう子なんだと理解しよう。じゃなきゃ疲れるだけだ。

にしても本当にどうしようか？こはるの事も有るのに余計な厄介

ごとを増やしやがって・・・・
俺は二人に冷ややかな視線を送る。
澪「申し訳ありません・・・・・」
雅也「済まない・・・・」
俺「はぁ、怒っても仕方ない。おーい！教官、皐月、宗～。聞こえてますか？」
皐月「ペッタンコ♪ペッタンコ♪」
宗「アハハ、詐欺顔かぁ、詐欺顔・・・・」
教官「・・・・年増・・・・乳でか大年増・・・・」
俺「駄目だこりゃ」
はぁ、こんなのどうしろってんだよ・・・・
その時、天使が目覚めた。
こはる「ん、んん、ううんん・・・・お兄ちゃん？」
俺「お、こはる、起こしちゃったか？もう大丈夫なのか？」
あんな体験をしたんだ、身体に影響が出てるかもしれないからな。
こはる「うん！大丈夫だよ？それより、あの人達はどうしちゃったの？元気ないよ？」
俺「ん？あぁ、それはな、少し自信を無くしてるんだよ」
こんないたいけな少女にペッタンコだの、詐欺顔だの、年増なんて言葉は悪影響だ。この子を支えると決めた以上、教育面でも抜かる気はない。
こはる「それならこはるが励ましてあげるね！」
俺「え？」
いやいや、いくらこはるが可愛くても、今のコイツらに届くとは思えんのだが・・・・
こはるは綺麗に並んで体育座りをしている三人に抱き着いた。
俺「ほぇ？」
唐突の出来事に思わず間抜けな声が出る。そこは言葉で元気づけるんじゃないのか？　まさか、行動に移すとは・・・・。こはるは中々アグレッシブの様だ。
こはる「元気出して？こうやってぎゅ～ってすると元気がでるんだ

よ？れいなおねぇちゃんがこうしてくれたんだよ！」
俺「あ、成る程。それで抱き着いたのか」
こはるが母親の死によって悲しんでいる時に、麗奈がこはるを抱きしめて励ましたのだ。
麗奈「っ～～～／／／」カァァァ
あ、顔が真っ赤になってる。照れてんのか？頭を撫でられるのは平気なのに？
不思議な奴だな、やはり女心は難しいな。
にしてもさっきから、三人が固まったままなんだが・・・・
俺「ん？」
皐月・宗・教官「「て、天使だ！・・・・」」
俺「えっ!?」
何かいってんだ!?コイツら。確かにこはるは天使の様に可愛いが・・・・
皐月「皐月、やっと分かったよ。大事なのは大きさなんかじゃない！」
宗「そうだよ、詐欺顔がなんだ、そんなの関係ないじゃん！この顔で、助かったことも何回もあったんだ、今更詐欺顔呼ばわりされた程度でへこたれるなんて！」
教官「ふっ、こんな幼い子に気づかされるなんてな。そうじゃないか、私はもう、年増と呼ばれてもおかしくない年齢じゃないか。胸だってそうだ、世の中には無しい人もたくさんいるじゃないか、寧ろ誇ろう。大きいですけど何か？っとな！」
あー、駄目だ。子供に慰められて自尊心が崩壊、遂にはひらきなおりやがった。
前よりも悪化してないか？コレ？
こはる「そうだよ！みんな元気出して！」
麗奈「ん、その通り」
俺「頼む麗奈、これ以上拍車を掛けるな・・・・」
もうやだ・・・・。
澪「あ、あの？琥太郎？前より悪化してませんか？」

雅也「そ、そうだ。大丈夫なのか？」
俺「お前らのせいだろうがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!」
澪・雅也「「す、すいませぇぇぇぇぇぇぇぇん!?!?!?!!」」
こはる「？」
ーー「その場は最早収集が着かなくなった地獄」と、空気と化していた精神科医は後に証言したという。

～３０分後～
俺「もう、なんか疲れたよ・・・・」
はぁ、何故俺がこんな苦労をしなければならないのだろうか。
あの後開き直った三人を必死に止めるという、非常に辛い重労働をする嵌めになった。
そしてーー
皐月「ごめんなさい・・・・／／／／」
宗「すいませんでした・・・・／／／／」
教官「すまなかった・・・・／／／／」
目が冷めた三人はこうしてさっきまでの自分達を思い出しながら恥ずかしそうに頭を下げているのである。
そりゃあね、さっきまでの事をかんがえたらね（笑）
開き直った三人はこはるを天使と崇め、俺達に向かって、
「ペッタンコですが、なにか？文句あんのか！貧乳はステータスじゃボケェェェェ!!」
「あぁ、詐欺顔だとも。だからなんだってんだ！仕方ねぇだろこんちくしょーがぁぁぁぁぁ!!」
「年増だ年増だぁ？あぁ、そうだもともそうだとも。！胸がでかいだぁ？無いよりましだろぉがぁ!!」
と、切れ切ってきたんだから。
俺「いぃえぇ？　別にいぃ？たまにはいいんじゃないですかねぇ？」イライラ

三人「「す、すいません・・・・」」
麗奈「ん、許さない」イライラ
三人「「うっ・・・・」」
俺「お前は何もしてないだろ？」
三人を止める時も何もしてなかったからな。コイツにとやかく言う権利は無い。・・・・と、言いたいところだが・・・・
麗奈「ん、でも煩かった」
そう、コイツは三人を止めてる間、耳を塞いで口と目をギュッとしてたからな。
可愛かったから見逃してやろう。可愛いは正義だ。
澪「琥太郎さん、その辺にしてあげ・・・・」
俺「あ？」
澪「ひゃう、う、うううぅぅ・・・・」
怯えたように頷き、拗ねてるのか、壁に指でもじもじしてる。
雅也「おい、流石に今のは・・・・」
俺「なんだ？あ？」
雅也「いえ、何でもないです・・・・」
シュンとし、すごすごと壁儀に移動する。お前は親に怒られた子供か！
こはるは「ねぇねぇ、お兄ちゃん」クイッ、クイッ
こはるが服の袖を引っ張る。可愛い。
俺「ん？どうした？」
こはる「お兄ちゃん、みんなを許してあげて？」
こはるはなんて優しいんだい。お前さんは天使かい？
だがな、こはるよ。コイツらはな？自分達がどれ程周りに迷惑を掛けているか教えなければならないんだよ？
俺「こはる、しかしな・・・・」
こはる「お願い！ね？」ウワメヅカイ
こはる、どこでそんなテクニックを覚えたんだい？
そんな事されたら、、、許すしかないでしょうが！
俺「くっ、お前ら！」

三人＋澪・雅也「「は、はい！」」
俺「命拾いしたな・・・・。次は無いぞ？」
三人＋澪・雅也「「ひ、ひぃぃぃぃ」」
ふん！こはるに感謝するんだな！
・・・・なんか、小悪党みたいだな。
ーーやっと、事件（？）が一段落した時、俺達の部屋に開拓団員が入ってきた。
団員「失礼します、伝令。市街地に出現したワイバーンは学生団員が討伐したかと思われた後、超新生体に覚醒後、学生団員では処理は不可能と判断し、本部より派遣されたA級団員により討伐されました」
超新生体？なんだ、それ？それに学生団員では処理不可能ってどういうことだ？本部よりって言葉も気になるな。
教官「そうか。ご苦労、引き続き任務へ当たれ」
団員「いいえ、まだご報告が」
ん？まだ何かあるのか？
教官「なんだ？」
団員「は、団長が皆様をお呼びです」
団長、だと？団長ってのは読んで字のごとく開拓団のトップの事だ。
教官「団長が？それに、皆様を、だと？」
団員「はい、避難誘導を行った学生に話を聞きたいとの事です。それでは、失礼します」
教官「あ、あぁ、ご苦労だった」
言うだけ言って出ていったな・・・・・。
俺「教官、聞きたいことが・・・・、教官？」
教官「ど、ど、ど」
俺「ど？」
教官「どうしよう!?だ、団長がお、およ、お呼びだって！服装はこのままでいいのだろうか!?やはりドレスコードにも気を付けた方がいいのか!?」

俺「教官!?」
急にどうした!?団長って一体どんな人なんだ!?
麗奈「お母さん慌てすぎ」
教官「慌てずにいられるか！団長だぞ？６０年前の大侵攻(スタンピード)において、単独で５００匹の魔物の討伐し、団長のいた部隊は合計１３００匹の魔物討伐数をだした大英雄だぞ!?」
説明チックの慌てかた御苦労様です。
教官「あと、お母さん言うな！」
澪「私も聞いたことがあります。確か戦女神(ヴァルキリー)と呼ばれていたとか」
宗「また、仰々しい名前やなぁ」
あ、口調戻ってる。
俺「まぁ、呼ばれてるんですし行きましょう？」
こはる「こはるも連れてって！」
俺「こはる？」
こはる「こはるに出来ること聞きたい！」
俺「いや、流石に其れわなぉ」
教官「いや、大丈夫だろう」
俺「教官!?」
いいのかよ!?
教官「団長は寛大なお方だ、その程度で起こりはしないだろう。それに、団長は子供好きで有名だからな」
焦ったり、信頼したり忙しいなこの人。
俺「だ、そうだ」
こはる「やった！」
まぁ、怒られても俺が庇うけどな！
さて、それじゃあ行きますかね？

第十一話～執務室にて～

「報告します。桧並教官への伝令、完了致しました。市街地に出現したワイバーン討伐に向かった学生団員は重傷を負いましたが、命に別状は無いそうです」

若い男性団員の報告を聞き、私は思わずため息を吐く。

未来ある学生が危険な魔物と戦うと云うのは、やはり気持ちのいいものではありませんね。いくら自ら志願したといってもまだその幼い心に負担が掛かるのは避けたいのですが・・・。

「分かりました、学生団員の方達にはカウンセリングを行ってください。いくら普段から魔物と戦っていても、心に負担は掛かりますので」

「了解しました」

「それと、市街地と市民の被害状況、及びイレギュラーゲート原因解明はどうなっていますか？」

そう、今回のワイバーン出現は普段本部内の専用戦闘エリアに出現するはずのDゲートが市街地に出現した事により発生したもの。（予期せぬ場所に突如として発生する場合、これをイレギュラーゲートと呼ぶ）早急に原因を解明しなければ開拓団の信用に関わります。Dゲートの管理、及び調査と解明を目的としていると大々的に宣伝してしまっているが為に今回のような事があるとマスコミや世間からのバッシングは最早逃れられません。

はぁ、暫くは家に帰れないでしょう。八十代後半の老婆を馬車馬のように働かせるあたり、中々開拓団もブラックな職場のようですね。

「はい。今回のイレギュラーゲート発生の原因は未だ不明、市街地の被害状況は中心部の建物の倒壊が六棟、ゲート発生地点の公園は遊具などの建築物の損壊が多数。市民への被害は死者八名、重傷者十七名、軽傷者二十五名です」

表情一つ変えずに淡々と事後報告をする団員。

何故この方はこうも冷静でいえられるのでしょう。何の罪も無い一般市民が亡くなったというのに。いや、本来トップに立っている私

こそ冷静に物事を判断していかなければいけないのでしょう。どうも私には、玉座にふんぞり返って指揮をとるようなことには向いていないようですね。それにこの方、優秀では有りますが信用は出来なさそうです。

其れにしても亡くなった方の人数が多いですね・・・いや、突然の事にしては、寧ろ少ないのでしょうが。

「これも全て我々の力不足が招いた結果ですか・・・。遺族の方々には、私の方で謝罪とお悔やみの手紙を書きますのでそちらを渡して下さい。市街地復興まで、どれくらい掛かりそうですか?」

「倒壊した建物の撤去だけでも最低一ヶ月は掛かるかと。完全に持ち直すまで数ヶ月は掛かると思われます」

「撤去だけで一ヶ月ですか・・・あそこにはマンション等も多く建ち並んでいたので仮設住宅の配備を急いだ方がいいですね・・・。分かりました、報告御苦労様です。通常任務に戻ってください」

「失礼します」

短く言うと彼は執務室から出て行った。

「其れにしても、前回のスタンピードよりまだ六十年しか経っていないのですが、何故イレギュラーゲートが出現したのでしょう?」

そこが気になるところなのですが、スタンピードに関しての情報が少な過ぎて予測を立てる事すら出来ていないのが、今の現状。辛うじて分かっているのがスタンピードが最低百年以上の間を空けて起こると言うこと。スタンピードの前兆として、イレギュラーゲートが出現することの、二つしか解っていません。

「これは、異界組の団員を増やすべきでしょうか、それとも、イレギュラーゲートに備えるべきか、これは慎重に思案する必要がありそうですね」

その時、執務室のドアが、ノックされた。

「団長、桧並です。此度の騒動で避難誘導をした者達を連れて参りました」

そうでした、今回の騒動に一役かってくれた方達に、お礼をするために呼んだのでした。

「どうぞ、入ってください」
「はい、それから、一つ一つご報告が」
　報告?なんでしょうか?それに執務室に入ってからでも良いのでは?
「どうぞ、中へ入ってください。報告は中で聞きますから」
「いえ、その、ここであらかじめ話しておきたいのですが・・・」
　執務室に入る前に話しておきたいこと?何でしょうか?
「分かりました、どうぞ」
「有り難う御座います。それでは、今回の騒動でイレギュラーゲート発生時に公園にいた女児がどうしても団長に会いたいと申していまして、その子の話を聞く限り、有益な物と判断してので今ここに、連れてきているのですが、一緒に入室してもよろしいでしょうか」
「どうぞ、お入りになってください。小さな女の子がいるくらいで私は怒りませんよ」
　早く仰ればいいのに。子供好きな私としては元気にはしゃぐ子供を見ているとパワーをもらえる気がして頑張れるのですが。
「有り難う御座います。それでは、し、失礼しまするッ!!」
!?
「す、すみません!!失礼します!」
　今のは一体?
　そう言うと、彼女達は緊張した面持ちで執務室に入って来ました。

　～遡ること十数分前～
「いいか、貴様ら。万が一にでも団長の前で粗相をしてみろ、もしそうなったら・・・・・わかっているな?」
「ひっ・・・」
　きょ、教官の目が座ってる・・・。あれはガチの目だ、本当に殺りかねん。絶対に粗相をしないようにしよう。
「・・・」コクコク
　ーーこのとき、全員の心は固い絆で結ばれた。迂闊に教官に団長の

話を振ってはいけない、と。
「そ、そろそろ行きませぬか？余り待たせるのもどうかと思いますれば」
なんか変な喋り方になったぞ、俺。緊張すると敬語になるってのは聞いたことがあるが、これ、敬語なのか？
「そ、そうだな！い、急ぐとしよう」
そう言うと、ギギギギギギと擬音が聞こえて来そうな動きで教官は歩き出した。
・・・大丈夫か？この人？
俺は今更ながらこの人も大概ポンコツだと言うことを知った。
今いる避難所――学園内の応接室（本来は演習場。琥太郎達は今回避難誘導を行った為、演習場での質問攻めを考慮しての措置となった）から本部までは徒歩五分程度の距離にある。何なら、本部の方に避難しても良かったんじゃ？と思うかもしれないが、本部まで５分で行けるのは、”転移門”という特殊な門を使用したときだけで、本来はもっと時間が掛かる。それに加え、開拓団員の個人情報や、異界の調査書、異界で発見された植物等、一般市民に見せられない物が本部には多数管理されている。団員のプライベート及び、機密保持の為に避難所とすることが出来ないらしい。
「あ、そういえば」
俺には一つ、気になってることがある。
「どうかした？」
こてん、と首をかしげる麗奈。ナチュラルにこういう仕草の似合う女子は貴重だと思う。ぶりッ子が今の仕草をすると吐き気がするが、麗奈がするとよく似合う。あ、皐月も似合いそうだな。
「琥太郎？」
「ん？あぁ、すまん」
「何をうんうんと頷いているんだ？」
「えっ、頷いてました？」
「自覚が無いのですか？」
「あぁ、全く気付かなかった」

マジで？頷いてたのかよ、ひょっとして俺って行動とか顔に出やすいのか？
「子供の成長を見守る親みたいだったで？」
「ん？」ニコッ
「ピッ・・・」ビクッ
「ピッ・・・」ビクッ
鳥みたいな声を出して震える宗。学習能力が無いのか？お前は。それに雅也。お前まで何故震える。完全にトラウマになってんぞ。
「・・・」ブルブル
・・・あんたもか、教官。
「そ、その辺にしてあげて下さい。皐月の事を言っている訳では無いのですから、ね？」
「そ、そうやで！例えでそう言っただけで皐月の事や無いで！寧ろ誉めこｔーーひでぶっ」
その場に崩れ落ちる宗。鳩尾に見事なボディーブローを決めた皐月は天使のような笑顔でこう言った。
「ゴミ（宗）は捨て置いて、行こっか？」ニコッ
「「は、はい・・・」」
マジで怖えわ、皐月。怒こらせないようにしよう。
「って、そうじゃなくて。聞きたいことがあるんですよ、教官に」
「私にか？なんだ、言ってみろ」
「度々話の中で、本部って出てきますよね？それじゃあ、支部があるということです。だけど今まで何処かに支部があるなんて聞いたことがないのですが、何処にあるんですか？」
そう、本部があるなら支部もあるはず、けれどそんな物があるなんて聞いたことは一度もない。そこがずっと気になっていたのである。
「あ、そういえばそうですね・・・」
「今まで全く気付かへんかったなぁ」
「確かにその通りだな」
「じゃあ、何処にあるのぉ？」
皆も気になるようだ。でも、一応これも開拓団から開示されていな

い情報。答えて貰えるかどうかは、分からない。まぁ、入団すれば判るだろうし、そこまで気にしてないんだけどな。
「それは・・・」
やっぱ言えないのだろうか？まぁ、無理ならしょうがないか。
「異界」
「へ？」
「異界、本部の支部があるところ。通称”冒険者ギルド”」
「え、何で知ってんのお前？てか、これ言っちゃって良いのか？」
「なな、お前はアホか！駄目に決まってるだろ！」
「おい、駄目じゃねぇか」
「そうみたい」
「『そうみたい』、じゃないだろ!?開拓団の機密情報だぞ!?何でお前が知ってるんだ!?」
え？そうなのか？じゃあ、何で知ってんだ？
「お母さんが酔ってる時に聞き出した」ドヤァ
そう言ってVサインをする麗奈。
・・・最早呆れて物も言えねぇ、機密情報駄々漏れじゃん。
「教官、何やってんすか・・・・」
「うっ・・・」
――また一つ、教官のポンコツ伝説が増えた。

「ここが・・・」
俺は余りの光景に言葉を失う
「どうだ？すごいだろ？ようこそ、開拓団本部へ」
誇らしげに語る教官。まぁ無理もない、これほどの物を拝むことになるとは。
まず、だだっ広い。とてつもなく広い。地平線が見える程度には広い。下手な国立公園より余裕で広いんじゃないか？
次に、敷地全体がフェンスで囲まれており、よく見るとそのフェンスにも何が書き込まれていた。呪文か何かか？
そして、フェンスを越えると広がる林。そう、敷地内をぐるッと一

周林が囲っているのだ。それに、遠くの方に森?それとも森林か?よく見えんが林とは別に山のような物も見え、ほかにも岩山のような所、湖のような所等、色々見える。
敷地面積に比例してるのか知らんが、正門も馬鹿みたいにでかい。高さ２０ｍ、横幅１０ｍくらいあんじゃね?
此処までで、既に本部の凄さがお分かり頂けただろうが、まだ序の口。
先ほど学園から歩いて五分と言っただろう。訂正しよう。正しくは敷地内の本部の建物から五分の距離に学園があるのだ。決して学園が小さい訳では無いのだ、学園のグラウンドだけでも東○ドームくらいある。グラウンドだけでだ。演習場や工房、学舎等を会わせれば東○ドーム１０個程度は入るだろう。その学園さえも、本部と比べれば小さい小さい。本部の建物は４つはどある。
一つ、任務の受注、福利厚生、市民等の一般客を受け付けるメイン棟。
二つ、異界の植物や生物の研究をする、【生物研究棟】
三つ、魔物に対抗する武器や、色彩術の研究をする、【工房】
四つ、異彩の研究、及び団員の治療を行う、【医療院】
五つ、開拓団員の宿舎、【寮】
以上の五つが主な建物だ。これに加え、さっきの森林や岩山、湖などの、フィールドに監視塔があるらしい。何故監視する必要があるかと言うと、魔物を放し飼いしているらしい。魔物の保護区なようなもなだ。と、教官が自慢げに語っていた。別にそこまで聞いてねぇよ。
で、そんなもんを見た俺達は。
「・・・・」ポカーン
揃って口を空けて呆けていた。
「ふっふっふっ。すごいだろ?すごいだろ?」
さっきから教官がうるさい、子供かあんたは。
そんな事を考えていた俺はある意味当然の疑問を思い付く。
「ん?おかしくないですか?こんだけだだっ広いのに、外から見たら普通の役所みたいに見えてたんですけど・・・」

そうなのだ。普通これだけ広ければ遠くからでも判るだろうし、第一開拓団の本部は市を跨いでいないらしい。明らかに物理法則に喧嘩を売っている。
「あっ、私もそう思っていたんです。開拓団の本部は市を跨いでいないと聞いて居たのですが、どうみても市よりも広い敷地を疑問に思っていまして」
「あぁ、俺もだ。明らかに物理法則に逆らっているだろ、これ」
「皐月、全然気付かなかったよ・・・」
「わ、わいも広さに圧倒されて考えもせんかった・・・」
「こはるも・・・」
やはり皆も疑問だったようだ、一部を除いて。あ、こはるはしょうがない、子供だからな。
「ふっふっふっ、よくぞ聞いてくれた！教えて欲しいか？教えて欲しいのか？ふふっ、仕方がないなぁ、そんなに教えて欲しなら仕方ない。教えてやろう。ふっふっふっ」
「・・・」
う、うぜぇ・・・。とてつもなくうざい。
見ろ、他の皆もジト目になってるぞ。ありゃりゃ、こはるにまで白い目で見られてる。
「仕方がないならいいです。本部の団員さんに教えてもらうので、黙ってください」
「じょ、冗談だ！嘘！嘘だからぁ！お願いします聞いてください！」
ーーこの時、当初抱いていた教官への尊敬や、しっかり者のイメージは完全に瓦解した。
駄目だ、子が子なら親も親だわ。もう諦めた。
「・・・はぁ、分かりました。どうぞ、話してください」
なので俺はとっとと、喋らせることにした。
「ここの敷地が内と外で見え方が違うのは、フェンスに秘密がある」
「勿体ぶらないで下さい」
「いいだろう、それはfーー「フェンスに刻まれている色彩刻印の効力よ」ーー何でまたお前が！私が言おうと思っていたのに！それに、こ

れも機密事項だぞ！何処で聞き出した！」
　またしても麗奈に美味しいところを持っていかれた教官は麗奈に詰め寄る。てか、これも機密事項なのかよ。学生の俺らに言って良いのか？
「お母さんが酔ってる時に自慢げに語ってた」
「ですよねー」
　やっぱ駄目だわ、この人。
「うっ・・・。お酒、止めようかな？私」
　俺や皆から向けられる呆れを含む眼差しに、さすがの教官も居心地が悪いようだ。
「と言うか。教官、今さらっと機密事項俺らに言おうとしてました？」
「あっ・・・」
「はぁ・・・」
「い、今更一つも二つも変わらん！」
「一つでも駄目に決まってんだろうが!!」
　・・・よくこんなんで教官やってられるな、この人。
「まぁ、いいです。それよりも早く行きましょう。これ以上言っても無駄なので」
「何か私の扱いが雑になってないか？」
「いいから行きますよ」
　そして時は現在。執務室に入室した所だ。
　一体どんな厳つい爺さんかと思ったら五十過ぎくらいの御婦人が執務室の椅子にゆったりと座っていた。
　とても優しそうに微笑んでいる。若い頃は相当な美女だっだろうことが窺える。
「どうぞ、お座りになってください。今回は皆さんに御礼をするためにお呼びしたのですから」
　この御婦人が本当に団員なのだろうか。とてもそうは見えないが。それから互いに自己紹介を終えたあと、こはるが突然声を上げた。
「さえこさん？」
　ん？どうしたんだ、突然？

「あら?貴方はもしかして、歩道橋の・・・、確か、こはるさんだったかしら?」
「うん!さえこさんだよね!」
「まぁ!覚えていてくれたのね?嬉しいわ」
そう言って微笑むさえこさん。知り合いなのか?二人は。
「あ、ごめんなさい。少し嬉しくて、何故こはるさんがここに?」
「この子がイレギュラーゲート発生時に公園にいた女児なんです」
「まぁ、そうでしたか。大変でしたね?こはるさん、所でお母さんはどちらに?」
「っ!そ、それは・・・」
思わず言葉を詰まらせる。こはるの前で堂々と言って良いのだろうか?いや、こはるは母親の死を乗り越えようとしている。だったらハッキリと言うべきなんじゃないか?
「こはるの母親は・・・」
決意を固め、言葉にしようとしたその時。
「こはるのお母さん、死んじゃったの・・・」
今にも消え入りそうな、泣き出しそうなか細い声で、こはるは自身の母親の死を告げた。
「「っ!」」
「こはる・・・」ギュッ
思わずこはるを抱き締める。今はこうしてあげないといけない。そう思った。
「う、うううぅ、お母さぁん・・・うぅ」ポロポロ
そうだよな、まだやっと母親の死を認識した所なんだ。まだ、乗り越えた訳じゃない。
「よく、頑張ったな。偉いぞ、偉い。だから好きなだけ泣いていい」
こはるの頭を優しく撫でる。この子はとても強い子だ。だけど今はこのままでいいと思った。
そのままこはるが泣き止むまで俺はこはるを抱きしめ続けた。
「そうですか・・・こはるさんのお母さんは、もう・・・」

「はい、この子を庇って」
「すみません、私の配慮が足りませんでした。さぞ、辛かったでしょう」
　そう言ってさえこさんは泣きつかれて、再び眠ってしまったこはるを見やる。
「いえ、こはる自身も母親の死を乗り越えようとしています。なので、こはるの事をどうか気にかけて下さりませんか?あったばかりで厚かましいのは分かっています。ですが、どうかお願いできないでしょうか、お願いします!」
　そう言って、俺は頭を下げる。
「私の方からも宜しくお願いします」
　澪が頭を下げる。
「わい、、、僕の方からもお願いします!」
　宗も頭を下げる
「皐月もお願い!こはるちゃん今とっても寂しいの!だから、お願いします!!」
「自分の方からもお願いします」
　皐月も、雅也も頭を下げる
「・・・」ペコッ
　麗奈も、言葉こそ発しなかったが真剣な表情で頭を下げる。
「みんな・・・ありがとな」
　俺は改めてさえこさん、いや、団長に向き直る。
「こはるの面倒は俺が見ます!なのでどうかお願いします!!」
「お願いします!!」
「皆さん、頭をあげて下さい。そんな事をしなくても、こはるさんの事をむざむざと見捨てるわけがないでしょう?」
「そ、それじゃあ・・・」
「えぇ、こはるさんのこと全力で支援させて頂きます」
「有り難う御座います!」
「やったね!こはるちゃん!」
「これでひと安心ですね」

「よかったぁ・・・」
「あぁ、本当にな」
「琥太郎さん」
突然名前を呼ばれ、思わず姿勢を正す。
「は、はい！」
「これからこはるさんは様々な苦労をする事になるでしょう。」
「は、はぁ」
突然なんだ？
「琥太郎さんはこはるさんにとって心の支えになってほしいのです。貴方にこの子を支えて行く覚悟はお在りですか？」
「っ・・・」
こはるを、支えて行く・・・。俺には覚悟はあるのだろうか？この子はこれから苦労する。それは俺が身を持って体験しているからよく分かってる。そんなこはるを支えに行けるだろうか？
ふと、その時、俺の里親であり、師でもあった義父の顔が思い浮かんだ。もうこの世にいない、もう一人の父親の顔が。
バチィィン!!
頬を強く叩く。
何を怖じ気づいてるんだ、覚悟はとっくに決まってるだろ！
「はい、あります。こはるをこれから支えて行きます、どんなことがあっても」
真っ直ぐと俺は団長を見据える。
「・・・はい、その志し、しかと受け止めました。こはるさんを宜しくお願いします」
そう言って頭を下げる団長。
「頭をあげて下さいって、逆に緊張しますから！」
「ふふっ、それでは頼みましたよ？」
さっきまでの緊張した雰囲気は霧散し、先ほどの団長に戻っていた。
・・・全く、喰えない人だな。
「はい」

こうして、団長との対面は無事終了した。

第十二話～前兆～

「ΚΦΡΦΡΥΠΞΔγΚΦΡΥΚΠΛΟΛΞΓΦ!!」

――轟く咆哮。

「キャアアアアア!!」

「た、助けてくれええ!!」

「し、死にたくないよぉ・・・」

――逃げ惑う人々。

その正しく産まれたばかりの子蜘蛛の如く逃げ惑う人の群れの中に、僕はいた。

母は死に絶え、父とはぐれた。涙も最早流し尽くし枯れ果てた。

どれ位走っただろう。数時間、いや、数日のような気もする。しかし、たった数分のようにも感じる。

父さんと約束した。生きる、と約束した。だから走る、逃げる、生き残る。また会えることを信じて。

母さんは居ない。遠くへ行ってしまった。真っ赤になりながら。口から、体から、至る所から赤い、紅い、鉄臭い血を吐き出しながら。

「僕は、僕は、俺は・・・生き残る。絶対に、生き残る。約束したんだ・・・父さんと!」

この言葉にどれ程救われただろうか。

「γΚγΠΥΧΟΔλχρορορορπλπβπολο!!」

またあの声だ。父さんとはぐれた時にも聞こえた、あの声。聞こえる度に心臓が止まりそうになる。

でも、止まれない。止まってはいけない。止まったら全てが終わってしまうような、そんな気がする。だから走る、ひたすらに。

＊＊＊＊＊

――咆哮が遠くで聞こえた。

化け物はあの場所で暴れているのか、追っては来なかった。

俺は商店街の物陰に隠れていた。声は遠くで聞こえるが油断は出

来ない。あの時もいきなり化け物が現れたのだから。
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・」
苦しい。心臓が痛い。鼓動に合わせて身体中が悲鳴を挙げる。
暫く此処で休もう、そしてまた走ろう。
そう思いながら俺の意識は沈んでいった――――。

◇◇◇◇◇

「・・・・ッ!!」
――ベッドが軋む程の勢いで飛び起きる。
「・・・・・久しぶりに見たな、あの夢」
自嘲気味に笑いながらカーテンを開ける。
窓から差し込む日光と鳥の囀(さえず)りを聞きながら、欠伸をする。
「ふぅあぁぁ～」

◇◇◇◇

ベーコンエッグを焼くジューシーで香ばしい匂い音を聞きながら意識を覚醒させて行く。
「えー、本日の朝食は、ベーコンエッグ、サラダ、コーヒー、トーストのモーニングセット風に御座います」
・・・誰に言ってんだ、俺？
程なくして出来上がったモーニングセットを頬張りながら、テレビを点ける。
――丁度昨日の事件がニュースで報道されていた。
『昨日午前十一時頃、東京都、睦月市内の公園に突如としてDゲートが開き魔物が出現しました。魔物による被害は中心部の建物六棟の倒壊及び、死者八名、重傷者十七名、軽傷者二十五名と判明しており、また市街地に出現した魔物の討伐に向かった〝学園〟の生徒二名が重傷を負いました。その後、本部より派遣された団員により、魔物は討伐されました幸いにも討伐に向かった生徒の命に別状はなく――』

学園から生徒が派遣？どういうことだ？学生でも討伐任務に出れるのか？それに、重傷を負ったって言ってたよな？正規隊員じゃない生徒を討伐に向かわせた挙げ句に重傷、下手しなくても信用問題になるんじゃないのか？

続きが気になり、朝食を摂るのも忘れてデレビに見入る。

『今回の事件について只今より開拓団より、記者会見が行われます。生中継、ノーカットでお送りします』

丁度記者会見が行われるようだ。

――テレビ画面が会見場所に切り替わる。

するとそこには白い布を被せた長い机があり、左から、メディア課課長、団長、研究所長のプレートが立て掛けてある・・・って団長!?

――すると、団長が話し始めた。

『えー、この度は我々開拓団の至らなさ故にお亡くなりになられた方々及び、遺族の方々に心よりご冥福とお悔やみ申し上げます、大変申し訳ありませんでした』

――団長が頭を下げるのと同時にカメラのフラッシュによって画面が真っ白になる。十数秒程だろうか、フラッシュが止んだ。それと同時に団長が頭を挙げ、言葉を紡ぐ。

『今回の事件――ワイバーン出現――は、本来開拓団本部にて管理しているDゲートが、市街地に突如出現した為に起こりました。本来は絶対にDゲートが市街地に出現する事はありません、絶対にです――』

やけに強硬に否定するな・・・まぁそれもそうか、開拓団の信用に直接関係するからな。何度でも言おう、信用問題だ！　例えどんなに結果を出そうとも信用が無ければ意味は無い。

A社は業績は良いが、過去に色々な問題を起こしている会社と、業績はA社に及ばないが、過去に問題もなく、評判の良いB。

さて、Ｙｏｕはどっちを選ぶ？まぁ、俺ならB社だな。用はそういうことだ。結果が全てじゃない。

だかまぁその件に関しては、開拓団は一度とんでもない失敗を犯してくれちゃってるけどな。

『◇◇社です。つまり、今回は開拓団の不手際、ということですか？8年前のように』
『ッ！・・・いえ、そうではありません』
『・・・どういうことですか？』
『その件につきましては、今から順々にご説明させていただきます。まず、今回のような突然発生する開拓団管理外のDゲートを我々は、”イレギュラーゲート”と呼んでいます』
『イレギュラーゲート、ですか』
――興味を持ったように聞き返す記者。
あの人、始めからこれを狙ってたのか。まったく、喰えない人だな相変わらず。
今の話でマスコミを開拓団の信用問題から、新たに発生したDゲートへ意識を誘導できる。マスコミが好きなものは大体、スキャンダルとかだから一度捕まれば、何を書かれるか分からない。その手の印象操作に関してはマスコミはプロだからな。
『はい。そのイレギュラーゲートですが、以前にも発生しています』
『▽▽▽社です。それはつまり、以前にもこの様な開拓団の管理外のDゲートが発生した、ということですか？』
『はい、その通りです』
『それは、いつ頃の話ですか？』
『かれこれ六十年前の事になります』
『では何故今まで対策がとられなかったのですか？六十年も前の事なのでしょう？』
『それを今からご説明させていただきます。まず、我々はイレギュラーゲートを”前兆”と考えています。そして、発生前にイレギュラーゲートを捕捉することは出来ません』
――マスコミが一際大きくざわめく。
そりゃそうだ、自分の首を締めるような発言を開拓団のトップが言ったのだから。
あの人達はこれも折り込み済み・・・・・じゃ無いな。だって、隣に座ってる二人が「はぁ!?」って顔して団長を見てんだもん。

『その理由については、研究所長から説明があります』
『えっ』
『お願いしますね？』ニコッ
『はい・・・』
　おい！明らかに今、話振られた研究所長「えっ」って言っただろ！流されんなよ！マスコミが若干引いてんだろうが！
『はぁ、何で私が・・・こほん。其れでは、イレギュラーゲートを出現前に捕捉することが出来ない理由について私、開拓団研究所長、リリー・ワトソンよりご説明させていただきます』
　――所長、リリー・ワトソンさんだったか？若いな、２０代に届いてるのか？あの人。それにすげぇ美人だ。少し釣り上がった勝ち気な目はルビー色に輝き、サラサラと流れるブロンドの髪は腰まで届く長さだ。なにより、スタイルめっちゃ良い！モデルでもやってそうなスタイルだ。現に所長が話始めた途端、「おおぉ」って声が画面越しに聞こえる程度には美人だ。
　――そうして、所長は話始める。
『まず、皆様には”Ｄゲート”についての簡単な説明をさせていただきます。”Ｄゲート”とは、時空間と時空間の解れによって起こります。例えとして時空間をシャボン玉とでも考えてください。そしてシャボン玉は一つの宇宙空間に無数に存在します。そうでなければ繋がった先の異界に地球と同じ物質があるはずが無いからです。では、具体的にどうやって繋がっているのかと言うと、シャボン玉は実際の位置ではない、と考えてください』
　――会場がどよめく。
　まぁ、そうだろう。俺も一瞬、「コイツ頭湧いてんのか？」って思ったからな！
『▽▽▽社です。あの、何を仰ってんるですか？』
『そんな可哀想なものを見る目で私を見ないでください。ホルマリン漬けにしますよ』
　サラッと物騒だな、おい！
『えっ!?』

『冗談ですよ・・・二割』
『ええっ!?』
『じょーくです』
『・・・』
濃いなぁ・・・。何がって、キャラに決まってんだろ。もしかしなくても学園関連でまともな知り合い居なくね?・・・はぁ。
『続けます。用は地球という座標の情報を持ったシャボン玉が、異界の座標の情報を持ったシャボン玉とくっ付くことにより、時空間座標に狂いが生じ繋がることによりDゲートが発生します。開拓団では、その接地面を強制的に変更して本部の敷地内に繋ぐことにより、市街地に魔物が出現することを防ぐと共に出現した魔物を敷地内で処理しています。此処までで何かご質問はありますか?』
『□□□社です。質問いいですか?』
『どうぞ』
『具体的にはどの様にして座標を変更しているのでしょうか?』
『その質問にはお答えできません』
『何故ですか?』
『座標変更の方法は最重要機密事項に当たります。なので、お答えできません』
『そちらからしたら相応の理由かもしれませんが、市民がどう思うかは分かりませんよ。我々の報道しだいで如何様にも変えられます』
『ッ・・・』
『さぁ、どうなんですか?』
これは最早脅迫だろう。それにコイツはバカなのか?生放送なのに如何様も何もないだろう。あと、たじろぐ所長も様になってる。
『さぁ、お答えしてもらえませんか?』
『そ、それは・・・』
――その時、凛とした声が響き渡った。
『お答えできません』
『だ、団長!?』
『・・・何故ですか?』

『先程も申し上げました通り、最重要機密事項に当たる事なのでお答えできません。そもそも、その件についてお答えする義務は御座いません』
『確かに無いのかもしれないですが、この国での心象を悪くしたくはないですよね？』
『脅しのつもりですか？』
『いえ、そんなつも――』
『そもそも、我々開拓団は特定の国、組織、政府、個人に属するものではありません。この意味がわかりますか？』
『それはもちろんわかっていますが？　開拓団は国に属していないので、その国の法律で――』
『いいえ、わかっていません。そんな些細な問題ではなく、我々が国と対等な交渉のテーブルに着いている時点で、分からないのですか？我々は、国と渡り合える武力と財力、資源、人材を持っているのです。此処ではっきりと申し上げましょう。開拓団は一つの国と同等のものと思ってください』
『なっ・・・そんな横暴が許されるはずが・・・』
『横暴？何をいっているのですか？そもそも、貴方達は勝手に敷地内に入って来ては色々と嗅ぎ回っていますが、開拓団は一種の国、治外法権も有効な外国ですよ？やろうと思えば貴方達を不法入国で訴えましょうか？』
『脅すつもりですか！そんなこ――』
『黙りなさいッ!!』
『っ!!』
『何が「脅すつもりですか」ですか、世論を盾に脅しをかけてきたのは貴方でしょう。第一、この土地も我々が日本より正式な手続きを持って買い取っています。開拓団の主な任務は異界の調査及び、異界へと行方不明になっている人々の捜索。そして、魔物の調査及び研究です。そこに市民の防衛は含まれません。我々が皆様の安全を守っているのは国から税金によって依頼されているからです。それに、我々としても市民の皆様と良い関係を築いていきたいと思っているから

こそなるべく情報の掲示を行い、開拓団への入団希望者の方を育成する機関も設立しました。わかりますか?あくまでも、善意なんです。その事を努々（ゆめゆめ）お忘れのなきように。これでも何かご質問は?』
――会場も、スタジオも、俺も唖然とした。
まじかよ・・・えぇ、ちょ、え・・・ま、マジすか?
思いきったなぁ・・・。ズバズバ言ったなあの人。俺も途中からスカッとしたぜ。
『・・・いえ』
『あぁ、それともうひとつ、貴方にお伝えしたいことが』
まさか・・・。
『今、生放送でお送りしてるのをお忘れで?』
『・・・あ』
『御愁傷様です』
『あああ!!!!!!!!!!!!!!!』
――会場中に□□□社の記者の断末魔が響いた。
うわぁ・・・トドメを止しやがったよ、この人。人間か?この人。人の皮を被った悪魔かなんかか?
『あ、・・・こほん。其れでは、〝前兆〟とは何か、対策がとられなかったのは何故かについてご説明させていただきます』
『「・・・」』
サラッと流しやがった・・・。
『まず、〝前兆〟について。前兆とは２４００年、初めて我々の世界に魔物及び、ｉｐウイルスが流れ込んで来た時――第壱次代侵攻（ファーストスタンピート）に遡ります。実を言うと、それ以前からＤゲート自体は開き、魔物が出現していました』
『「はぁ!?」』
――この時、マスコミと俺の声はまたしてもシンクロした。
どういう事だ!?知らないんですけど、初耳なんですけど!
『ど、どういう事ですか?』
『皆様も聞いたことがと思いますが?』

『勿体振らないで教えてください』
――若干苛立ちながら、記者が質問する。
『妖怪』
『「へ？」』
――俺と記者のシンクロ率は３００％!!
相性が良いのか？嬉しくねぇ・・・。
『聞いたことがありませんか？妖怪、お化け、ゴースト、モンスター、ＵＭＡなど、一度は聞いたことがあるはずです』
『はぁ、ありますが、まさかそれが魔物と仰りたいのですか？』
『はい、その通りです』
――会場全体がざわめく。
『古来より日本や、世界に魔物は出現していました。日本を例えにするなら、穢れと陰陽師、式神などが代表的です。世界で例えるなら、悪魔と祓魔師（エクソシスト）、使い魔などがそうです』
――いつしか会場全体が団長の話に聞き入り、静まり返る。
『開拓団に陰陽師やエクソシスト関係者が多い理由はこれにあります。では何故、２４００年に世界規模でスタンピートが起こったのか、それは未だに解明できていません。ですが、スタンピートが起こる一年前前後より、本来一定の場所に開くＤゲートが不規則に開くようになり、尚且つ強力な魔物が出現するようになりました。この期間を”前兆”と呼んでいます。第壱次代侵攻が起こってから、２００年周期で代侵攻が起こっているのは、皆さんご存知かと思いますが、代肆次代侵攻（フォースタンピート）が起こったのが六十年前になります。その時にも、イレギュラーゲートが発生しました』
――俺の中で、一つの仮説が成り立つ。
まさか、そんな・・・もし、もしもそうだとしたら。
『ここまで言えば皆様もお察しになっているかと思います。ええ、我々は今回のワイバーン出現をスタンピートの”前兆”と考えています』
『「ッ!!」』
余りの衝撃に会場も俺も言葉を失う。

数十秒程の静寂の後、団長が話し出す。
『皆さん衝撃を受けたことでしょう。本来ならあと１４０年は無い筈のスタンピートの心配はなかった筈なんですから。ですが、これからはより激動の時代へとなるでしょう。よもや私も人生で二度もスタンピートを経験することになるかもしれないのですから』
『えー、皆さん。最後に私、メディア課長の薫森（しげもり）　重蔵（じゅうぞう）より今後、皆様に留意していただきたいことがあります。今後もイレギュラーゲートは開くと予想されます。いや、もっと増える事でしょう。一度開いたゲートはこちらに座標を変更いたしますが皆様にも危険が及ぶ可能性は充分にあります。ですので、皆様におきましては災害時の避難経路や食料、連絡方法などをよく確認し、備えて戴きたいと思います。以上です』
――此処で、記者会見から画面がスタジオに戻った。
「備え、ねぇ……」
はぁ……。朝っぱらからあの時の事を思い出すような事ばっかだなぁ。そろそろ真剣に向き合わなきゃなのかねぇ。

なぁ、母さん、父さん。

そして、入学式を迎えた。

第十三話～入学式～

四月一日、入学式当日

俺はいつもより少し早めに起きたあと、朝食を作り、洗い物をし、洗濯機を回す。そして、壁に掛けてある新品の制服に袖を通す。

「何か気が引き締まるな……！」

俺は今、テンションアゲアゲ状態だった。

この学園の制服は男子は黒のワイシャツにグレーのベスト、一年は青、二年は赤、三年は緑の斜めの縞模様の黒ネクタイ、学年毎の色のラインが入ったジャケットに似た金色のラインの入った黒い上着を羽織る事になっている。女子はグレーのブラウスに学年毎の色のネクタイ、そして、金色のラインが入ったダブルジャケットタイプのブレザーを羽織る事になっている。しかし、校則が魔物や、色彩魔術関連以外緩いため、着崩していても特に怒られることはない。

「さて、そろそろ行くか」

◇◇◇◇◇

学園内の昇降口に張り出されたクラス割りの表を見て、自分のクラスを確認する。

「俺は……一ノ三か。おっ、雅也と同じじゃん」

俺はホッと息を着く。やっぱり一人ってのは心細いからなぁ、雅也と同じで良かった。他には、と。

「うぉっ……！」

雅也の名前を確認したところで人混みに揉まれた。

◇◇◇◇◇

「ふぅ、酷い目にあった・・・」
まさか一ヶ所にしか張り紙が無いとは、これいかに。
その時、突然教室の入り口から黄色い声が聞こえて来た。
「久しぶりだな、琥太郎」
「あぁ、久しぶりだな、雅也」
黄色い声の発生源は雅也だった。
「いやぁ、雅也と一緒でよかったよ。一人知らないところに放り込まれても馴染める気がしなかったからな！」
「それでよくお前は学園に入ろうと思ったな」
「誉めるな誉めるな……寒気がするだろ？」
「誉めていない。というか寒気がするとはなんだ」
「冗談だって、二割」
「八割は本気だろうが。それに二割というのは、あれのことだろう？」
「お前も見たか」
「あぁ、あれは……」
「「濃いな」」
俺と雅也は見事にシンクロした。
「だよな？あれは濃い」
「あぁ、部下は苦労してるんだろう」
雅也も感じ取っていたか……と言うことは、コイツも……。
「お前もこちら側の人間か」
「琥太郎もか」
俺達は顔を見合わせて……、
「「はぁ……」」
同時にため息を着いた。
え？こちら側ってなんの事だって？決まってんだろ、いつも誰かの皺寄せを喰らう苦労人ってことだよ……自分で言ってて悲しくなってきた。
「まぁ、切り替えていこう」
「それまそうだな」
「じゃ、改めて。宜しく、雅也。制服似合ってるぞ。イケメンはなに着

ても様になるな」
「あぁ、此方こそ宜しく、琥太郎。お前も似合ってるぞ」
俺達は握手を交わした。その時。
「あれー？　コタ兄と雅也？」
聞き覚えのある声が聞こえて来た。それと同時に教室から、
「「おおぉ！」」
と言う声が聞こえた。
「おぉ、皐月！　お前もこのクラスだったのか」
「ひ、久しぶりだな、皐月」
「うん！　二人とも久しぶり！」
皐月は跳ねながら手を振ってくる。動きに合わせて、アホ毛もピョコピョコしてる。一方雅也は若干顔がひきつり、冷や汗もかいている。
「二人とも！　元気だった？」
「あぁ、元気元気」
「ま、まぁな」
「うーん、雅也元気無いよ？」
「そ、そうか？」
「そうだよ！　元気出しなよ！　楽しいよ？」
「お、おう。そうだな」
「あ！　琥太郎、雅也！　制服似合ってるよ！」
「そうか？　皐月も似合ってるぞ」
「あぁ、俺もそう思うぞ」
「ありがとう！」
皐月は女子の制服を着てはいるが、少しサイズが大きかったのか、袖から腕が完全に出ておらず所謂”萌袖”状態となっていた。加えて肩の幅も大きかったのかずれていて、彼女持つ幼さと相まって、可愛さを醸し出していた。
「お？　皐月ちゃんに雅也に琥太郎やないか！　久しぶりやなぁ！」
琥太郎達が話をしていると、そう言って近づいてきたのは……
「「宗！」」

――宗だった。
「「キャアアアア／／／／」」
「「えぇぇぇぇぇぇぇ!?」」
――それと同時に黄色い声と驚きの声が同時に聞こえた。
けっ、高スペックエセ関西弁イケメン（笑）が。それにしても、宗も雅也もイケメンは凄いなぁ～。完璧に制服を着こなしている。端から見ればモデルにて見えるんじゃね？
「ん？　琥太郎、今えらい失礼なこと考えなかったか？」
「ソ、ソンナコトナイヨー。ハッハッハッ」
「そうか？　ならええけど」
チッ、間の鋭い奴め。早々に話題を変えよう。
「にしても、四人も同じクラスってのも珍しいよな」
「そうだな」
「せやね」
「うん！　何か運命みたい！」
「「うん、そうだねぇ～」」
「どうしたの？･声を揃えて」
「「いや、何でもない」」
「変なの」コテン
そう言って首を傾げる皐月。実は皐月の無邪気な笑顔に和んでいただけなのだが、本人には口が裂けても言えない。
そういうとこなんだよなぁ、と、この時三人は思ったのだった。
暫く四人で世間話をしていると。
「「おおぉぉぉぉぉぁぁぉぉぉ!!!‼」」
「「よっっしゃぁぁぁぁぁぁぁ!!!」」
教室中の男子生徒から歓声と勝利の雄叫びが上がり、
「「おぉぉぉぉぉー」」
と、女子から感嘆の声が出た。
「此処までくると、な……」
「そうだな……」
「せやね……」

「んー？　どうゆうこと？」
「ん？　あぁ、それは」
　言葉を発しようとしたその時、
「琥太郎っ」
　俺は後ろから腕に抱きつかれた。
「うおっ!?」
　それを見た皐月は、
「そーゆーことだったんだね！」
　そう言ってサムズアップしてきた。
「どうゆうこと!?」
　何に納得したんだお前は!?
　――腕から脳に伝えられる幸せな感触ににやけそうなるが、何とか留まり、麗奈に、
「ってゆうか離せ麗奈！」
「むぅー」
　そんなことされたら、勘違いするだろうがっ！
　不満そうな声を上げながら、麗奈は組んでいた腕を離す。麗奈も皐月と同じ女子制服を来ていたが、リボンをしておらず、少しラフな感じを出していた。ソレがまた彼女の気まぐれさを表しているようだ。しかし、入学そうそう気崩すとは、中々度胸がある。
「いきなりくっつくでない。女子だろ？　襲われたらどうするんだ？」
「琥太郎なら大丈夫」
「俺には襲われても大丈夫だと……」
「ん」
「……」シュン
　何気に傷付くんですけど……此処まではっきりと、襲われても対処出来るって言われるとは……。
「いい感じにすれ違っとるね」
「あぁ、それでいて会話が成立してるのがまた凄いな」
「え？　琥太郎気付いてないの？」

「そうなんよ。びっくりするやろ？」
「知ってるよ！　こーゆーの鈍感って言うんだよね！」
「そうだな。でも琥太郎に入ってやるなよ」
「せやね。その方が面白そうやし」
「いや、そうゆうわけでいったんじゃ・・・まぁいいが」
　琥太郎はこの時麗奈に言われたことがショックで話は耳に入っていなかった。それと同時に、
「はぁ・・・」
「くっそ・・・リア充めぇ・・・」
「堂々とイチャイチャしやがって・・・」
「何であんなパッとしない奴に・・・」
　等々、罵詈雑言が飛び交っていたが、これも琥太郎の耳には入っていなかった。
「相変わらず仲がいいですね？　お二人さんは」
　そんなことを言いながら教室に入ってきたのは
「澪！」
「はい、皆さんお久しぶりです」
　澪だった。そして……。
「きたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
「うをぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!!!!」
　と、男子。そして……。
「め、女神・・・！」
「お、お姉さま・・・！」
　と、女子からも何やらフラグの匂いがしていた。
「な、何故だかものすごい数の視線を感じるのですが・・・？」
「諦めろ」
「あぁぁ、そうだな」
「慣れやで？慣れ」
「よく判らないけど、久し振り！」
「久しぶり」
「えっ、慣れですか……？」

澪は先の二人と違い着崩すこともなく、完璧に制服を着こなしていた。そこが彼女の真面目さをあらわしているのだが、それでも尚、彼女には気品が溢れんばかりに漂っていた。
「まぁ、それは置いといて」
「いや、置かないで欲しいのですが……」
「全員揃ったな！」
「スルーですか……？」
「全員揃ったな！」
「何が何でも流すんですね……」
「……」
ノーコメントで。ケッシテメンドクサイワケジャナイヨ？
「はぁ、分かりましたよ。流しましょう」
「よぉし、澪が折れたところで話を続けるぞ？全員揃うって偶然じゃないよな？」
「そうやなぁ……なんでやろな？」
「麗奈は何か知ってるか？教官から何か聞いていたりとか」
「知らない」
「そうか……まぁ気にしてもしょうがないし、そのうちわかるだろ」
「フッ……お前らしいな、琥太郎」
「せやね、確かにその通りや」
「もっと楽しいこと喋ろー？」
「そうだな」
「私の用件ってこれだけのためにスルーされたんですね……」
人知れず、落ち込む澪だった。

◇◇◇◇◇

そして皆で世間話をしていると、教室のドアが突然開いて教官が入ってきた。
「おおぉぉぉぉぉぁぁぁぉぉぉぉぉ!!!!!!」
――今度はクラス中の生徒が声を上げる。

「うるさい!!」
「お、おぉぉぉ……」
　今度はさっきとは違う意味で声が上がる。
「まったくなんなんだ、一体？　入った途端に大声を上げられるなんて初めてだぞ？」
　まぁ、教官の見た目じゃあねぇ？　傍目からみたら軍服姿の美女にしか見えないからなぁ。これで四十才越えてるとか詐欺だろ。
「こほん。えー、今日からお前たちの担任となった桧並だ。桧並先生でも、教官でも好きなように呼べ。先に言っておくが、其処にいる桧並　麗奈とは親子だ」
　多分さっきからチラチラと教官と麗奈をクラスのやつらが見比べてたからだろうが……。
「えええええええええええええええええええ!!!!!」
「うるっっさぁぁぁい!!」
「えええぇぇぇ……」
　やっぱこうなった。なんの茶番だ、これ？皆も呆れた顔してるじゃねぇか。
「話を続ける。これから講堂へと移動し、入学式を行う。そのあとはカククラスの教室へもどり自己紹介などを含めたレクリエーションとカリキュラムの説明、デバイスと校章の配布と、その後身体測定を行った後に、〝異彩開花の儀〟を行う、以上だ。質問はあるか？」
「教官、質問良いですか？」
「駄目だ」
「えっ……？」
　いや、「今質問はあるか？」ってきいたじゃん、あんた。
「冗談だ……そのっ……なんだ……場を和ませようと思ったんだよ……うぅ、そんな目でみるなぁ！／／／」
「逆ギレ!?」
「「ズッッッキュュュュュュュュン」」
「うわっ!?」
　なんだ今の!?

「ま、マイエンジェル・・・」
「神々しい・・・」
「お嬢様・・・」
「か、可愛い・・・」
「な、なんだ!?　急にどうしたんだ!?」
　クラスの女子を中心的にそんな事を口走るやつが出て来た。そして現在、教官に詰め寄って質問責めにしてる。
「いやいやいや、明らかにおかしいだろ!?　特に”お嬢様”ってなんだよ!?　お嬢様な年齢なのはお前らだろ!?　何で女子のほうが多いんだよ!?」
「おぉ！　鋭い突っ込みやなぁ。芸人目指せるんちゃう？」
「そうだな、今のは鋭かった」
「お笑いはよくわかりませんが、凄かったです」
「うん！」
「ん」
「納得してねぇで止めんの手伝だえやぁぁぁぁぁ!!」
　ここに今、一際大きな声が響いた。
「まったく、いい加減にしろ」
「すみませんでした……」
　あの後結局教官の一喝で事態は収まった。
「教官が始めからビシッと言えば好かったのに……」
　そんな俺の呟きが聞こえたのか違うのか教官が、
「何か言ったか？」ニコッ
「イエ、ナンデモナイデスヨ？」
「……ふんっ」プンプン
「あはははは……」
　大丈夫か？　このクラス？
「それじゃ時間も押してる。番号順に並べ、講堂へ行くぞ」

◇◇◇◇◇

無事に入学式を終えた後、俺達は教室へ戻ってきた。途中まで内容は覚えていない。だって寝てたし。驚いたことと言えば、学園長が団長だったり、新入生代表で澪が抱負を述べたぐらいか？そう言えばいつの間に居なくなってたな、澪のやつ。

「さて、それじゃあ自己紹介といこうか。前から順番に行ってくれ。なに、そこまで詳しく言わなくてもいいさ。時間はこれからはたっぷりとあるからな」

教室の構成は大学の教室に近い構造だ。擂り鉢状の空間の底の方に黒板と端末がセットしてある。席は自由で、それぞれの席に画面があって、其処に黒板に書かれた板書が写される仕組みだ。

よく出来てんなぁ。にしても、２０００年代は黒板に書かれた文字を直接見ていたらしい。遠くからじゃ見えにくいだろうに。

「さ、どんどんいこう。それじゃあ始めてくれ」

「は、はい！」

指名された女子生徒は声を上擦らせながら自己紹介を始める。

「さ、笹木　恵梨、です。しゅ、趣味は――」

と、どんどん自己紹介は進んでいく。

「青山　輝樹だ。みんなと仲良くしていきたいと思ってるから、そのつもりで。趣味はサーフィンで、好きな食べ物は、オムライスかな？みんなよろしく！」

「「キャァァァ／／／／」」

女子たちが黄色い声援を送る。

「「チィッ……イケメンがァ……」」

男子達が舌打ちをする。

うへぇ、イケメンだよ。しかも爽やかタイプの。宗と丸被りしてんじゃねぇか。エセ関西弁が無かったら。完全にキャラ被ってるぞ。

……にしても、胡散臭い笑顔だな。心の中では人を見下してそうな、そんな気がする。俺がイケメンを憎みすぎてそう見えるだけか？どんだけイケメンを憎んでんだよ、俺。

そうこうしているうちに、澪の番が来た。因みに男子達の注目度が尋常じゃない。
「みなさんこんにちは。私は鞠智　澪と言います。趣味は料理と読書です。これけら同じ学び舎で過ごす皆さんと仲良くできたら、と思います。よろしくお願いします」
男子達から、ため息が出た。
「あの方は新入生代表の……」
「か、完璧だ……」
「宝だ……我が国の至宝だ……！」
……うわぁ、気持ち悪っ……。熱に浮かされてる様な顔してやがるぜ奴ら。確かに澪はそんじょそこらのアイドルより整った容姿をしてるが、それを差し引いてもキモイ位の反応だ。
これが後の、［澪様親衛隊］の創立生徒に対する俺の第一印象だった。
お、次は宗か。
「お、どうもー。わいは櫃原　宗っていうんや。よろしゅーな。趣味は特に無いなぁ。あ、剣術だったら修めとるで。みんなよろしゅーな」
ぶれねぇな。ここでもエセ関西弁を続かんのか。もはや尊敬するは。
「「かっこいい・・・」」
……え？
「剣術のできる関西弁のお兄さん……」
「「キャァァァ／／／／」」
あんれぇ？おっかしーなー？
普通驚くとこだろ・・・あ、もしかして剣術と、関西弁が和風の雰囲気を醸し出してるのか？それに初対面だし。ははぁん、それで不自然に思われなかったのか。けどこのままじゃバレた時に困りそうだな。まぁ、自業自得だな。
後に、［宗くんを可愛ガールズ］が結成される事になる。

「皐月はねー？皐月だよ！よろしくね！動くことと、お菓子がすきだよ！みんなよろしくね！」
「「そうなんだねぇ～」
「あぁ、癒される・・・」
「あの未成長のなだらかな肢体……なんと尊いのだ……!!」
「あの笑顔こそ、我が誉(ほまれ)よ」
「おぉ！我が同志達よ!!」
クラス内に潜む変態紳士(ロリコン)が覚醒した瞬間だった。
お巡りさん、こいつらです。
やばいな。何がって、一クラス５０人近く居るこのクラスだけでも、４人の変態紳士(ロリコン)を観測してしまった・・・。さっきの澪の時のやつらのことを考えるとこのクラスに居る変人の割合は多そうだ。
余談だが、この変態紳士(ロリコン)達が後に、[皐月ちゃんにお菓子をあげ隊]の創立者となるのは最早言うまでも無い。
「桧並　麗奈」
そう言うやいなや、麗奈は机に突っ伏した。
……ぶれねぇなぁ、麗奈のやつ。
まぁ、ぶれないのは悪い事じゃ無いが……
「ちゃんと自己紹介をせんか！」ゴツン
「ううっ、痛い……趣味は無い。好きな動物は猫。以上」
「はぁ、もういい。次に行こう」
はぁ、無口過ぎるのもどうかと思うんだがな……表情はコロコロ変わるのに。
「無口で神秘的な少女……女神!!」
「心が浄化されていく……はぁぁ!!」
「はぁ…はぁ…はぁ…はぁ…／／／／」
うわぁ……こっちにもいたよ。まぁ、麗奈は可愛いいから仕方がないって言えばそうなんだけど。
最早お察しだと思うが、[桧並さんに癒され隊]が結成された。
おっと、遂に俺の番か……めんどくさいなぁ。
遂に来たか、覚悟を決めろ。……しんどいなぁ……はぁ。

「御笠　琥太郎です――ひっ!?」
　俺はクラス中の男子生徒から殺意の込められた視線を向けられていた。
「あいつめェ……澪様と話していたな……殺す」
「なんだと!………殺す」
「ほほぉ……あいつがそうなのかぁ……殺ろうじゃないか」
「あ！　それにあいつ、朝、桧並さんと腕を組んでやがったヤツじゃねぇか!……ぶっ殺す……」
「はぁ!?　二股だとぉ?……殺ってやんよぉ!!」
「それだけじゃない、皐月ちゃんとも話していたぞ!!」
「なんだとぉ!!……粛・正☆だな」
「そうだ！　粛正するんだ！」
「「粛正!!」」
「「粛正!!」」
「「粛正!!」」
「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺殺殺――」
「ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ!!!!」
　怖っ!!命の危機を感じる……俺の生存本能が今までにないほどの警戒レベルに引き上げられている!!
　早く座ろう……。
　こうして俺の自己紹介は終了した。
「はぁ……これからどうなるんだ?俺は」
　粛正される未来しか見えない。
　校舎裏への招待状を渡されるのだろうか……。
　いや、めげるな俺よ!まだ高校生活は始まってすらいないんだ、これから友達を増やせばいいじゃないか!……増やせなかったら強制バッドエンドだけどな!
　やっぱ不安しかないいや、ははは。
「次のやつ、自己紹介だ……ふわぁ～」

「先生眠そうだよね？」ヒソヒソ
「だよねー！でも、そこがまたあの見た目とのギャップ萌えってやつ？があって可愛いよね～！」ヒソヒソ
女子生徒のそんな密談が聞こえた。
……自分の預かり知らぬ所で好感度稼いでるな、あの人。
「ん？俺か……」
――そう言ってとある男子生徒が立ち上がった瞬間。
「「キャァァァァ!!／／／／」」
――女子達から今日最大の黄色い悲鳴が上がった。
「クール系王子様よ……!!」
「かっこいい……／／／／」
「あぁ、神よ。このクラスにしてくれたことを感謝します……」
「きゅうぅぅぅ」バタリ
まじかよ……一人気絶したぞ。どんだけイケメンだよ、雅也は。
気絶した女子生徒を見ながらそんな事を考える。
「俺は水上　雅也。趣味は修練と写真を撮ること。得意なことは……そうだな、強いて言えば槍術を嗜んでいる程度だ。これからよろしく頼む」
へぇ、写真を撮るのが趣味なのか。意外だな。でもどんなものを撮ってるんだろ？後で聞いてみよう。
「きゅうぅぅぅ」バタリ
「きゅうぅぅぅ」バタリ
「きゅうぅぅぅ」バタリ
あ、さっきまでキャアキャア言ってたやつじゃん。結局お前らも気絶すんのかよ！
その後も自己紹介は進んでいき、遂に最後の一人となった。
「小生の名は、拿戸邉東郷（なとべとうご）でござる！だがしかし、この名は世を凌ぐ仮の姿。しかして我真（わが）名は――」
「よーし、全員自己紹介は終わったな？」
「なっ！……またれよ！我真名は――」
「終った、な？」

「はい……」
折れるの早っ！何が「我真名は～」だ。只の厨二病拗らせたやつじゃねぇか。教官めんどくさくなって途中で割り込んだにちげぇねぇな。
「よし、じゃあ次は身体測定と〝異彩開花の儀〟を執り行う。男女共に更衣室へ行き、ここへ十分後に集合だ。いいな？それじゃあ、各位解散！」
こうして入学式と初日の日程は進んでいくのだった。

第十四話～開花の儀～

「よし、お前たちには、これから”開花の儀”を執り行い”異彩”の力に目覚めてもらう。一応説明するか。”開花の儀”とは、ｉｐウイルスを体内へ取り込み、脳内に封印されている残り９０％の脳の力を解放する儀式だ。この時、力の解放の副作用により、”異彩”の力が目覚める。そして、力を解放した人間――異彩持ち（パレット）は通常の人間の３～４倍の身体能力を有する。この為、普段は開拓団がウィルスを管理している。ここまで理解できてるか？」

ウンウンと頷く生徒達。

「よろしい。今から君たちには血を提供してもらう」

「「はいいいい!?」」

唐突な教官の発言に生徒達がざわつく。

「話を最後まで聞け!!」

「「はい！すいませんでした！」」

一瞬で謝る生徒達。最早お決まりの茶番と化している。

「まぁ、血を提供と言ってもごくわずかな量だ。何故血を提供するかというと、ウィルスをお前たちの肉体へ馴染ませるためだ。ウィルスは本来肉体からしたら異物だ。そのまま肉体へ入れたら、拒絶反応を起こして最悪死に至る」

怖っ!?魔物と命を賭け合う前に、自分で命を賭けてんじゃん！

さすがに、このタイミングで騒ぎ出す生徒は居なかった。

「だから予め血と混ぜることにより、体内へ取り込み安くしている。――まぁ、死ぬときは死ぬがな」

教官の言葉に固まる生徒達。

「まぁ、心配するな。事前の検査では、全員適正が有ったんだろ？なら大丈夫だ」

今度はホッと息を着く生徒達。

実は事前に精密検査を受けていたのだ。二時間位時間を掛けて。ホント、開拓団って金を持ってるよなぁ。

「さ、説明は以上だ。”儀式の間”へ行くぞ」

解説ご苦労様です。画面の前の皆もわかったかね？
……はっ！俺は、今何を……ってそんなことより！今聞き捨てならないことを聞いたぞ！
「教官？質問良いですか？」
「なんだ、何か不明な点でも有ったか？我ながら結構分かりやすい説明が出来たと思っていたが？」
「いや、分かる分からん以前に、”儀式の間”って何ですか？そもそも説明されてないんですけど……」
「あっ……」
「忘れてたんですか……」
「……」
「図星なんですね……」
「てへっ☆」
「えっ……」
「ッ！……／／／」
「自分で恥ずかしがらないでくださいよ……」
やっぱ親子だわ。と、そう思わずには居られなかった。

◇◇◇◇◇

「こほん。では、説明を補足する。”儀式の間”とは、開花の儀を執り行う専用の施設で、其処には開花した異彩の属性と系統を調べる装置がある。まずお前たちにはこれを渡しておく」
そう言って渡されたのは針だった。
「後は、いけばわかる。以上。では、行くぞ」
今度こそ解説ご苦労様です。いやぁ、ワクワクしてきたぞぉ！
”異彩”だぞ!?あの摩訶不思議な”異彩”!!一体俺のはどんな能力なんだろうか！氷を操ったり、地からが上がったり、火に強くなったりするのかな？うおおおお!!ちょー楽しみ!!

げふんげふん。としがいもなく取り乱してしまった……。
そんな事を考えている内に、”儀式の間”に着いた。
「さぁ、ここが”儀式の間”だ」
そう言って立ち止まった教官の後ろに佇んでいたのはとてつもない存在感を放つ門だった。
「っ……！」
思わず息を飲む。まるで、品定めをされているような、見定められているような。そんな威圧感を感じる。
「流石にキツいな……」
ふと、そんな教官の声が聞こえた。
（あれ？よく見ると教官の額に汗が滲んでる。まじかよ……教官が緊張するなんてどんな扉だよ。いや、団長にも緊張してたから案外チョロいのかもしれない）
「……ッ!!」
ゾッと背中に悪寒が走る。
まるで、「無礼者ッ!!」とね目附られたかのように。
……おいおい、まじかよ……何で悪寒がしたんだ？それも、扉のことを馬鹿にしたタイミングで。ははっ、まさかな……

「大丈夫？」
「あ、あぁ。大丈夫だ。少し扉の大きさに驚いてただけだ」
「ならいい」
てか、麗奈は特に何も感じてなさそうだな。天然だからか？あ、それなら澪も当てはまるじゃん。そうだ、気にするのはよそう。触らぬ神に祟りなしって言う素晴らしい諺（ことわざ）が日本にはあるのだから。
「よし、これより”開花の儀”を執り行う。お前たち、今から門の中へ一人づつ入って貰う。いいか？門を潜るとき、絶対にしめ縄を跨ぐなよ。絶対にだ。跨いだ者は即刻退学とする。勿論異論は認めない。守れないものは学園を去ってくれて構わない。いいな？」
教官の有無を言わせぬ気迫に生徒達に動揺が走る。
まぁ、驚くよな普通。たかが縄を跨いだ位で退学なんて馬鹿げてる

とでも思ってんだろうな。俺か？俺はここ最近驚く事がたくさんあったからな、麗奈とか教官とか魔物とか、団長とか……。それにさっきの悪寒、あれをどうも無視できそうにないしな。

っていうか、普通神社とかにある明らか神々しいアレを跨ぐとかどんだけ神経図太いんだよ。俺はまず無理だわ。あ、あそこにしてあるしめ縄、右綯（みぎな）えだ。ということは、ここは一応女神様の領域って事になるのか

「いいな？では、開けるぞ。……開門！」

まるで悲鳴のような音を発（た）て、門が開かれる。　開かれたその先は、果てしない暗闇が広がっていた

「準備は出来ている、後はお前たちの覚悟の問題だ。先陣を切るのは誰だ？」

「俺が行く！」

静寂に包まれる中、先陣を切ったのは青山（あおやま）　輝樹（てるき）だった。

わぁお。まさかのサーフィン野郎が先陣を切るとは。女子に良いところを見せたいのか？

「フッ……」

「キャーーー／／／／」

――サーフィンやｒ……輝樹のウィンクに女子達が色めき立つ。

ん？明らかに今、麗奈に向かってウィンクしてなかったか？

「……」

まぁ、本人は全く気づいて無いけど……。にしても、ウィンクなんて使えるやつホントにいるんだな。

――数分後、青山が戻ってきた。

なんか、随分嬉しそうな顔してんな？　何かいい異彩にでも目覚めたのか？

「先生！　これを！」

「ほほう、中々有望なステータスだな」

ステータス

名前：青山　輝樹

種族：人間

年齢：１６

色彩適正：青、白

色素量：６００／６００＋０

健康状態：良好

状態異常：なし

異彩

系統：超人

銘（な）：【剣聖（ソードマスター）】

剣才：近接武器に属する武器の習熟速度上昇、近接戦闘においてステータス１．５倍

聖剣：魔物対する攻撃力１．５倍

〜系統〜

大きく、神族、魔族、超人、武具、現象、感情、法則、概念の８つつに分類される。

「剣聖（ソードマスター）か……名が体を表しているな。しかし忠告だ、あまり大っぴらに自分の異彩の”銘（な）”を告げるな」

「何故ですか？」

「ものにもよるが、基本的に異彩の”銘（な）”はその異彩の能力を表す。信頼の置ける仲間ならまだしも、誰彼構わず言いふらすのは自分を危険に晒す。だから開拓団でも、異彩については、系統しか聞いていない。まぁ、自己申告するやつもいるがな。だからあまり言いふらすのはオススメ出来ないな」

「そうですか……以後、気を付けます。ですが、クラスメートには伝えようと思います」

「何故だ？」

「これから一緒に学園生活を送っていく仲間なので、出来るだけ隠し事はしたくないんです。もちろん、相手が言いたくないなら、無理に聞き出しませんので」

「そうか、それは私が決めることではないからな。好きにすればいい」

「はい」

「それと、報告もわざわざ紙を見せなくていい。見られたくないやつもいるし、口頭で色彩適正、体力、生命力、色素量、系統、属性だけ伝えてくれればいい」

「わかりました」

◇◇◇◇◇

「終ったよ」

「ねぇ！　どんな異彩だったの？」

「中はどんな感じだったの！」

青山が女子達に質問攻めにあってる。
「ちょ、ちょっと待って！　ストップ！　ストップ！　ちゃんと説明するから、ね？」
そう言って宥めるサーフィン野郎。しかし、女子の割合が多いため、口許が緩んでる。
「まず、中に入ると、祠と紙の束があって、祠に儀式のやり方が掘ってあったんだ。それを読んでから儀式をしたんだ」
「具体的にはどうするの？」
「それは、行ってからのお楽しみだよ」（ニカッ）
「「キャーーー／／／」」
一々こんなんやってたら何時間掛かるんだよ……
「それで、僕の異彩なんだけど、剣聖（ソードマスター）って言って、剣才っていう近接戦闘時にステータスが1．5倍になって尚且つ剣術の習熟が早まる能力と対魔物戦闘の時に攻撃力が1．5倍になる聖剣って言う能力だったよ」
「「キャーーーかっこいい（テレテレ）／／／」」
「あ、えりがとう」
照れるサーフィン野郎。
剣聖（ソードマスター）だとお？まるで、主人公が持ってそうな能力……けっ、羨ましくなんてないもんね！……いや、ちょっとだけ？ちょっだけだよ？羨ましいなぁなんて思わなくも無かったりして？
……はい、嘘です。くぅぅぅぅ！　めっっっっちゃ羨ましいいいいいい!!　何だよ！　ちょーかっけぇじゃん！
羨ましさのあまり、唇を噛み締める。
「それで皆に頼みがあるんだ、少し聞いてくれないか」
「何々!?」
「聞く聞く！」
「あ、ありがとう。実は皆にも出来る限り異彩の銘（な）を教えて欲しいんだ」
「どういう事？」
「あぁ、それはね、先生曰く、本来異彩の”銘”は他人には言わない方

がいいらしい。自分の異彩の能力を表すのが――”銘”――だからね。
でも僕は思うんだ。だからこそ皆には出来る限り異彩の”銘”を教えて欲しい、と。
これから一緒に学園生活を送っていく仲間に僕たちは成っていく。もしかしたら、将来開拓団に入ってからも一緒になるかもしれない。そんな時、異彩の”銘”を知っている、と言うことは信頼の証になる。
だから俺は皆の”銘”を教えて欲しいんだ！勿論強制じゃない。教えたくない人や、言いたくない人もいるだろうからね」
「うん！　いいよ！」
「え!?　いいのかい？」
「もちろん！　これから同じクラスの仲間じゃない！」
「俺もいいぜ！」
「私も！」
「僕も！」
青山の提案に、賛同者が増えていく。
ほへぇ、すげぇな、イケメンの力ってのは。”銘”を言うことのリスクをちゃんと説明してる癖に、無条件で”銘”を言うように仕向けてやがる。それに、どんどん賛同するやつが増えてるから自分ものらなきゃいけないって思う日本人の集団心理を巧く使ってやがる。ま、本人にその自覚はないんだろうけど。
さて、俺はどうするか。正直、あまり言いたくは無いな。いくらこれから仲間になるといっても、会って間もないやつらに、自分の異彩を晒け出すなんて俺からしたら、頭のネジが飛んでるとしか思えない。そんな事を無条件でさせるカリスマがアイツにはあるんだろうか？そしたらモテるのか？……カリスマを身に付ける方法、調べとこっと。
「盛り上がるのはいいが、次は誰が行くんだ？時間は無限にある訳じゃないぞ」
「じゃあ、俺が行ってもいいですか？」
「あぁ、構わん」

「それじゃあ」
「ちょっと待ってくれ！」
　すると、突然青山が話しかけてきた。
「何だ？」
　嫌な予感がする。何故ならサーフィン野郎が正義感に満ち溢れた目でこちらを見据えながら話しかけて来たからだ。
「君の返事をまだ聞いてない」
「何のだ？」
　何かコイツから質問されたっけ？
「異彩の件だよ」
「ん？……あぁ！」
「思い出したかい？それで、返事を聞きたいんだけど」
「無理」
「へ？」
　その返答を予想してなかったのか、間抜けな声を上げるソードマスター（笑）
「聞こえなかったか？返事は〝ノー〟だ」
「ど、どうして！」
「はぁ？当たり前だろ。会って間もないのに教えられる分けないだろ。そもそも、だ。互いの事もまだ分かって無いのに、最も秘匿すべき情報をおいそれと差し出す方が可笑しいだろ」
「だ、だけど！これから一緒に学園生活を送っていく仲間じゃないか！」
「ならお前は初対面の人間に自分の個人情報を教えるのか？携帯番号や住所を、お前は教えるのか？」
「そ、それは・・・」
「なんだ？教えないのか？自分は異彩の能力を教えろと言ってんのに？それは筋違いだろ」
「……っ！」
「これ以上話がないなら行かせて貰うからな」
「……」

はぁ、折角のワクワクな気分が台無しだ。これからビッグイベントって時に言わなくてもいいだろっての。ま、気持ち切り替えていきますか！……カッコいい異彩でありますように！

なんとしてでもモテたい琥太郎であった。

◇◇◇◇◇

しめ縄をくぐり抜けた先の暗闇を抜けると、琥太郎は感嘆の声を漏らす。

「おおぉ……！」

地下空洞のようなその空間は、言い表せない神秘的な雰囲気を醸し出していた。

壁からは水が染みだし地面を濡らしており、所々から生えている水晶が放つ淡い光によって照らされた空間の中央、そこに一つの岩を堀抜かれて造られたであろう祠が、静かに鎮座していた。

そんな厳かな雰囲気の中、

キッッッッタァァァァァァァァ!! うおぉぉぉぉぉぉぉ!! めっちゃ雰囲気出てるぅぅぅぅ!! ……げふんげふん。お、落ち着け俺！ まだだ！ まだその時ではない！

俺のテンションはＭＡＸだった。

「えーっと？何々、『汝（なんじ）、”開花の儀”を受けし者なりければ、己（おの）が鮮血をもって我が供物（くもつ）とし、覚悟を証明せん』……って、なんだこりゃ？」

祠には龍の頭が掘ってあり、その口を大きく開けていた。

「この龍の口に血を垂らせばいいのか？」

俺は針で自分の指を刺し、龍の口へ入れた。

瞬間、龍がその口を閉じた。

「がッ――あ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛!!」
石で構成された牙が腕に食い込み、肉を裂き、血管を食い千切り、鮮血が噴き出す。
あまりの痛みに堪らず目を瞑り、歯を食い縛る。あまりの痛みに思考が乱れる。脳内が痛みの信号で満たされ、錯乱する。
しかし、噛みつく力は弱くなるどころが次第に強まってき、バキッ、ボキッ、っという不快な音が鼓膜に響く。薄れ行く意識の中、何とか助けを呼ぼうとするも、
「う゛――が、――」
言葉を紡ぐ事が出来ない。
「く、そッ……こんな、とこ、ろで、死んで、堪る、か!!」

ドクンッ!!

その時、大きく心臓が跳ねた。その瞬間、失いかけた意識が覚醒する。
「ッ!! ハァ、ハァ、ハァ」
呼吸が乱れる。まだ、意識が朦朧としている。
俺は、何を……! そうだ、祠の龍に腕を噛まれて……。
「――ッ!!」
そして、目を見開く。其処には……
「噛まれて――無いッ!?」
……其処には、怪我はおろか、龍の頭さえ無かった。
どういう事だ!?俺は確かに腕を噛まれて……
いくら考えても結論は出ず、静かに祠が鎮座するのみで。琥太郎は終(しまい)には……
「ま、いっか」
思考を放棄した。

怪我もしてないし別にいっか。疲れてただけかもしれないし。考えてもわからないんだ、成るように成るしかないだろ

明らかに異常事態だが、琥太郎は細かいことは気にしないタイプだったので、スルーを決め込んだ。

「あれ？こんなのあったっけ？」

祠の隣には、紙束の積まれた机が置いてあった。

「えーっと？『この紙を祠の中の祭壇へ置き、血液を垂らして下さい。名前、年齢、種族、色彩適正、健康状態、状態異常、保有色素量、異彩、系統の9科目が記されます』――ってさっきと全然書き方変わってね？」

まぁ、いいけど。

「さて、今度は何もないよな？」

そう言って血を祭壇に置いた紙に垂らす。

「おおぉ！すげぇな、これ」

血が紙に染み込むと、文字が浮かび上がってきた。そして、それを覗き込むと……。

「――――は？」

俺は、思わず間抜けな声を上げた。

ステータス

名前：御笠（みかさ）　琥太郎（こたろう）

種族：人間

年齢：１５

色彩適正：黒、白、灰色

色素保有量：２０００／２０００＋０

健康状態：疲労［軽度］

状態異常：なし

異彩

系統：ηβξλΨπφφδ

銘：【Жφξδλμωφ Д Ё Ψ】

Ψ Ж ξ ω Д Ё Ё ξ φ ξ Д ξ δ ξ φ φ Ё λ Д φ μ ξ ω Ё Д μ ξ δ Ж
δ φ μ ξ μ ω φ φ ξ δ φ ω Ё Ψ λ ω ξ ξ δ μ ω μ φ φ Д Ё λ Ψ λ Ё
Ё Д φ ω ξ μ ξ μ Ж δ δ φ δ ξ μ ω φ ω Ё Д φ ξ μ Ж δ Р γ К δ ξ
ε υ π Γ υ λ ο υ λ ι ξ Х Υ ν λ γ φ μ δ В ζ δ ο γ ξ ε γ φ ε Φ
ξ σ γ ξ δ Φ ξ Ψ Φ υ ρ ι μ κ ξ Х β φ λ ξ ξ δ φ Х Х β Х О ε φ
ε π ε χ μ χ δ ξ γ τ β η О Х β φ κ ο ε χ λ φ π λ μ ξ γ ο δ φ
ε χ ε γ ξ Ξ θ Ψ κ Λ γ φ ε χ γ τ φ

第十五話～怒ると怖い人っているよね～

ステータス

名前：御笠（みかさ）　琥太郎（こたろう）

種族：人間

年齢：15

色彩適正：黒、白、灰

色素保有量：2000／2000＋0

健康状態：疲労［軽度］

状態異常：なし

異彩

系統：ηβξλΨπφφδ

銘：【Жφξδλμωφ Д Ё Ψ】

ΨЖξωДЁЁξφξДξδξφφЁλДφμξωЁДμξδЖ
δφμξμωφφξδφωЁΨλωξξδμωμφφДЁλΨλЁ
ЁДφωξμξμЖδδφδξμωφωЁДφξμЖδРγКδξ
ευπΓυλουλιξХΥνλγφμδВζδογξεγφεΦ
ξσγξδΦξΨΦυριμκξХβφλξξδφХХβХОεφ
πεχμχδξγτβηОХβφκοεχλφπλμξγοδφ

εχεγξΞθΨκΛγφεχγτφ

「――――は？」

――人間は、驚き過ぎると放心する。コイツのように。

俺は自身のステータスに写し出された文字を直ぐに理解することが出来なかった。

だって読めないんだもん。

どれくらいだったか覚えてないが、結構な時間、俺は間抜けな顔をしたモニュメントと化していた。

そして、我に帰った俺は――

「はぁぁ!?　どうなってんだよ!?　訳わかんねぇ！　読めねぇわ！　ボケっ！」

めっちゃ混乱した。疑問符で埋め尽くされた頭で何とかバグった理由を考えるも思い付くはずもなく、唯々喚くしかなかった。

「おいおい、マジかよ……マジかよぉ……楽しみにしてたですけどぉぉ!!……」

――霊験灼（れいげんあらた）かなその空間に、琥太郎の悲痛な断末魔が虚しく響いた。

◇◇◇◇◇

「おぉぅ、これは……バグってるのか？」

「デスヨネー……」

教官の何とも言えない気まずそうな呟きを聞いて、思わず俺は溜め息を吐く。

だって、教官がこの反応よ？　つまり、教官も一度も見たことのない結果って事でじゃん。詰んでんじゃん。俺の開拓団への夢が入学直後に詰んでんだけど？　どゆこと？

「そう溜め息を吐くな。まだ希望はある……はず」

「ははは……」

「異彩はよくわからんが、色素保有量がそれなりに多い。これからの訓練次第ではもっと増える可能性もある」
「本当ですかっ!?」
「ひゃっ！　きゅ、急に大きな声を出すな！」
「す、すいません。ついテンションが上がってしまって……」
「まぁ、気持ちは分かる。自分の異彩の系統さえわからないなんて結果かが出たら、なぁ……」
「俺になにか問題でもあったんでしょうか？開花の儀に影響を与えるような事をした覚えは無いんですけど……」
「私は専門家ではない。だから詳しいことはわからんが、少なくとも才能は問題ないと思う。寧ろ才能は破格だろう」
「どういうことですかっ!?」
「っ！　だから大きな声を出すなっ！」
「そんなことより！　どうゆうことですか？」
「琥太郎、お前、だんだん遠慮しなくなってきたな……まぁ、いいが。いいか？　普通、色彩適正が三色もあるなんてのは異常だからな？」
「そうなんですか？」
「何が『そうなんですか？』だ。そもそも、色彩適正っていうのは、赤、青、黄、緑、紫、白、黒の７つから……ん？　んん？」
「どうかしたんですか？」
　え？　何？　俺は知らぬ間にまた何かやらかしたのか？　もしそうなら、これ以上俺のＨＰ（心）を抉るのは勘弁してくれ……
「……琥太郎、もう一度ステータスを見せてくれないか？」
「どうしてですか？」（ビクビク）
　――突然の要求に、おっかなびっくりしながら質問する琥太郎。
「いや、少し確認したいことがあるだけだ」
「はぁ、別にいいですけど……」
「すまない」
　――そう言ってステータスを食い入るように見つめる教官。
「これは……！」
　――そして目を見開いて驚愕する教官。

「な、何かあったんですか？」
　頼むからこれ以上は勘弁してくれ……！
「琥太郎、お前は色彩魔術において、色彩が何色あるか知ってるか？」
「？　さっきも教官がいってたじゃないですか？　赤、青、黄、緑、紫、白、黒の７つです」
「あぁ、その通りだ。琥太郎、お前の色彩適正の数は三色。これだけでも破格の才能だか、その中身が更に問題だった」
「これ以上何があるんですか……？」
「お前の適正色彩は白、黒、灰の三色だ」
「はぁ、それのどこにもんだ――ん？　灰？」
「そう、灰だ。色彩魔術の中に、灰色は存在しない」
「っ！そ、それってつまり……どゆこと？」
　――思わずずっこける教官。明らかに呆れている。
「お前というやつは、全く……」
「冗談ですって、冗談」
「コイツ……」
「流石に俺でもことの重大さは分かります。要は存在しない色彩がどのような効力を発揮するかわからないって事ですよね？」
　――説明しよう！　そもそも、色彩魔術は赤、青、黄、緑、紫、白、黒の７つ色彩から成り立っているが、それぞれ、
　赤：火、及びを司る。
　青：水、及びを司る。
　黄：土、及びを司る。
　緑：風、及びを司る。
　紫：毒、及びを司る。
　白：光、及び聖を司る。
　黒：闇、及び魔を司る。
　となっているが、それ意外の魔術――探索（サーチ）、治癒（ヒール）などの、どの色彩にも属さない魔術もあるが、そのほとんどが攻撃力のないものになるため、カウントをしていない。
　そして、何故色で識別するのか。属性でもよくね？と思うかもしれ

んが、その理由はそれぞれの色彩適正を持った異彩持ち（パレット）の魔力色が赤、青、黄、緑、紫、白、黒の7つ色彩に別れたことによる。ぶっちゃけると、分かりやすいからだ。

と、まぁ、長ったらしく説明してきたが、要はそれぞれの色彩にそれぞれ司るものがあるってこと。だから灰色が何を司るかわからないからなに起こるかわかんないじゃん、ヤバくね？　って話。以上！

「要約し過ぎだ。まぁ、そう言うことだ。全くどうして、お前は面倒事を持ってくるんだ？」

「そんなこと言われても……俺も困ってます」（ドヤッ）

そんなの俺が知りたいですよ。

「開き直るんじゃない」

――呆れる教官。まぁ、そうだろう。この様なステータスを持つ者など、前代未聞なのだから。

「でも俺にどうしろって言うんですか？正直に言って、一番テンパってるの俺ですよ？」

「取り敢えず学長に報告だな。そのあともう一度精密検査を受けてもらう。それも色彩魔術を使った方をな」

「色彩魔術を使った方とそうじゃない方の違いって何ですか？」

「簡単に言えば、色彩魔術を使った方の精密検査は、体内の色素の流れや異彩のより詳しい能力を調べる事が出来る」

「ん？　異彩の詳細を調べれるって言うのは分かりますけど、色素の流れ？　って言うのは調べる意味があるんですか？」

「色素の流れが乱れていると体調を崩したり病気に掛かりやすくなる」

「へぇ～。そうなんですか」

――軽く頷く琥太郎。軽すぎる気もするが、体内の色素の流れなんて言われてもちんぷんかんぷんな琥太郎に、感慨深そうに頷かれても逆に軽いと思われるだろう。

「軽いな……まぁ、そう言うことだ。いずれにせよ、詳しい調査が必要になるな」

「因みにその精密検査ってどこでやるんですか？」

「【治療院】だろうな」
「治療院って確か、団員の治療や異彩の研究を専門にしてる所でしたよね？」
「そうだ」
――またまた説明しよう！　まず、開拓団本部の敷地内はめっちゃ広いのだ。約東京都の二倍の広さがある。驚きやろ？　そんなばかでかい敷地面積を誇る開拓団が何で一つの”市”に収まってるかというと、敷地を覆うように働いている”結界”の力によって時空を歪めているため、公立高校と同程度の広さに外界からは見えるようになっている。だって開拓団って市民の人達に秘密にしてる事めっちゃあるし。
　そして、この結界を発動させているのが、敷地を覆っているフェンスに刻まれている【色彩刻印】だ。この刻印は開拓団創設時より施されており、創立が２４００年の為、かれこれ５００年の間、効力を維持しているのである。偉い！
　げふんげふん。失礼。そして、【色彩刻印】にはもう一つの役割がある。
　それは、結界内のものを外界へ出させない、というものだ。これは敷地内で魔物を放し飼いにしていたり、新しい色彩術の実験をしたりしているのもそうだが、最大の理由は”Ｄゲート”から魔物が溢れた場合に外界へ逃がさないためだ。だってヤバイじゃん？一般人が凶暴な魔物に勝てると思う？　挽き肉されるのがオチじゃん？　だからこその結界なのだよ。Ｄｏ　ｙｏｕ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ？
　まぁ、結界の事はここまでにして、次に行こう。次に。
　そして、前に琥太郎が説明してたと思うが、開拓団には幾つかの施設がある。
【メイン棟】：任務の受注、福利厚生、市民等の一般客を受け付ける。
【治療院】：異彩の研究、及び団員の治療を行う。
【生物研究棟】：異界の植物や生物の研究を行う。
【工房】：魔物に対抗する為の武器や、色彩魔術の研究、及び開発を行う。

【寮】：開拓団員の宿舎。
【学園】：開拓団員を育成を行う。クラス棟・実験棟・第一演習場・第二演習場・第三者演習場・学生寮・開花の儀式場の７つの建物より成り立つ。
　以上の建物に加え、敷地内には山、谷、川、湖、森林などの大自然が広がり、魔物を放している。何故魔物を放しているかというと、魔物の研究の為。そして、魔物と人の共存を模索するためだ。まぁ、この際詳しいことは省こう。いつの間にか脱線しまくっていたようだ。
　話を戻そう。【治療院】は先も述べた通り、異彩の研究を行っている。そして、これは【生物研究棟】と【工房】にも、共通して言える事だが、まず技術力が凄い。それと比例して変人も多い事で有名だ。その為、今回の琥太郎のようなイレギュラーな事態は【治療院】からしたら格好の餌なのだ。
「俺、モルモットとかになりませんよね？」
「……」
「ちょっと！　否定してくださいよ！わりと真剣なんですけど！」
「強く生きろ、琥太郎」
「まじかよぉ……」
　どこのテンプレマッドサイエンティスト集団なんだよ。ホルマリン浸けとかになんないよね？
　――悪い妄想がどんどん膨らんでいくが、彼の”成るようになる、成らないならば自力でなんとかする”主義による審議の結果、彼は腹をくくる事にした。
「よしっ！どうせ成るように成るんだったら目一杯抵抗してやる！もしもの時は、舌を噛みきってやる……！」
「お、おぉう……」
　――鬼気迫る琥太郎の勢いに、教官もドン引きである。
「取り敢えず、今悩んでも仕方ないんだ。ドンと構えておけばいい」
「簡単に言ってくれますね……まぁ、そうですね。今悩んでも仕方ないですよね」
「そう言うことだ。また相談に乗ってやる。それから、異彩と三色持

ちであることは口外するなよ」
「わかってますよ。ありがとうございます」
——こうして、結局流されてしまう琥太郎だった。

◇◇◇◇◇

——着々と”開花の儀”は進んでいき、最後の一人が出てきた所で、教官が話を始めた。
「よし、全員終わったな。今日の予定は以上だ。ご苦労だったな。この後は各自自由行動だ。学園内を出歩くも良し、帰宅するも良しだ。ただし、学園の敷地内の”境界線”より、外へは行くなよ。魔物避けの結界は”境界線”より外には働かないからな」
「「はい！」」
「それでは、解散！」
——そう言うと、教官は何処かへ行ってしまった。
そして、それぞれが一斉に動き出す。
学園を散策する者、
帰路に着くもの、
クラスの者と語らう者、
様々な反応をするなか、一人の生徒が声を上げる。
「皆！少し聞いてくれ！」
——声を上げた青山は生徒一人一人を見回すと、
「さっきも言ったと思うけど、僕は皆から異彩の能力を教えてもらってる。それは、これから僕達が同じ学舎（まなびや）で生活を共にする仲間になるからだよね。だからもう一度頼もうと思う」
こいつ、まさか……！
——案の定琥太郎嫌な予感は的中することとなる。
「御笠君、國原君、水上君、菊地さん、七瀬さん、麗奈さん。どうか、異彩の”銘（な）”を教えてくれないかな？」
——そう言って頭を下げる青山。
「テメェッ……！」

――思わず言葉が荒くなる琥太郎。それもそうだろう。なんせ、青山はわざとクラスの生徒達を巻き込むことで、琥太郎達が断りにくい状況を作り上げたのだから。
やってくれたな、この野郎。てか、麗奈達もやっぱ断ってたか。……ん？待てよ？今、青山は麗奈さんって言ったのか？青山は麗奈に気があるのか？それに、名前で呼んだってことは少なくともそれなりの仲にのはずだ。だったら麗奈が異彩の”銘”を教えるのを断る理由はないはずだ。
――青山と麗奈の関係が気になっていた琥太郎は次の言葉で混乱することになる。
「気安く名前で呼ばないで」
「えっ？」
――麗奈の言葉に対して声を上げたのは、青山か、はたまた琥太郎か。
「す、すまない、よく聞こえなかったよ。もう一度言ってくれないかな？」
――惹き吊った笑みを浮かべながら何とか言葉を紡ぐ青山。そこへ麗奈が容赦なく言葉を叩き付ける。
「だから、気安く名前で呼ばないで。私は友達でもない人に名前で呼ばれたくない。それに、馴れ馴れしい」
あれ？名前呼びなのは青山が勝手に呼んでるだけなのか？……よかった。にしても、麗奈のやつ、容赦無いなぁ。
――麗奈は一切の表情を動かさず、冷ややかな目を青山に向けながら言葉を浴びせる。流石に堪えたのか、青山は口をパクパクさせながら震えている。すると、
「な、なんですって！輝樹君がこう言ってるのにその物言いは何よっ！」
「そうよ！輝樹君に失礼じゃない！」
「マジちょうしのってるっしょ！ふざけんなし！」
――約一名毛色の違う女子が紛れていたが、クラスに入ったときから輝樹の傍にいる女子の取り巻き（これより、青山ガールズとする）が

騒ぎ出す。
「関係ない貴方達にどうこう言われる筋合いはない。引っ込んでて」
（いつもにも増してよく喋るなぁ、声にも怒気が混じってるし、顔なんて怒ってるのを隠そうともしてない。相当頭に来てるんだろうな）
――琥太郎の予想通り、相当頭に来てるのか若干震えている。しかしそれを怖がっているものと勘違いした青山ガールズは調子に乗って更に言葉を浴びせる。
「ふんっ、どうせ輝樹君に話しかけて貰えて調子にのってるんだろう？輝樹君がいくらカッコいいからって図に乗るな！」
「少し顔が良いからってちょずいてんじゃねぇぞ？あたしらに喧嘩売ったらどうなるか分かってんの？」
「輝樹君意外の男子にも媚売っちゃって、あーやだやだ。どうせ他の男子も貴方の顔が目当てなんでしょ？」
――最後の女子の発言が特に頭に来たのだろう。
おもむろにペンケースに手を伸ばす。
麗奈の手元が一瞬霞む。瞬間、何が風を切る音がした。
そして、トトトンッ、と何が刺さる音が三連続。
「えっ……？」
――戸惑う青山ガールズ。それもそうだろう。何故なら、彼女達の頬には、一筋の赤い線が刻まれていたのだから。そこから頬を伝う、赤い液体。鉄の匂いを鼻腔へ運ぶその液体に触れた彼女達は次の瞬間、
「ひゃっ……」
――腰を抜かした。そして、麗奈は
「貴方達に喧嘩を売ったら、どうなるの？」
――まるで路傍の石を見るような底冷えする眼差しで、彼女達に歩み寄る麗奈。
「ねぇ、貴方達に喧嘩を売ったらどうなるの？」
「ひ、……ぁ、うぁ……」
――再度質問を繰り返す麗奈。まるで感情の籠っていない声が余計に恐怖を煽ったのか、彼女達の制服がアンモニアの匂いと共に濡れ

ていく。
「青山」
「ひっ……な、何かな？」
——これまでの光景をただ呆然と見ていた青山に麗奈が唐突に話しかける。
「私や、琥太郎達は異彩の”銘”を教えたくないって言ったの。別に私は貴方達と仲良くなりたい訳じゃない。琥太郎達がいてくれたらそれで良いの。だから私は友達を馬鹿にする人を絶対に許さないから」
「あ、あぁ。わかった……」
——有無を言わせぬ麗奈の気迫にただ肯定することしかできない青山。
「皆、行こ」
「「あ、はい……」」
——琥太郎達はクラスメイト達から呆然とされながら、その場を後にした。
麗奈は怒ると怖い。その事がよく分かる結果となった。

第十六話～友達っていいよね～

――麗奈が青山達にキレ、「ザマァw」と思わなくもない琥太郎はふと、気になった事を皆に聞いてみた。
「なぁ、何で皆もサーフィンやr――青山に異彩の”銘”を教えなかったんだ？俺自身は、会って間もない人間に自分の異彩の”銘”を教えるのはどうかと思ったからなんだけど」
――そう、それは青山がクラスメイトに提案した異彩の”銘”を互いに教え合う。と言うものに対してだった。
琥太郎が断ったのは、幾らクラスメイトと言えど、知り合って間もない人間に自分の力を教えるのは危険だと考えたから。
もう一つの理由は、自分自身ですら異彩の詳細はおろか、”銘”すら知らなかったからなんですが（笑）
「私は見ず知らずの他人に自らの異彩の”銘”を教えるなんて出来ないと思ったからです。それに、青山さんは何処か打算的な印象を持ちましたので」
「皐月はお父さんに『異彩の”銘”は信用できるやつ意外には絶対に教えるなッ!!』って言われてたからだよ！」
「俺も師匠から『安易に力をひけらかすな』と厳命されていたからな」
「わいは青山クンに申し訳なくなってなぁ」
――各々が返答を返す中で、琥太郎は宗の言ったことが気になった。
「申し訳ないって、どう言うことだ？」
「まぁ、皆は良いフラ無さそうやから言うけどな？わいのステータスを見たら分かるで」
――そう言ってステータスの書かれた紙を広げる宗。琥太郎達は、その紙を囲う様にして、宗のステータスを確認する。

ステータス

名前：國原（くにはら）　宗（しゅう）

種族：人間

年齢：１５

色彩適正：緑

色素保有量：５００／５００＋０

健康状態：良好

状態異常：なし

異彩

系統：神族

銘：【夜刀之神（ヤトノカミ）】

剣技此処に極（キレヌモノナシ）まれり：刀装備のみ発動、あらゆるモノを切る。

――宗のステータスを確認した琥太郎達は、

「確かに此れはな……」

ナニコレ？　かっこよすぎじゃありませんか？

「あれだけ女子生徒に騒がれていた後に言うには勇気が必要ですね……」

「また凄いのが出たな」

「なんだか、カッコいいね！」

「強そう」

「せやろ？これは何だか青山クンに可哀想でなぁ」
「「確かに……」」
――それぞれ感想を言い合うが、最終的には「青山ドンマイ」に落ち着いた。
「宗はステータスを見せて貰いましたし、この際です、私のステータスもお見せしますね」
――今度は澪が言い出した。さらに続くように、
「ならば、俺も見せよう。自分だけ見せないというのは筋違いだろう。それに、お前達のことは信用しているからな」
「じゃあ皐月も！皐月も！」
「ん」
――雅也、皐月、麗奈が続いた。
「お前ら良いのか？簡単に見せるもんでもないんだろ？」
「ええ、構いません。皆さんなら、見せても良いと思いますし」
「ん」
「そう言えば、琥太郎は開花の儀が終わった後、教官と何やら話し込んでいたようだが、何かあったのか？」
「そう言えばそうですね。……いえ、無理に言う必要は無いですよ。あくまでも自己満足ですから」
――そう言って微笑む澪。その笑顔には、友を気遣う色が見えた。
「いや、言っても良いんだが、口外はしないでくれると助かる」
とゆうか、ばれたら学園ヒエラルキーの底辺まっしぐらだから、なんとしてでも口外させぬ。
「言いふらしたりなどしませんよ。でなければ青山さんの提案を断ってませんから」
「そうやで」
「ああ」
「そうだよ！」
「ん」
――琥太郎は友の優しさを噛み締めた。まだ過ごした時間は少ないかもしれないが、そこには確かな絆が存在すると思ったから。

「そうか、すまない」
「琥太郎。こういう時は、謝罪よりもお礼の方が嬉しいものですよ」
「それもそうだな。ありがとう、皆」
「そうです！　皆さん一斉に出しませんか？」
「お、それ良いな！」
「それでは……」
――全員が声を揃えて、
「「せーのっ！」」
――同時にステータスを提示した。

ステータス

名前：鞍智（きくち）　澪（みお）

種族：人間

年齢：１６

色彩適正：青・白

色素保有量：８００／８００＋０

健康状態：良好

状態異常：なし

異彩

系統：神族

銘：【木花咲耶姫（コノハナノサクヤビメ）】

水神の加護・青の色彩魔術の習熟が早まる。また、水を自在に操る。

桜花を統べる者：桜の木を統べる。また、桜の木を自在に操る。

◇◇◇◇◇

ステータス

名前：七瀬（ななせ）　皐月（さつき）

種族：人間

年齢：15

色彩適正：

色素保有量：300／300＋0

健康状態：良好

状態異常：なし

異彩

系統：超人・感情

銘：【限界突破（ジブンニマケズ）】

向上心（アメニモマケズ）：感情の昂りによって威力変化。発動中、感情が昂り続ける限り身体能力が上昇し続ける。同時に身体へ負荷が掛かる。

不屈の心（カゼニモマケズ）：感情が昂り、肉体が限界を迎えた時に発動。身体の自己超速再生を行う。一度使うと一ヶ月のインターバルが必要。

◇◇◇◇◇

ステータス

名前：水上（みなかみ）　雅也（まさや）

種族：人間

年齢：１５

色彩適正：

色素保有量：４００／４００＋０

健康状態：良好

状態異常：なし

異彩

系統：武具

銘：【一騎当千（ゲイ・ボルグ）】

因果逆転：この槍は必ず当たる。

形状変化：無数の槍の穂先に分裂する。または、突き刺したモノの内部で破裂する。

◇◇◇◇◇

ステータス

名前：桧並（ひなみ）　麗奈（れいな）

種族：人間

年齢：１５

色彩適正：白

色素保有量：８００／８００＋０

健康状態：良好

状態異常：なし

異彩

系統：武具

銘：【巳鏡（みかがみ）】

表裏一体：鏡に写した色彩魔術を反転させる。

反射：色彩魔術を相手に跳ね返す。（確率で失敗）

◇◇◇◇◇

――麗奈達のステータスを確認した琥太郎は、一言。

「世の中、平等なんて無いんだな……俺には皆のような可能性は無さそうだ」

――まるで、悟ったかのような、諦めたような口振りで語る琥太郎。この言葉だけで琥太郎のステータスがあまり芳しくない事を悟った麗奈達は、各々が励ますように語りかける。

「元気を出してください。何も異彩が全てではないですよ？」

「せやで。他の分野で実力を伸ばしていけばええんよ」

「ああ、才能があったとしても、それは所詮は才能。使いこなせなければ、実力とは言えない。逆に言えば、才能が無くても最大限力を引き出せればいい」

「大丈夫！　これから伸びるって！」

「ん。今度クレープあげる」

くぅ……こいつらの優しさが染みるぜ……！

――それぞれが自分を励まそうとしてくれている事に感動を覚えながら、琥太郎は言う。

「皆ありがとう。励まそうとしてくれて。これで少しは前向きになれそうだ。それに、ステータスも一応見せとくよ。皆が見せてくれたのに自分は見せないってのは後味が悪いしな」

――そう言ってステータスを提示した琥太郎。しかし、それを見た麗奈達の反応は琥太郎の予想していたものとは違った。

「「……え？」」

――一様に驚きの声を上げる麗奈達。

そう、琥太郎は忘れていたのだ。自分が三色持ちであること、そのうち一つは新しい色彩であること、自分の異彩の系統すら読めない理由。

その全てを琥太郎は、異彩の”銘”がわからない＝異彩が使えないと思い込んでおり、そのショックですっかり忘れていたのだ。正直にいって、馬鹿だと思う。

「ん？どうかしたのか？……あっ」
——そして、今更気が付いたように声を上げる琥太郎。そして、
これ絶対に質問攻めに遭うやつだ……やらかしたぞ、俺
「一体全体、どう言う事ですかっ!?」
「灰って何なんやっ!?」
「何かすごいね!!　ぶわあああああ！　ってなってるね!!」
「どういうこと？　ねぇ？　琥太郎？　どういうことなの？」
「文字化けしているところが在るようだがどう言うことだ!?」
——案の定、質問攻めに遭うのだった。普段はあまり感情を声に出さない麗奈と雅也もこの時ばかりは、興奮気味のようだった。
「どうどう。一旦落ち着け、な？　ちゃんと全部説明するから」
——そう言って琥太郎はこれまでの経緯を説明した。

◇◇◇◇◇

「斯々然々（かくかくしかじか）……って言う訳なんだよ」
「へー、そうだったんだね！」
「そうだったんだよ。マジで腕が千切れるかと思ったぜ」
——自分の腕を擦りながらブルブルと震える琥太郎。そんな琥太郎に麗奈が質問した。
「ん、それはわかった。で？」
「ほぇ？　「で？」とは何ぞや。それに今の話ってそんなに軽く流されちゃうのね……」
「結局、何で”銘”と能力が判らないの？」
「分からん」
「……」（じーっ）
「そんな目で見るな！　仕方ねぇじゃん！　判からんもんは、判らん！」
「結局、何も分かってないんですね」
「うっ……」
「まぁ、それは今考えても仕方のないことです。それより、私達は自分

達の”異彩”を打ち明け合いました。なんだか、より友情が深まった気がしませんか？」
——さらっと琥太郎の話題を流し、話題を変える澪。これはこれで、彼女なりの気遣いなのかも知れない。
「そうやね。なんちゅうか、一体感が生まれた気がするんよ」
「皐月も！」
「あぁ、そうだな。確かに以前より絆が深まったように思うぞ」
「ん」
「なぁ、一つ気になってることがあるんだけど、聞いてもいいか？」
——今度は琥太郎が皆に質問をした。
「何で俺らは、会ってからそこまで多くの時間を共にしたわけでもないのに、ここまで打ち解けてるんだ？　時間が全てじゃないのは分かってるけど、それにしたって少し変だと思わないか？」
——琥太郎の質問、と言うより疑問を聞いた澪は少し考える素振りを見せる。
「……そうですね、確かに私達は他の方々と比べて打ち解けるのが早かったように思います。ですが、こう考えることは出来ませんか？
——”そう言う運命だった”と言う風に」
「運命？」
——鸚鵡（オウム）返しのように聞き返した琥太郎に、悪戯な笑みを浮かべながら、
「そうです、運命です。”私達はあの時会うべくして会い、友と成るために集ったのだと”——だって、その方がロマンチックで良いじゃないですか」
——そう言った澪に、釣られて琥太郎も笑みを零す。
「ははっ、確かにそうだな。”運命”か。良いな、ソレ。実にロマンチックで、俺らにぴったりだな」
「そうだな。友との友情に意味など不要」
「せやね。わいらには充分な理由やな」
「なんだかカッコいいね!!」
「ん、カッコいい」

――”運命”、正しく彼等の為にある言葉だ。堅苦しい理論や、無理矢理な理由でもない。たった一言、ソレだけで彼等が集う理由足りえる。

◇◇◇◇◇

――開花の儀より、一ヶ月。そろそろクラス内に特定の友人や、共通の趣味を持った仲間同士のグループが出来上がり、ある程度の人間関係が固まりつつあるこの時期。

「――はあぁぁぁ……」

――此処に一人、盛大に溜め息を吐く男子生徒の姿がある。言わずもがな、琥太郎である。

何故彼が溜め息を吐いているのかと言うと、

自業自得が四割、

嫉妬三割、

恨み三割の割合によるとある原因で、未だ彼には麗奈達以外の友達が居ないのである。

彼とて本来、コミュ力はそこそこある方だ。

しかし、開花の儀の時に青山の申し出を断った事により、クラスの印象が悪くなり、青山の取り巻きの女子達から恨みを買われ、美少女である麗奈、美人な澪、美幼女？　な皐月とクラス内での人気が只今鰻（うなぎ）登り中の彼女達と入学前より友達関係にあり、親しげに話している事へ嫉妬され、何かと避けられているのだ。だったら雅也や、宗も嫉妬されるんじゃないか？　と思った諸君、甘い。考えてみてくれ、宗、雅也共にイケメンだ。性格も良いし、運動も出来る。加えて、入学試験に難なく合格する頭の良さを兼ね備えている。客観的に見て完璧なのである。そんな彼らが美少女達と仲良さげに話している場面を想像してほしい。加えてそこに、顔は不通、勉強も不通、運動は

出来るが、クラスでの心象が悪い琥太郎を加えてみた場合も想像してくれ。
前者は何とも絵になる場面だろう。少なくとも誰からも文句がでない程度には。後者は、何でアイツがいるんだよ！　何で俺らじゃないんだよ！と思われるだろう。つまりはそう言うことだ、不釣り合いだと思われてるのだ、琥太郎は。
以上の理由から、琥太郎には未だクラスに友人と呼べる者などいるわけもなかった。
「はあぁぁぁ・・・」
「どうしたん？　〟溜め息を吐くと幸せが逃げる〟っちゅうで」
――人懐っこい笑みを浮かべながら、宗が話しかける。
「現在進行形で不幸だから、これ以上不幸になるのは勘弁だな」
――こちらは乾いた笑みを浮かべて返す琥太郎。
「そんな事言ったらアカンで、〟病は気から〟っちゅうやろ？」
「それ、使い方地味に間違えてるぞ」
「同じようなもんやろ。それより何で溜め息なんて吐いとったん？」
「ん？あぁ、お前とは縁の無い悩みだよ。ははっ……」
――自嘲的に笑いながら自虐する琥太郎に宗は質問する。
「そないなこと言わんといて教えてぇや～。なぁ？」
「簡単なことだよ……」
――そう言うと、琥太郎は宗を真正面に見据え、真剣な表情で、
「友達が出来ないのでマジ何とかしてくださいッ!!」
「――はい？」
――とんでもなくアホ（本人は大真面目）な事をのたうち回った。
思わず聞き返す宗に琥太郎は再度頼み込む。
「友達紹介してくださいッ!!」
「うぇえぇ!?　頭可笑しくなったんか!?　なぁ!?　何食った!?　吐き出せ！　今すぐ吐き出すんや!!　それから病院や！　今すぐ頭見てもらわんといけん!!」
「なんも喰っとらんわぁ!!　そんなに可笑しいか？　あぁ？」
「当たり前やろ!!　明日は核弾頭の豪雨が降るわッ!!」

「そこまで!?」
——宗の余りの反応に、今度は琥太郎が驚く事となった。どんな茶番だ、アホかコイツら。
「友達なんて気付けば出来とるやろ?」
「よぉし上等だ。ちょいと面貸せや、表出ろ。」
「じょ、冗談やて……そもそも何で友達ができひんのや?琥太郎は結構社交性あるやろ?」
「何でそう思ったんだ?」
「ん? そりゃ、入学試験の時の会話とか、今までの琥太郎を見てたら分かるで?わいはこう見えても人間観察が趣味なんやで?」
「どう見えても人間観察が趣味だろうが。それで人間観察が趣味じゃなかったら気色悪い。引くわ、ドン引きもんだよ」
「何か言葉の端々に刺を感じるんやけど・・・」
「気のせいだ」
「そうか? ってそんな事より、何で友達ができひんのや?」
「それは……」
——斯々然々(かくかくしかじか)。琥太郎は宗にこれまでの言動から推察したことを語った。
「——という訳なんだよ。どう思う?」
「無理だな」
「おいっ」
「いや、難しいで。そりゃ出来んわ。好感度マイナスからスタートとか無理ゲーやて」
「デスヨネー」
その好感度を下げてる間接的な原因お前だけどな。
「人の印象って一度決まると最低９０分は変わらんらしいで? けど、もう一月たっとるのに一向に印象に変化なし。どうしたんや?」
「それがさ、避けられてるんだよ……」
話し掛けようとするとさりげなく距離を置かれるのって、結構心に来るものがあるんだよ?
「あー、そもそも会話する事が無いから印象の変えようがないのか

……詰んどるな。ご愁傷様」
ゲームオーバーからスタートってどんなマゾゲーだよ……。
「じゃあどうすればいいんだよ……」
「行動」
「え？」
「行動で示すしかあらへん」
「具体的には？」
「分からん」
「駄目じゃねぇか」
「ま、でも当ては有るで」
「もうすぐ”ランク戦”があるやろ？」
「あぁ、そうだな。それがどうかしたのか？」
――琥太郎は宗の意図が読めず、聞き返す。
あ、次いでだから”ランク戦”について説明してやろう。ありがたく思え！
ランク戦の事を説明する前に、補足として序列制度（ランカーシステム）について説明しよう。
序列制度（ランカーシステム）とは、学園内での校内序列を決める制度のこと。全校共通で決められており、上から順に、
S、A、B、C、D、E、に別れており、
D・Eは下級、
B・Cが中級、
S・Aが上級、
となっている。ランク戦とは毎月一回、全校共通で模擬戦を行い、ランクを決める大会の事である。何故共通かと言うと入ったばかりの新人をしごく事が一つ。もう一つは訓練を積んだ相手とも戦える逸材を発掘するためである。
そして、ランクについてもう少し説明しとこう。ランクは高ければ高いほど、校内で受けられる特典が豪華になる。
学食割引から、果ては現役団員と同等の権限を持てる、なんてものもある。だからこそランク戦は過酷だ。弱肉強食の世界だ。弱きは

強きに喰われる。それが校内序列制度（ランカーシステム）だ。
　以上。御静聴、有難う御座いました！　あ、そう言えば皆気になってるかもしれないけど、私は一体何者か？　と言うことに！フッフッフッ。それは……秘密です。
「あぁ、それがどうかしたのか？」
「簡単や。ランク戦で実力を示せばええんよ！」
「それが何で友達作りに繋がるんだ？」
「ランク戦でカッコいい所を見せれば女子からの羨望の眼差しを向けられること間違いなし！女子はネットワークが広いから、直ぐに噂が広間って友達が出来るっ!!」
「おおぉ……！」
　――琥太郎は思わず感嘆の声を上げる。
「よし！ナイスアイデアだ宗！これなら友達が出来るっ！」
「おう！その勢いや！」
「よっしゃぁぁ！やったろうじゃねぇか！」
　目指せ！友達麗奈達以外で一人っ！
　……そう、高望みはしないのだ。
　――こうして琥太郎はランク戦に向けて特訓を開始した。

第十七話〜ランク戦〜

——遂に、ランク戦当日となった。

あれから琥太郎は、色彩魔術の修練に加えて、体力の向上を目的とした一日50キロランニングなど、トレーニングに力を注いできた。全ては友達を作るために。

「遂に当日か……」

「せやね。わいは準備万端やで。琥太郎はどうなん？」

「やれるだけやったつもりだ」

「それで？　結局”異彩”の能力は分かったんか？」

「能力どころか、”銘（な）”すらわかんねぇよ」

実はもう【治療院】での検査を終えているのだが……正直思い出したくない。

「大丈夫なんか、それ？」

「——大丈夫ですよ」

——琥太郎達が話していると、話しかけて来たのは澪だった。

「おはようさん」

「おはよう、澪」

「ええ、おはようございます」

「それで？　大丈夫ってどういうことなん？」

「教官も仰っていましたが、琥太郎には色彩魔術（カラーマジック）の才能があるそうです。それに加えて、最近はずっと特訓をしていたんですから、かなり実力は上がっていると思います」

「それもそうやな。にしても、あまり誉めない教官が誉めるなんて、琥太郎は相当才能があるんちゃう？」

「そう言ってもらえると気が楽になる。有難う」

世辞でも嬉しいもんだな。

「事実を言ったまでです」

エスパーなのか、お前は。

「ははっ……そうか。でも、もし相手になったら——本気で倒しに行くぞ」

――これまでのとは違う真剣な表情で話す琥太郎に二人も真剣な表情で返す。
「ええ、勿論。私も全力でお相手させていただきます」
「わいも、本気で相手にするで」
――どこか晴れ晴れとした雰囲気をぶち壊したのは、麗奈だった。
「琥太郎っ」
「うおっ!?」
――突然腕に抱きつかれた琥太郎は驚きながらも、慣れたのかバランスを崩す事も無く、麗奈と会話をする。
「はぁ、いきなり抱きつくなって。おはよう、麗奈」
「ん、おはよう琥太郎」
――互いに挨拶を交わし微笑み合う姿は、端から見れば完全に男女のソレだ。これで付き合っていないのだからなんとももどかしい気持ちを他のメンバーは抱いていることだろう。そもそも、何故麗奈がここまで琥太郎に打ち解けているのかが謎である。琥太郎自身、入学試験で初めて会ったと言ってっていたが、どう見てもたった一月程度の時間しか過ごしていないようには見えない。
「これで付き合っていないというのが不思議ですよね……」
「ホンマやなぁ……どう見てもカップルやろ」
「ん？　何か言ったか？」
「いや、なにも」
「そうか？　……あ、そう言えば皐月と雅也は？」
「お二人なら、先に演習場へ行っているそうです。琥太郎、メールちゃんと見てますか？」
「あ、忘れてた。……ホントだ、メール来てた」
「まだ少し時間がありますけど行きましょうか。二人も待っているはずですし」
「そうだな」
――こうして琥太郎達は学園内の転移門を使い、第一演習場へ向かった。

◇◇◇◇◇

「みんなー！」

――皐月が演習場前の門で手を振りながらピョンピョン跳び跳ねている。その隣では雅也が、やれやれといった感じで眉間に手を当てている。

「相変わらず皐月に振り回されてるんだな……」

「皐月はきょうも元気ですね」

「雅也……ドンマイ」

「変わらんなぁ、二人は」

――それぞれが感想を述べるが一様にして表情は穏やかだ。とてもこれから闘うかもしれないもの同士には見えない。

――あ、忘れてた。ランク戦って自由参加だから。ただ、上級ランカーの特典が美味しいから参加しないメリットが無いだけで。あ、それに、具体的なランクの上げ方の説明ってしてなかったっけ。

ま、いっか。えっと、学園生徒全員が”ランクポイント”って言うのを持っていて、最初は１０００ポイント。そして、戦闘で勝った相手から相手の持っているポイントの１０／１を奪える。ポイントが一定数以上貯まると晴れてランクが上がるわけ。

ポイントはランク戦以外でも、学園から出されている”学生専用任務”をクリアする、及び学園内の生徒に”決闘”で勝つことでもポイントを入手することが出来るよ。まぁ、決闘は双方の合意がないと出来ないんだけど。”学生専用任務”は任務毎に貰えるポイントが決まっていて、”決闘”はランク戦同様勝った相手のポイントの１０／１を奪える。又、ポイントを各ランクの一定水準まで落とすと降級になるので注意されたし。あ、それからランク毎の昇格ポイントのラインは後でランク戦の説明の時に一緒に説明されると思うからパスで。……決して、決して説明が面倒臭くなったとかじゃないからね？本当だよ？

「おはよう！　みんな！」
「おはようさん。朝から元気やなぁ、皐月は」
「えっへん！」
「おはよう、雅也」
「あぁ、おはよう」
「二人ともおはようございます。雅也は皐月と違って落ち着いてますね？」
「皐月が元気すぎるだけなんだが……」
「それもそうですね」
――そんな事を言っている間にも、皐月は既に歩き出している。
「みんな！　早く行こっ！」
――そんな皐月を見て、ある意味何処に居ても変わらない態度で居られる皐月を見直しながら、他の面々も演習場へ入っていくのだった。

◇◇◇◇◇

――１０：００。演習場にアナウンスが流れる。
『さぁ、皆さんお待ちかね、月に一度の”ランク戦”が始まろうとしていますッ!!　実況は放送部部長の私、高橋（たかはし）　繚狐（りょうこ）が行います！そして！』
――と、セミロングの一部をカチューシャの様に編み込んだ女子生徒が高らかに宣言する。
『解説は学園ＯＢで現役団員の僕、峯麓（ほうろく）　南（みなみ）でお送りするっスよ～』
――こちらは、マイペースな雰囲気を漂わせるサイドテールの女性だった。そして大きい。何がとは言わないが。
『『お願いします！（するっス～）』』
『南さん、今月からは新しく新入生がランク戦に参加しますが、何かアドバイスはありますか!?』

『テンションすごいっスね……。それに、先にルール説明とかをした方がいいんじゃないっスか？』
『そうですか？　ならば説明して新是（しんぜ）よう！ルールは一対一の個人戦。相手が気絶、及び降参、又は戦闘継続不能と判断された場合に負けとなります。尚、降参、気絶、戦闘不能の判断は皆さんの身に付けている腕時計生徒手帳のバイタルとランク戦中に学園内を飛び回っているドローンの映像で此方が判断します。怪我をした場合は治療院で治療いたしますので安心してくださいね！　あっ！　それから皆さん！　殺しちゃダメですよ！　半殺し程度にしてくださいね！』
『何さらっと物騒なことといってるんスか!?』
『いやぁ～これが毎年少数ですが、死人が出てるんですよね～。だから団長からも口を酸っぱくしていわれてるんですよ～。くれぐれも死者を出さないように!!　って』
『それってここで言って大丈夫なんスか？』
『別に大丈夫じゃないですか？　禁句な訳でもないですし。あと、殺しちゃった場合は即失格。ポイントは全て剥奪の上で罰則があるのでくれぐれもご注意下さい!!』
『他に何かルールはあるっスか？』
『ありますよ！　ランクの昇格ラインを説明してませんからね！』
『忘れてたっス』
『あれぇ？　ひょっとして南さんってば、胸にばっか栄養が吸われて頭が――痛たたたッ!?!?!?』
――何かを言いながら峯麓さんの胸に手を伸ばしていた高橋さんは、それは見事なアイアンクローを掛けられていた。
『僕の胸がなんスか？』
『痛多々たッ!?　何でもないです!!　冗談です!!　最高です!!　だからアイアンクローは止めて!?　壊れちゃうからっ!?』
『次はないっスよ？』
『はい・・・』
実況のアナウンス緩っ！　ぐたくだじゃねえか！　それに二人ともキャラが濃いっ!!　僕っ子って!!　学園にはこんな人ばっか居ん

のか？
『さぁ！　気を取り直してどんどんいきましょう!!』
『反省してるっスか？』
『してますって！　それよりもランク昇格ラインの説明をしないとでしょう？』
『そうだったっス……』
『しっかりしてくださいよ？』
『申し訳ないっス……』
　おい、なんか立場逆転してるぞ……なんだこのアナウンス。
『あれ？　私が謝る必要って……？』
『では説明に入ります!!　昇格するには――』
『あれ？　スルーっスか？』
『――ランク毎に一定数ポイントをためる必要があるのですが、そのポイントが――』
『だからスルーっスか？』
『――ってあとにしてください。今は説明が先です！』
『そ、そうっスか……すいませんっス』
　――またもや流される峯麓さん。どうやら推しに弱いらしい。
『では続けますが、
　Ｅランクから昇格するには２００００ポイント、
　Ｄランクから昇格するには４００００ポイント、
　Ｃランクから昇格するには８００００ポイント、
　Ｂランクから昇格するには１６００００ポイント、
　Ａランクから昇格するには５０００００ポイント、
　を貯める必要があります!!』
『相変わらずＡからの昇格は厳しいっスよね～』
『そうですね！　まず普通に目指して届く事はありません!!　Ｓランクの特典は現役団員と同等の権限、つまり通常任務を受けることが出来る、ということですからね！』
『これってかなり豪華な特典っスからね～』
『いやぁ、南さんが言うと軽く聞こえますね！』

『こういう性分なもんスからね～』
『なんだか、和みますね～！　……っと、時間が差し迫ってきたので最後に！　制限時間は本日午前１１：００から日付の変わる、明日の午前０時までの１３時間!!　なお、途中で切り上げることが出来るので、その場合は皆さんが持っている腕時計にリタイア表示があるので、そのバナーをタップしてください!!』
『この腕時計って確か、完全防塵、防水、電波式で、生徒のバイタルなんかも確認できるっスよね？それに、決闘の申請、受諾もできるとか』
『そうなんです！　おまけにＧＰＳ機能もついていて、行方不明になっても創作可能！　加えて生徒手帳の役割もこなす優れものです！』
『便利っスよね～。本部にも欲しいっスよ』
『それなら団長が近々本部にも導入されるとか』
『……なんで知ってるんスか？』
『聞きたいですか？』
――妖艶な笑みを浮かべる高橋さんに、
『え、遠慮しとくっス……』
――引き吊った笑みを浮かべながら断る峯麓さん。……何故だろうか、高橋さんの闇を垣間見る事となった。
『あ、因みに学園内全体がバトルフィールドとなっておりますが、第一演習場と建物内での戦闘は禁止となっていますのであしからず!!』
相変わらず切り替えが早いなこの人。
『僕達はここから学園敷地内全体をモニターしながら、実況してるっスよ～』
『以上でルール説明を終わります！』
『『御静聴有難う御座いました！（っス～）』』

◇◇◇◇◇

――アナウンスが終わったあと、琥太郎達は集まって話をしていた。
「さてと、取り敢えずこれからは別行動になるだろうな」
「せやな」
「あぁ、いきなりお前たちと当たるのは勘弁願いたいものだ」
「そうですね……でしたら、それぞれ開始時の居場所をバラバラに決めると言うのはどうですか？」
「んー？　どういうこと？」
「つまり、それぞれ離れた場所からスタートするんです。それなら開始して直ぐに当たることもないでしょう？」
「おー！　いいね！　ソレで行こう！」
「俺もソレでいいと思うぞ」
「あぁ、俺もだ」
「せやね。わいもソレでええよ」
「ん、ソレでいい」
「それでは、そう言うことで行きましょう」
――こうして、話し合いは終了した。

◇◇◇◇◇

「これからどうすっかな……」
――他のメンバーとの話し合いを終えた琥太郎は他に話すような友達がいないため、ぶっちゃけ暇だった。ランク戦開始まで何をしていようか考えていると、
『――あー、あー、聞こえてますかー？』
――突然、先程の実況担当、高橋さんがアナウンスを開始した。
『あ、聞こえてるっぽいですね。いやぁ、失敬失敬。大事なことを忘れてたました！　使える武器は学園貸し出しの、色彩転換武装（CCA）を使ってくださいね！　勿論、幻想形態（イルシオンモード）で、ですよ！ただし、異彩の系統が武具の方はそれを使っても結構ですからね！』
ほいほい、皆様お待ちかねの補足ターイム。

色彩転換武装（CCA）とは、色彩魔術と現代の科学技術の融合の末に完成した、特殊武装の総称。

使い手の色素を原動力とし、弾丸や刃、バリアなどとして展開することを可能とした画期的な武具のことである。また、その種類は千差万別、実に様々な種類がある。加えて、色彩転換武装（CCA）のメリットとして、肉体を傷つける具現化形態（インバディングモード）と、体力のみを削る幻想形態（イルシオンモード）の二つを使い分けることが出来る。因みに、色素の消費量は幻想形態（イルシオンモード）の方が少ない。

今は武器やバリアなどに限られるが、いずれは使い手の肉体を色素で代用することにより、擬似的なアバターを作り出すことも可能とされている。

しかし、デメリットもある。それは動力等の全てを使い手本人が賄うことにある。このデメリットは、今研究中のアバター計画において、最も重要な問題とされている。武器程度なら賄えるが、人間一人分の体積を全て色素のみで構成すると云うことは、理論上可能でも、実際に行える者がいないのだ。以上の理由から、アバターの完成には至っていない。

『それから、服装は制服でお願いします！　制服には状態保存と、衝撃軽減、それから自己修繕の色彩魔術が付与されているので、ぶっちゃけ自前よりお得ですよ!!　特に、工房関係の人とか、ランクの高い人は分子破壊（アンチマテリアル）や、精神破壊（アンチアストラル）の能力の付与された武器や色彩魔術は使用厳禁ですからね！　以上です！　いやぁ、危ない危ない、あと少しで新入生が全滅するところだった！　これで残るは実況のみ！　安心だね！　安心！』

――そう言い残して、高橋さんはアナウンスを切った。

「……おい、マジで危なかったじゃねぇか!?安心できねぇよ！不安が増したわ！アホか！」

なんだよ分子破壊（アンチマテリアル）って!?　なんだよ精神破壊（アンチアストラル）って!?　明らかヤバイやつじゃん、初見でこれ使われたら確実アウトじゃねぇか!!　てか、そんなもん此処にあんのかよ!?

――口に出したいことは山ほどあるが、なんとか心に押し止める琥

太郎。何故なら、いきなり大声を上げた琥太郎は回りからの目線に耐えられなかったのだ。
「はぁ、やめだやめ、考えてたって仕方ない。諦めよう。人間、諦めが肝心なんだ」
——ここにも周囲に流される人間がいた。

◇◇◇◇◇

——ランク戦開始まで、あと5分。周りの空気は張り詰め、ピリピリと肌を刺激する。そんな中、琥太郎は最終調整に入っていた。今の琥太郎の服装は制服に、学園支給の刀型色彩転換武装(CCCA)二本を腰に差し、手にはバイクグローブの様なものを着けている。現段階で、琥太郎が選べる最良の選択だった。
「はぁぁぁぁ……!」
——来る戦闘に備え、精神集中を行う。これは、琥太郎の修めている不知火流の教えで、心は熱く、頭は冷静に、という戦闘時の基本的な心構えである。
『みなさーん! 準備は良いですかぁ?カウントダウンいきまーす!!
10……9……8……7……』
「いよいよか……どこまで俺は通じるんだ?」
——思わず口角が上がる琥太郎。存外にバトルジャンキーなのかもしれない。
『……4……3……2……1……開始ッ!!』
——開始の合図と共に琥太郎は学生同士が互いに蹴落とし合う、戦場(ランク戦)へ身を投じた。

◇◇◇◇◇

――開始５分、早速相手を見つけた。制服の色を見る限り、どうやら同じ一年生のようだ。
「お、早速発見。ついてんな」
――そんな琥太郎の声が聞こえたのか、その一年は突然、手にもったハルバードで攻撃を仕掛けて来た。
「うおっ!?危ねっ!?」
「くっ……!」
――言葉とは裏腹に、難なく体重を生かした降り下ろしを回避する。
「いきなりって酷くね？」
「ぐぁ……」
――身体を左に反らして攻撃を避ける片手間に、相手の首を刀型ＣＣＡで跳ねる。

にしても、便利だよなぁ……体力だけを削るって。
「……なんか、拍子抜けだなぁ。もっとてこずると思ったんだけどな」
「隙ありッ!!」
「なーんてねっ！」
「うぐっ……」
――気絶した振りを見せて奇襲を仕掛けた一年を振り替える事すらせず、裏拳を顔面に叩き込む琥太郎。
「呼吸音でバレバレだっつぅの。……って聞いてねぇか」
――今度こそ気絶した一年を踏みつけながら移動する琥太郎。何気に先程の奇襲を根に持っているようだ。そもそも、心臓の呼吸音を聞き分ける琥太郎が異常なのだ。彼が弱いわけではない。
「早速１００ポイントゲット～♪さてさて、次なる獲物を探しますかな？」
「その必要はないッ!!」
「そいっ」

「ひでぶっ……」

「声を掛けながら不意討ちをするのって流行ってんのか？」

――サクッと二人目の上段から放たれる斬撃を色素で強化した左手でつかみ取り、右手にもった刀型ＣＣＡで首を跳ねながら、そんな事を考える。

「おっ、この人二年だったのか。センパイ、あざーっす」

――この人はどうやらＤランクのようで、６０００ポイントが手に入った。

「てか、Ｄランクなら色彩魔術で遠くから狙えばよくね？アホなのかな……？」

――そう言いながら、琥太郎は対戦相手を探し求め、移動を開始した。

◇◇◇◇◇

「ふぅ……やはり一年の方はまだ色彩魔術に慣れていないようですね。『水虎（すいこ）』ッ！」

青の上級魔術に分類される『水虎』は色素で生成した水を虎の用に使役し、敵への攻撃や移動手段として使う色彩魔術です。

本来異彩に目覚め、色素を操作可能になったばかりの一年生が使える代物ではないのですが、私の異彩【】の能力、『水神の加護』の補助により扱える、というのが現状。完全に『水虎』を支配下に置いた訳でもないため、単調な命令しか出せませんが、まだ戦闘に慣れていない一年生に使うには丁度良い練習になるのです。

「きゃっ!?」

相手の女子生徒が『水虎』の突進を右へ回避します。

今、私が『水虎』出した命令は、

「相手に突進し、折り返して、もう一度突進」

というもの。

「かはっ……!」

彼女が回避したところに私は蹴りを加え、反対方向へ押し出します。

そして、彼女が飛んで行った先には丁度、『水虎』が二度目の突進を行っています。

「きやぁぁぁぁぁ!!」

彼女は『水虎』の突進をまともに喰らい、そのまま吹き飛び、気絶しました。

「ふぅ、終わりました」

私は蹴りを決めた体勢のまま、勝利を収めたことを安堵します。

ですが、『水虎』をまだ上手く使いこなせていません。これは要、精進ですね。

この時、一瞬の間だけ突風が吹き荒れました。
今の私は蹴り決めた体勢のままです。とても無防備なのです。
無防備な私のスカートは、突風に煽られ大きくめくれ上がりました。

「きゃっ!?／／／」

私は先ほどの戦闘以上の集中力と、速度を持ってしてスカートを押さえます。

「もう！なんだってこのタイミングで突風なんて……はっ！誰かに見られたりしてませんよね？」

そう思い辺りを見回すも、周りに人っ子一人居ません。
よかった。誰かに見られてはいなさそうです。

「ホッ……それにしても、やはりとてつもない広さですね……全校生徒が動き回っているのにいまだに一人としか対戦出来ていませんし」

そう、辺りには全く人の影が見当たらないのです。スカートの時は良かったものの、こう人が居なければ戦う事が出来ません。

「これ以上ここにいても仕方がないですね。移動しましょうか」

◇◇◇◇◇

ー雅也ｓｉｄｅー

「ふむ……一対三か、それも二年生が」
「悪く思うなよ、お前の行動を鑑みた結果さ」

そう言いながら、ジリジリと間を詰める三人組。
恥ずかしくないのだろうか？　下卑た笑みを浮かべるコイツらはさっきから近くの茂みに隠れていた連中だ。俺が戦闘で体力を消費するのを見計らって出てくるあたり、相当良い性格をしているようだ。
「悪くなど思うはずがないだろう。むしろ此方が感謝したいくらいだ」
俺は、特に危機感を持っていないかのように振る舞いながら、何時でも戦闘に入れる準備を整えていた。
「へぇ……軽口を叩く余裕はあるんだ？この人数相手に？」
「当たり前だろう。……餌が増えた一のだから」

そう言い終わる頃には、俺は相手の一人の懐へ踏み込み、ゲイ・ボルグで相手の鳩尾を貫いていた。

「――は？」

いきなり俺が消えたように見えたのだろう。まぁ、その時点でコイツらの程度は見え透いているが。
そう考えている間にも、二人目へ踏み込み、顎を石突きで砕き上げる。
「――うっ……」
「これで、ラスト」
――最後は、遠心力を効かせ、相手の振り向き様に頭を穂先で跳ね

た。

◇◇◇◇◇

ーとある女子生徒ｓｉｄｅー

「よろしくお願いします！」
「は、はぁ……此方こそ……」
「それじゃあいっくよー！」
「は？」
「やーっ！」

気付いたら目の前に居た。
律儀に挨拶をしてきたこの子は、その可愛らしい、庇護欲に駆られる小動物の様な見た目とは裏腹に、とんでもないスピードで迫っていた。
その小さな拳には、バイクグローブに鉄板を取り付けたようなガントレット型ＣＣＡが装備されている。
「殺られる」と、そう思った時にはもう遅かった。
その小さな拳から放たれた一撃は余りにも重く、鋭かった。

「あがぁぉっ!!」

そして、おおよそ淑女が出すはずのない声を出しながら、私は壁にめり込んだ。

ー皐月ｓｉｄｅー

「あ！ごめんなさい！やり過ぎちゃた！」（パアァ）

うーん。力加減が難しいよぉ……。この装備は少し軽すぎるのかな？でも頑張らないと！　皆に褒めてほしいからね！

よぉ～し！頑張るぞ～！

「次はだぁーれ？」（ニッコリ）

「「ひいいいいいぃ!!??!!」」

あれ？何でみんな後ろに下がってるの？

◇◇◇◇◇

ー麗奈ｓｉｄｅー

「喰らえぇぇぇぇ!!」

片手用直剣型のＣＣＡを乱雑に振り回す女子生徒。彼女はどうやらご立腹の様だ。

「お前のっ！　ことはっ！　前からなぁっ！　気に入らなかったんだよっ!!」

罵倒の言葉と共に繰り出される攻撃を、流れるような動きで回避しながら私は考える。この人、誰だっけ？

「いつもっ！　青山君にっ！　ちやほやされてっ！　ムカつくんだよぉ!!」

青山？　……誰？　そんな人居たっけ？

「……」

「無視するなぁ!!」

渾身の気勢と共に放たれた袈裟斬りを、顎に手をあて、眉間にシワを寄せながら危なげもなく避ける。

さっきから単調な攻撃しかして来ないけど、何かの罠なのだろうか？

「避けるなぁ!!」

だって避けなきゃ痛いじゃん。何を言ってるんだろう？

あれ？　そもそも何でこの人の話を聞いてるんだろう？　とっとと倒せば良かった。

「ていっ」

「きゅうぅぅ……」（ばたり）

小太刀型のＣＣＡを首に突き立てる。
ふぅー、うるさかった。
そういえば琥太郎はどうしてるだろうか？順調に進んでるだろうか。そうだと良いな。

「ん、すっきり」（ドヤァ）

琥太郎に会いたいなぁ……やっと会えた。今度は伝え忘れないようにしよう。

◇◇◇◇◇

ー宗ｓｉｄｅー

「お前、顔がいいからって調子にのってるらしいな？」
わいに話しかけて来たのは、大柄な正しく”番長”とでも言われそうな、厳つい顔の二年生やった。
「わいですか？」
「お前以外誰がいるッ!!」
「起こらんといて下さいよ、センパイ？」
なんか、めんどくさそーな人やね？　わいはこういうタイプの人嫌いやわ。
「うるさいッ!!貴様のような生徒は俺が矯正してやるッ!!」
「いや、話を聞きなはれやぁ・・・」

こういうタイプの人って何で話を聞かへんのやろ？

「うおおお!!」

そう言うや否や、メリケン型のＣＣＡを着けた右腕を振りかぶり、突進して来よった番長。

せっかちな人やなぁ……絶対に関わり合いになりたくないなぁ。

番長の拳を避けながら、わいは考える。「今日の晩御飯何にしよう？」と。

馬鹿らしいと思うかもしれへんが、コレが以外と重要だったりするんよ。気分はパエリアでも、家にある食材は肉じゃがみたいな時ってあるやろ？――っていうか……。

「危ないで？暴力反対やで、センパイ」（ひょいっ）

「ぬぅっ……!?」

人が晩飯の意義について話してるときに攻撃しんといてや。めんどくさいやろ？捌くの。

あ、とういうか、先にこっちを何とかすればエエ　んやないか？

「すんまへんね、センパイ」

「ぐうっ……!?」

攻撃を捌かれ、体制を崩した番長を縦に真っ二つに叩き斬ると、番長は、巨木が倒れるような音を立て、倒れた。

「まったく、人の話は聞くもんやで？」

まぁ、そう言うわいもあんたの話聞いとらんかったけど。
あ、この人Ｃランクやったんや。ラッキーやね。

――残り、１２時間。

～現在のランクポイント～
琥太郎：７１００Ｐ
麗奈：１１００Ｐ
宗：Ｐ９０００
澪：１１００Ｐ
皐月：１２００Ｐ
雅也：７３００Ｐ

第十八話～イケメンとロリコンと～

――琥太郎は、ホログラムに表示された中継映像の座標を頼りに移動をしていた。

「ここらへんだよな……？」

――そう言って辺りを見渡す琥太郎。しかし、人影は見つからない。

うーん。しっかし広すぎやしませんか、この学園。

ランク戦って銘打ってはいるが、これじゃあまともな戦闘なんてそもそも出来ないんじゃないか？

それに、上級生と当たった場合、余程その上級生が弱いか、自分が強くなければ唯の餌にしかならないんじゃ……。

――そんなことを考えている琥太郎に近寄る人影が。

「もしかして、君が御笠琥太郎君かな？」

ッ!?　後ろを取られた。一体誰が……？　声からして男だろう。

――琥太郎は突然背後から声を掛けられ、咄嗟に振り替える。

「――ッ!!」

――瞬間、目が潰れると、本能が錯覚した。

そこには、絹で紡がれたかのような、豪奢な金髪を爽やかにそよがせ、絵画の中から飛び出したかと思う程造形の整った顔に、白い歯をキラリと輝かせ微笑む、背の高い貴公子が居た。

「どうかしたのかな？」（ピカアアア……）

「……!?」（ギャアアアア!?）

目、目がぁぁ！　……何だこのイケメンは!?

イケメン過ぎて後光が……光輪が見える……!!

……ハッ！　そうだ、返事をしないと。

「ど、どうも……確かに俺が御笠　琥太郎ですけど……？」（ピカアアア……！）

「良かったぁ、人違いじゃなくて」

――そう言ってキラリと白い歯を輝かせながらニカッと人懐っこそうな笑みを浮かべる。女子がこの笑顔を見たならば、狂喜乱舞することだろう。

「あのぉ……どちら様で？」
少なくとも俺にはこんなイケメンに話し掛けられる様な覚えは無いのだが……？
「あぁ、すまない。僕の名前は氷室（ひむろ）・Ｅ（エルフォード）・ルーク。ルークって呼んでくれると嬉しいかな？　よろしく、御笠琥太郎君」
「はい、よろしくお願いします。ルーク先輩。俺の事も琥太郎で良いです。それより、ルーク先輩はハーフなんですか？」
「ん？　あぁ、そうだよ。日本人の母に、イギリス人の父親がいるよ」
「それじゃあ、その髪は地毛って事ですか？」
「そうだけど？」
なるほど。だから違和感が無かったのか。……にしても、名前も格好いいなこの先輩。俺なんて名前負けしてそうなんだけど……。
――琥太郎がルークの髪の毛に興味を移している時。
「あれっ？　先輩？　僕が二年生ってこと琥太郎に言ったっけ？」
「言ってませんよ」
「じゃあなんで僕が先輩って分かったのかな？」
「えっ、普通にネクタイの色から先輩だなって思っただけなんですけど……」
「あっ……そう言うことかぁ！」（パアアア……！）
――花を咲かせたような顔で納得するルーク。
この人って、もしかして天然なのか？一体今までのその笑顔で何人の女性を堕としてきたんだ……？
ネクタイの件もあるが、何より無意識の内に光が……目がっ……。
――若干眩しそうにしながら、琥太郎は質問する。
「それで、結局俺に何のようなんですか？」
「あ、それはね、僕の所属してる【クラン】に、君を招待するためだよ」
「クランって言うと、クエストとかを受けるチーム的なものですか？」
「そんな感じかな。君の戦いぶりを見て僕は君を勧誘しようと思ってね」
「でも勧誘って、まだ”勧誘期間”じゃないですよね？」
「そうだよ。だけどね、今回のランク戦の上級生の主な目的は、自信の

所属している【クラン】に誘う一年生を視察する事なんだよ」
「そうなんですか？」
「うん。【クラン】の実績は成績にも影響するからね……なるべく優秀な人材を何処のクランも確保したいんだよ。勧誘期間って言っても無差別に勧誘して【クラン】の質が落ちてしまっては意味がないからね」
「そうだったんですね」
——ふむふむと頷く琥太郎。
「で、どうして俺の戦闘を見て勧誘しようと思ったんですか？」
そもそも、俺が戦った相手は殆どが一年生だったはずだ。それに二年生とも戦ったが、あれは見定める為では無さそうだった。
「ふふっ、「どうして？」って顔をしているね」
「そんな分かりやすい顔でした？」
「”へのへのもへじ”の様な顔をしていたよ」
「えぇ!?」
へのへのもへじっ!?……一体俺はどんな顔をしてたんだよ……。
「まぁ、そんなことより」
「”そんなこと”で済まされちゃうんですね……」
「僕や他の上級生からは、さっきの動きだけでも、君が十分強いって事が分かるんだよ」
「え？　スルーですか……？」
「だから、もしよかったら僕の所属しているクランに入らないかい？」
パァァァ……!
「……」
この人、話聞かねぇぇぇ!!
天然が極まってるよ!!　ここまで無意識に自我を押し通してくる人初めてだよ!!
——心の中で、激しいツッコミをする琥太郎。しかし心の中での事なので、外には伝わらない。
「そうか……簡単には入らない……そう言うことだね？」

「――え？」

「わかった!!　じゃあ今から、戦おう!!」

「――はい？」

突然何を言い出すんだこの人!?

てか、何処をどう”分かった”らいきなり戦う事になんだよ!?

「もし僕が勝ったら、君には僕達のクランに入ってもらうよ！」

「何か勝手に話が進んでるうぅぅぅ!?!?!?」

「もしも僕が負けたら……君の言うことを何でも聞くよ!!」

「滅茶苦茶要らねぇぇぇぇ!!」

せめて可愛い女の子にしろよ！”イケメンに何でもお願いできる権利”とか、男の俺に何のメリットもねぇよ!!

「じゃあ、行くよッ!!」

「えっ!?　ちょ、ま――」

――琥太郎の言葉は、激しい金属音に掻き消えた。

「――ッ!!」

「へぇ、中々やるね？　今ので決めたと思ったんだけどなぁ」

俺は、いつの間にか先輩の手に握られていた、両刃型ＣＣＡによる、右方向から迫る下段の切り上げを、何とか滑り込ませた刀型ＣＣＡで防いでいた。

「いきなり過ぎませんか、先……輩!!」

右腕に沿うような構えから、相手の押し込みを利用し身体を反転させ、今度は此方から斬り込む。

「じゃあ、琥太郎君は態々相手の準備が整うのを、黙って見てるのかい？」

俺の上段からの斬り込みを、返す刃で難なく防ぎながら、先輩は続ける。

「僕はいつも思うんだ……今の学園のやり方じゃあ、強い団員は育成出来ないって、ねッ!!」

先輩は、両刃の剣身を左へ傾け、俺の刀をいなすと、遠心力を使って、俺の首を跳ねようとする。

「ったく、容赦ねぇ…なぁ!!」

その斬撃を身体を仰け反らせて回避すると同時に、そのままの勢いで、後ろに下がり、先輩との距離を取る。

「……殺す気かっ!?」

「？　当たり前じゃんっ」（ニコッ）

うわぁお!!
こんなに笑顔で”殺す”って言われたの、ボク初めてっ♪

「――て、洒落になんねぇよ!!」

「ふふっ、その調子なら、まだまだ行けそうだねっ！」

――ルークが剣を構えながら言います。その姿に、一部の隙も無いことを、その身体から発せられる、声のトーンとはかけ離れた気迫が伝えます。

「……上等ですよ……こうなったら、とことんやってやりますよ」

「……ふふっ、くくく、はははは!!」

――突然笑い出すルーク。その顔は正に、喜色満面。

「全く、この学園には、戦闘狂（バトルジャンキー）が多いなぁ」

――そう呟く琥太郎も、隠しきれずに口角が上がっています。どちらも戦闘狂（バトルジャンキー）に違いありません。

「さぁ、そろそろ本気で行こうか」

「そうですね」

そう言うと、俺と先輩は揃えて声を上げる。

「「身体強化（フィジカルブースト）!!」」

◇◇◇◇◇

「――やー!!」

皐月様の小さく可愛らしい拳が、男子生徒の鳩尾にめり込む。

「ギャァァァァ!!」

そう叫びながら、男子生徒が飛んでいく。ハッ、気安く皐月様に近づくからだ、この愚か者めが。そして、何と尊いお姿なのだ。

今、我々はその光景を茂みから観察させていただいているのだ。

皐月様の尊い、そのお姿を。

「やはり、皐月様の笑顔は尊いな……」

「ふっ、当たり前だろう。あの笑顔はこの世の全ての笑顔の頂点に君臨している」

流石Ｎｏ．２。皐月様の事を分かっているな。

「いや、だがしかし、戦っているときの凛々しくも儚いお姿も尊いとは思わんかね？」

「確かにＮｏ．３よ、戦闘中のお姿も尊い。しかしな、やはり笑顔の時こそが最も尊いとおもうのだが？」

皐月様は、やはり笑顔こそが、最たる武器なのではないだろうか。

「いや、しかしＮｏ．１。迫り来る者共をその華奢な身体で凛々しく、気丈に戦うお姿にグッと来るものが無いのかね!?」

「――クッ！……いや、だが、しかし……」

確かに、戦うお姿も尊いのは分かっているのだ。グッと来るものがあるのは間違いない。だが……。

「全く、何を下らないことで争っているのだ」

「「どういうことだッ、Ｎｏ．２!!　貴様、それでも”皐月様にお菓子をあげ隊”の会員かッ!!」」
全く、何が下らないだ！　皐月様のお姿の何処が最も尊いかを議論しているのだぞッ！
それ即ちこの世の神秘を解明するに等しい行為であろうッ!!
「全く、何も分かっていないな。皐月様のどのお姿が最も尊いだと？
ふっ、そんなもの決める必要などない」
「なんだとッ！　貴様、皐月様を侮辱するのかッ!!」
「そうだッ!!　それでも男かッ!!」
こやつは人間か？　一遍原子レベルから生まれ直した方が良いんじゃないか？　今我々は、嘗て無い倍率を誇る、”皐月様拝謁権”に当選し、同胞達の思いを背負ってここに居るのだ。貴様、その思いを侮辱しようと言うのかッ!!
「そもそも、根底から間違っているのだ、貴様等はな。いいか？　皐月様のどのお姿が最も尊いのか、ではない。皐月様が最も尊いのだ」
「「――ハッ!!」」
その時、衝撃が全身を駆け巡った。そして、悟ったのだ。己の過ちを。
「Ｎｏ．２……確かに私達が間違っていたようだ。そうだ、何処が尊いのではない。皐月様だからこそ、尊いのだな……」
「あぁ……我々はいつの間にか、大切な事を見失っていてようだ」
全く、これでは他の会員に示しが付かないではないか。
会員Ｎｏ．１であることを誇りとする私が、なんたる体たらくなのだ。これはきっと気が緩んでいたに違いない。
「Ｎｏ．１、Ｎｏ．３よ。何を落ち込んでいる。我々にそのような暇はないはずだ。我々は皐月様の尊いお姿をこの一眼レフに納めなければならない。それに、我々は紳士だ。紳士たるもの、何時如何なる時でも、紳士でなければならない。我々は幼女を見守る紳士であろう？」
あぁ……そうだった。そうであったな。我々は紳士だ。紳士がいつまでも落ち込んでいてはいけない。それでは紳士を全うすること

が出来ない。皐月様のお姿をこの目に、一眼レフに納めなければならない。
「……すまない、少し弛んでいてようだ」
「……あぁ、紳士としてあるまじき行動だった」
「ふっ、分かれば良いのだ。……さぁ、紳士の責務を全うしようでないか」

「「Ｙｅｓロリータ!!　Ｎｏタッチ!!」」

第二十話～そのころ～

ー二週間前ー

「いいか、お前たち。まずは体内に流れる、色素の脈……”色脈”を感じとれッ！」

そう言って教官は腕を組み、ドヤ顔で仁王立ちをする。

「いや……いきなりやれって言われても……」

何の説明も無しにやってみろって、無理だからね？　普通無理だからね？

「あの、せめて何かヒントか、お手本を見せてもらえませんか？」

――澪の言葉に、クラスの全生徒がうんうんと頷いています。

「むぅ……それもそうだな……わかった。一度私がやってみるからよく見ておけ」

――そう言うと、教官は目を瞑り、肩の力を抜いていきます。すると、教官の色素が揺れたのを生徒達は感じ取ります。

「――ふぅ、こんな感じだ。さ、やってみろ」

「……いや、わからねぇよ!?」

――この時、クラスの心が一つになりました。

”やってみろ”って、目を瞑ってただけじゃん。どうしろってんだよ。もっとなんか無いのか？

「すんまへん。教官、何かコツみたいなのはあらへんのですか？」

お、ナイスだ宗。良くぞ言ってくれた。

そう、ヒントだ。ヒントが欲しい。目を瞑りました……はい、やってみて、じゃあ判らないんだよ。

「ん？　仕方ないな……いいか？　まずは、こう……グワァァ！ってやるだろ？　それから……バーン！　ってやるだろ？　そしたら、後はドドーンッ！　てやれば出来る」

「……」（ポカーン）
――思わず開いた口が塞がらない生徒達。ですが仕方ありません。私も分からなかったですし。
「参考にならねぇ……」
「余計に分からなくなりました……」
俺と澪が目頭を抑え、
「うぅーん……難しいよぉ……」
皐月が唸り、
「なぁ、雅也は今の説明分かったか？」
宗は口調が素に戻り、
「あぁ、分かったぞ。特に、グワァァ！　と、バーン！　が分かりやすかったな」
「ん、分かりやすい」
雅也と麗奈は……理解してるっ!?
「え!?　お前らあの説明分かったの？」
「ん？　あぁ、分かったぞ」
「ん、簡単」
二人が”え？　当たり前じゃん”みたいな顔をして、怪訝そうに言う。
「……えぇ……まじ？」
「あぁ、俺なりに要約するとだな。
”開花の儀”の時のように、自分中で、何かが動く感覚を掴み、その流れに追従する感じだな」
「ん、そうそう」
――雅也が説明し、麗奈が同調するように頷きます。
「いや、お前の説明の方が百倍分かりやすいわ」
「えぇ、とても分かりやすかったです」
「せやな。教官の説明は、説明とは言わないやろ」
「んんー？　皐月まだ分かんないよぉ？」
皐月はまだ判らないようだ。皐月ってどっちかって言うと、感覚タイプだから今の説明は逆に難しかったのかもしれない。

「皐月、〝開花の儀〟は覚えてますか？」
「うん、覚えてるよ？」
「その時の、感覚は覚えてますか？」
「うーん……あっ！　あのくすぐったい感じのこと？」
「多文そうです。その感覚をもう一回思い度してみて下さい。そしたら、その流れを追いかけてみてください」
「わかった！　……ん！　出来た！」
　早いな。皐月って以外と天才肌なのか？
「ありがとー！　なんかね？　ズズズー！　ってなってね？　ググってなって……びゅーん！　ってなった！」
「……さいですか……」
　やっぱ教官と同類じゃねぇか。なんだよ、〝ズズズ〟って。
「んー、〝開花の儀〟かぁ……あんま良い思い出ないんだよなぁ……」
　だって噛まれたりしたり、異彩の〝銘（な）〟が分かんなかったり、青山に絡まれたり……ホント良いことねぇな!!
「――あ、何か来た」
　――どうやら、琥太郎は色素を感じ取れたようです。
　なんか不思議な感覚だ、言葉にし難いな……。
　で、なんだっけ？　この流れを追いかけるんだっけ？
　うーん、流れを追いかけるって難しいな……なんか、無数に広がってる感じだし。
「……なんか、流れって言うよりは、身体中の血管を流れてる感じだな」
「そうなんですか？　私はそこまで細かくないですよ？」
「わいは骨に沿って流れてる感じやね」
「俺は心臓から広がっていく感じだな」
「身体の芯から広がっていく感じ」
　――それぞれが、自身の感覚を話します。
「やっぱ人それぞれなんだろうな」
「そうですね。これも色彩魔術を行使する上で、何かに関係しているのでしょうか？」

「どうなんだろうな？……教官!!」
俺は大声で教官を呼ぶ。
教官なら何か知ってるかもしれない。
「ん？　突然大声で人を呼んでどうした？」
「実は質問があるんです」
「何だ、言ってみろ」
「実は――」
俺が教官に質問をしようとしたその時、
「人によって”色脈”の感じ方に違いがあるのですが、色彩魔術を行使する上で何か関係があるのでしょうか！」
いきなり澪が割り込んできた。
「……人のセリフ取るの止めようや？」
「あっ……すみません……つい気になってしまって。気になることがあると止まらなくて……」
あはは……と、恥ずかしそうにはにかみながら謝る澪。
照れるんじゃないよ、まったく……非常に眼福です。
「まぁ、気にするな」
「すみません」

「……もういいか？」
「「あ、すみません」」
――息ぴったりで喋る二人を、危機感を持った眼差しを向けながら、一人の少女が頬を膨らませていました。

◇◇◇◇◇
ー麗奈ｓａｉｄー
「むむぅ……」
思い出すのは、数週間前にあった色彩魔術の訓練中の出来事。
あの時の琥太郎と澪の息はぴったりだったのです。
これは由々しき事態なのです。新たなライバル登場なのです。

澪のあの容姿と……む、胸は危険のです。〝えまーじぇんしー〟なのです。あれ？　使い方違ったかな？　ま、いっか。
そんな事より！　今重要なのは琥太郎に近づく女の子の影……！
現状危険なのは二人。
まずは、澪。
澪は琥太郎と息ぴったりだし、美人だし、スタイル良いし……。
次に、皐月。
皐月は絶壁だけど小動物みたいな感じで、明るいし、可愛いし。
二人は友達だけど、やっぱり恋愛となると違うと思うのです。
そもそも、二人ともコミュニケーション能力が高い。これはかなり不利な状況なのですよ。私は、昔はそうでもなかったけど、今は人の前だと家族でも緊張して、ついつい無口になってしまう。それに、いまだに琥太郎達にもこの状態のにまま。これはマズイ、かなりマズイのです。治したいとは思うけど、中々難しいものがある。だから、他の所で魅力を上げるしかないのです。琥太郎に久しぶりに会えた入学試験。あの時は少々大胆過ぎた気もしますが、やはり積極性は必要だと思うのです。思い立ったが吉日！　行動あるのみです！
まず顔です。だけど顔は簡単には変えることが出来ないので、せめてお肌のケアを大事にしよう。うん、そうしよう。
次にスタイル。スタイルは琥太郎がロリコンで無いことを祈るとして、皐月を除外。次に澪。あの胸は協力です。破壊力抜群なのです。しかし、希望はある！　それは、私のお母さん。お母さんの胸は澪など敵ではありません。それはもう、バインバインなのです。澪が丘なら、お母さんはマウンテンなのです。
つまり！　バインバインお母さんの血を受け継ぐ私もバインバインも一緒に受け継いでいる可能性が高い！　後はこの前呼んだ、『これで貴方も仲間入り！　～バストアップ体操～』の通りに体操をすれば……！
……ふっふっふっ、夢が広がります。これで、琥太郎もメロメロになること間違いなし。

◇◇◇◇◇

「ふっふっふっ……」

道のど真ん中で銀髪が煌めく少女が、二重面相のように表情をコロコロと変えたかと思えば、何かを企むような笑いをし始めましたわ。

「い、一体なんですの……」

謎ですの。この何の遮蔽物の無い道の真ん中で、笑っているなんて……。一体何を考えているのかです？

「見たところ……同じ一年生のようですわね」

普通、初参戦のランク戦において、一年生は上級生の実力を身を持って知ることを念頭に置いて行動しますわ。

一部のお馬鹿さんを除いて、態々目立つような行動を取るのは愚の骨頂。それとも、余程自信があるのかしら？

「～♪～♪～♪～♪」

「ッ!?」

鼻唄を歌いながら此方にスキップで近づいてきましたわ！

……もしや！　私の存在を見つけて、獲物を見つけたと思っているのかしら？　だとしたら、なめられたものですわね。良いでしょう。受けて立ってやりますわ。

「お待ちなさい！」

「――っ!?」（ビクンっ!!）

まさか出てくるとは思わなかったようですわね。

「……私？」

「他に誰がいるのかしら？」

「何の用？」

白々しいですわね。正確に私の位置を捉え、近づいてきた癖に。

「ふっ、分かっているのでしょう？　今更逃げるだなんて無粋なこと、仰らないでくださいまし？」

「ん、分かった。戦う」

「ふふっ、潔い人は好ましくてよ？　貴女の潔さに敬意を払って名乗るとしましょう。　一年生のスーリヤ・ヴァレンタインですわ」

「ん、桧並　麗奈」
「綺麗なお名前ですわね？」
「ありがと」
「あら？　桧並？　はて、何処かで……」
　うんん……思い出せませんわ。
「どうしたの？」
「いえ、何でもありませんわ」
　今はそれどころでは無いですわね。
「じゃ、行くよ」
「ええ、いつでもよろしくてよ？」
　ヴァレンタイン家の名に懸けて。
　……この勝負、勝たせていただきますわッ！

「きゅううう……」（バタリ）

　そんな声をあげて、倒れるヴァレンタインさん。
「ん、私の勝ち」
　目の前で倒れている、ヴァレンタインさんにそう呟きます。多分、聞こえてないと思うけど。
「それにしても、ビックリした……」
　今後の方針（恋愛）を決めた後、気分良く歩いてたのに、目の前の茂みからいきなりヴァレンタインさんが出てくるんだもん。しかもいきなり勝負を挑んでくるし……お嬢様な見た目とは裏腹に結構アクティブな人みたい。
　裏腹に、って言うのも、この人。金髪で、縦ロールで、加えて「〜

ですわ」、「～よろしくてよ？」……物語の中から出てきたみたいな人だったなぁ。
「確か、一年生って言ってたよね？」
だったら、また会えるかもしれない……もしかしたら、友達になれるかも。そしたら、お嬢様な暮らしぶりを聞けるかもしれない。そしたら……。
「……また会おうね、ヴァレンタインさん」
そう言って私は、また歩き出します。

◇◇◇◇◇
ー琥太郎ｓａｉｄー

――琥太郎が闘技場に着くと、丁度アナウンスが入りました。
『――みなさーん！　殺りあってますかー？　実況の高橋ですよー？』
「その言い方は何とかなんないのか……？」
『……なんで毎回物騒な呼びかけから始めるんスか？』
――峯麓は高橋アナに、呆れを含む眼差しを向けながら問います。
『いや、それがですね？　やっぱり、ただ実況するだけじゃ誰も聞かないんですよね。私よりも強い方なんて、そこらじゅうにいますから。なので！　一捻り入れた実況をしてみよう！　と、思いまして』
『……なんで物騒な実況に行き着いたんスか？』
『特に理由は無いです』
『そうっスか……』
――峯麓のその言葉は、闘技場にいる生徒の気持ちを物語っているようです。
『……それでは、現時点でのランク戦の1年生の順位を発表したいと思います！』
『その切り替えの早さを分けて欲しいっスよ？』
『嫌です』

『即答っスか!?』
　この二人は、どうして会話が成り立ってるんだ？
『今ランク戦は通称”振い落し”と呼ばれ、1年生の実力を主に測り、勧誘期間での参考とするのが、お馴染みですが、今ランク戦は例年に比べ実力の高い1年生が数多く揃っています！　なので、いつもはがら空きのこの実況席のある闘技場になんと！生徒がいるんです！　いやー、去年は一人だけだったので、とても嬉しいですねー』
『え？　生徒や解説の人は居なかったんスか？』
『えぇ、解説は今年からですし。そもそも、去年はリタイアする人はいましたが、全員大怪我によってそのまま治療院に直行してましたからね』
『じゃあ、1人で実況してたんスか？』
『そうです。冬なんかは、実況席に炬燵（こたつ）なんか持ち込んで、蜜柑なんか食べてましたからね。だから、峯麓さんが来てくれて私はとても嬉しいんですよ？』
『高橋さん……』
　――自分が求められていることの嬉しさに、思わず言葉後出る峯麓。この人、結婚詐欺に合いそうですね。
『だってこんなに弄り甲斐のある人が来てくれるなんて！』
『僕の気持ちを返せっス!!』
　ある意味期待を裏切らないな……このコンビ。
　ボケの高橋アナに、ツッコミ兼いじられキャラの峯麓さん。結構いい感じじゃね？
『ＨＡＨＡＨＡ☆　それではランキングに入りたいと思います』
『笑って誤魔化された!?』
『まずは第1位！　圧倒的な数の生徒を倒し、只今絶賛独走中！　水上雅也!!　しかも彼はなんと、イケメンです！』
　やっぱ雅也は強いな。所持ポイントまで開示してくれたら良かったんだけど、流石に無理か。
『最後の情報必要っスか？』
『続いて第2位！　またしてもイケメン！　その笑顔に既に何人堕と

されたか!?　青山輝樹！』
お？　あのいけ好かないイケメンが二位……だと!?
くっっそぉぉぉ……!!　めっちゃ悔しいぃ……。
今度決闘でも申請して、戦おうかな？
『だから、煽り文句って必要あるんスか？』
『どんどん行きましょう！　おっと！　またまたイケメン!!　その槍で、私を突いて♡　國原宗！』
「ブッ!?!?!」
――思わず吹き出す琥太郎。
あの人はいきなり何を言いってんだ!?
『っ!?　い、いきなり何を言い出すんスか!?』
――そう思ったのは峯麓も同じようでしたが、琥太郎は無理矢理思考を別の事へ変えました。
ふ、ふむ……宗なら青山をボコボコに出来そうなんだけどな。にしても、やっぱ強えよなぁ……宗も。
あ、そういや1位～3位まで、全員異彩が武具だな。
『――と、そんな言葉で決闘を迫られたことがあるそうです』
決闘……？
『決闘……？』
――琥太郎と峯麓の心は、見事にシンクロしています。どちらも苦労人気質だからでしょうか？
『あれれー？　峯麓さんは一体何だと思ったんですかねー？』
『そ、それは……う、ぅぅぅ／／／』
『初心なんですか？　乙女なですか？』
『ッ……』
頑張れ……峯麓さん……!!
それにしても、峯麓さんって意外と乙女なんだな。
『そんな涙目で睨まないでくださいよ～。……いや、あのマジで涙目でも威圧が洒落になんないので、勘弁して下さい』
『……高橋さんは意地悪っス……』
『あはは……まさかその手の事に関してここまで乙女で初心だとは知

らず……スミマセンでしただから睨むのやめて!?』
『……』
『拗ねないでくださいよぉ～』
『……真面目にやるっスか？』
『やりますとも！』
『……じゃあ、許してあげるっス』
『やったー！』
『お仕事するっスよ』
　峯麓さんや。そりゃぁ、ちいとばかし甘めぇってもんでさァ……なんか、変な喋り方になった。
『へい、喜んで！　続いて第４位！　彼の棍棒を操る姿は正に鬼に金棒！　剛力力斗！』
『名が体を表してるッスね』
『続いて第５位！　気付いた時には殺られていた！　暗走夜歌！』
　これが今話題の”キラキラネーム”ってやつか？
　俺は勘弁だな。
『またしても名が体を表してるッスね』
『何でも彼は、昔から影が薄く、隠れんぼなどをすると、いつも忘れられていたそうです』
『可哀想っスね……』
　さっきは勘弁だなんて言って悪かったな……。
『まだまだ行きます、第６位！　綺麗な薔薇には刺がある！　璉☒寺美咲！』
『彼女はグラビアアイドルとしても有名っスね』
『グラ……ビア……？』
『ど、どうしたんスか？』
　――高橋アナは自分の胸に手を置こうとしますが、垂直なため、おけませんでした。
　そして高橋アナは、辺りを虚ろな目で見回し、ある一点で止まります。
『な、なんスか？』

――峯麓を見つめる……いえ、峯麓の胴体から激しい自己主張をする2つの”メロン”に釘付けになっているその目から、更に光が消えていきます。
その間も、一頻《しき》りに自分の胸に手を置こうとしますが、やはりおけません。
『世の中って不平等ですよね……』
『……何の話っスか？』
『私、思うんです。みんな平等だと、個性がなくなってしまうけど、差が有り過ぎるのも良くないと思うんですよね』
『そ、そうッスね。世の中には”貧富の差”もあるっすからね』
『グッ!?　……貧富の差……』
『”貧しい人達”と富んだ人達”の差は、今も昔も激しいっスからね……』
『グフッ!?……貧しい人達……』
これ以上高橋アナのライフを削らないで!?
既に高橋アナのライフはマイナス値に突入しちゃってるから!?
――琥太郎の心の叫びも虚しく、峯麓はトドメの一言を告げます。
それも、無意識に。……天然って怖いですね。
『貧しい人達って一可《・》一哀《・》一想《・》ですよね……そう思うと、私は恵まれてるって思うんスよ』
『……』
――高橋アナは俯き、プルプルと震えています。そして、唐突に顔をあげます。
『峯麓さん』
――その顔は、まるで聖母の様に慈愛に満ちています。
『そう思うのなら、分けてくれますよね？』
『――え？』
――何故でしょう。高橋アナは、顔は聖母の微笑みですが、その背後に、阿修羅の姿が見えています。
高橋アナは両手をわきわきさせながら、峯麓に迫ります。
『そこまで、自分が恵まれている事に気づいているなら、分けてくれま

すよね？　平等っていい言葉ですよね……』
『あ、あのっ……それは一体どう言うことっスか……!?』
――思わず顔が引き攣ってしまう峯麓。しかし、高橋アナに最早周りの声は聞こえていません。
『いいから……いいからその乳寄越せやァ!!!!』
――遂に、高橋アナが暴走しました。
『ひゃあっ！……くっ……い、いきなり何をするんスか!?』
『何を？　……フフっ……もぎ取るに決まってるじゃないですか？』
『さ、させないっスよ!?』
――高橋アナが峯麓に両手で掴み掛かり、それを峯麓が両手で受け止める。
まるでプロレスの様な光景が実況席に広がっています。
『くぅ……！　なんて馬鹿力出してんスか！　誰かー!?誰か助けてー!?』
――峯麓の声を聞き、近くにいた教師陣が集まってきた。
『ハーナーセー!!　不平等ダッ!!　コノ世ハ、不平等ダッ!!』
――高橋アナ（覚醒）は、そんな言葉を残し、拘束具と共に、教師陣に連れていかれました。
「……」
――闘技場内を静寂が包みます。この闘技場にいる全員が、まだ今起こった出来事を飲み込めていないからでしょう。
な、何だったんだ……今のやつ……。
高橋アナは、一体……。
――すると、アナウンスがかかりました。しかし、それは実況席からではなく、校内放送によるものでした。
『えー、皆さん。　実況は、トラブルより、途中中断とさせていただき

ます。以上』

――それだけを言うと、アナウンスは切れました。

「「えええええええええ!?!?」」

嘘おぉぉ!? マジかよ。こんなんありかよ!? ホントにこの学校大丈――

「――いっつぅぅ……一応治療院に行っとこうかな……」

俺は右手を擦りながら、治療院に向け歩き出す。

俺は……負けた。